

Title	言語の接触と混交 : 日系ブラジル人の言語の諸相
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12923
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文科学 / Interface Humanities
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

*Osaka University
The 21st Century
CO2 Program
Interface Humanities
Research Activities
2002*2003*

Osaka University The 21st Century COE Program  Interface Humanities Research Activities 2002*2003

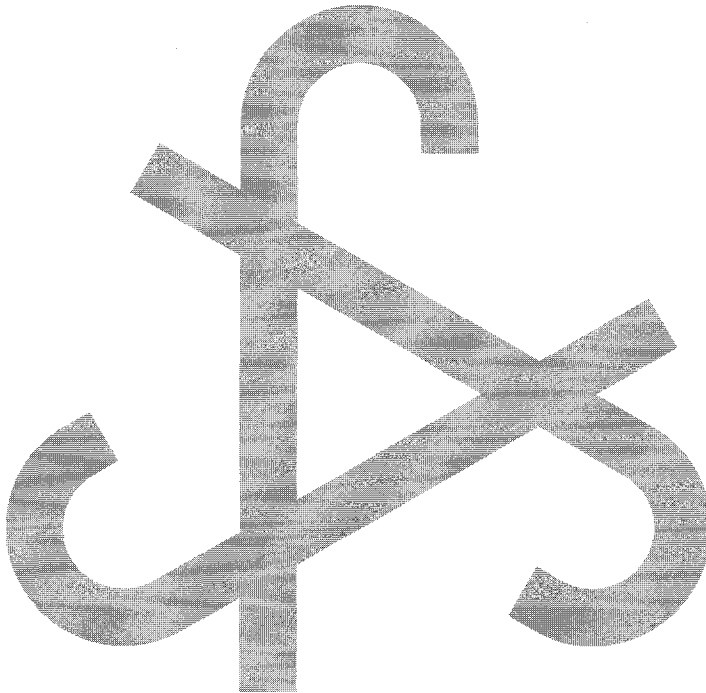
大阪大学21世紀COEプログラム
インターフェイスの人文学
文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科
2002・2003年度報告書

言語の接触と混交

Language Contact and Admixture

日系ブラジル人の言語の諸相

Sociolinguistic Perspectives on Brazilian Nikkey



Group

5

言語の接触と混交 構成メンバー

第1部

- 工藤真由美 〈事業推進者・日本側代表：文学研究科〉
馬瀬良雄 〈共同研究者：信州大学名誉教授〉
佐々木倫子 〈共同研究者：桜美林大学大学院〉
エレン・ナカミズ 〈共同研究者：京都外国語大学〉
山東 功 〈共同研究者：大阪女子大学〉
中東靖恵 〈共同研究者：岡山大学〉
李 吉鏞 〈RA(COE)：文学研究科博士後期課程〉
レオナルド・メロ 〈研究協力者：文学研究科博士前期課程〉
Elza Taeko Doi 〈ブラジル側代表：カンピナス州立大学〉
Ota Junko 〈共同研究者：サンパウロ大学〉
森 幸一 〈共同研究者：サンパウロ大学〉
Ninomiya Sonia 〈共同研究者：リオデジャネイロ連邦大学〉
平井可奈美 〈研究協力者：カンピナス州立大学〉
モラレス・松原礼子 〈研究協力者：サンパウロ大学〉
浅野卓夫 〈研究協力者：サンパウロ人文科学研究所〉

第2部

- 津田 葵 〈事業推進者・言語文化研究科教授〉
山下 仁 〈言語文化部助教授〉
横田睦子 〈特任教員(COE)〉
高阪香津美 〈言語文化研究科博士前期課程〉
前村奈央佳 〈言語文化研究科博士前期課程〉
新庄あいみ 〈言語文化研究科博士前期課程〉
服部圭子 〈言語文化研究科博士後期課程〉
リリアン テルミ ハタノ 〈甲南女子大学文学部多文化共生学科専任講師〉
森本郁代 〈独立行政法人通信総合研究所けいはんな情報通信融合研究センター 自然言語グループ専攻研究員〉
松尾 慎 〈東海大学文学院日本語文学系助理教授〉

目次

007 まえがき 真田信治

009 第1部 ブラジル日系社会と日本語

010 はじめに 記録・保存事業について 山東 功

014 第1章

ブラジル日系社会と日本 ―研究調査概要とその背景―

016 ブラジル日系社会の成立 ―日本移民小史― 森 幸一

020 アリアンサ移住地・スザノ入植地について 浅野卓夫

023 ブラジル多言語環境における日系社会の言語 Elza Taeko Doi

027 研究調査結果概略 ブラジル日系社会調査班

032 第2章

移民社会と言語接触 ―言語生活調査について―

034 日系社会調査と言語生活 森 幸一

052 言語生活調査概要 エレン・ナカミズ 浅野卓夫

060 第3章

談話資料から見えてくるもの ―移民社会と日本語の変容―

062 談話収録調査について 李 吉鎔 レオナルド・メロ

067 談話収録調査概要 中東靖恵

078 第4章

移民社会の言語問題 ―日系社会における日本語と日本語教育―

080 ブラジルの日本語教育 佐々木倫子

088 ブラジル日系人の「日本語」を巡る状況と言説 ―1908年から1941年まで― 森 幸一

105 おわりに 工藤真由美

目次

107	第2部 日系ブラジル人をとりまく日本社会 — 通時的、共時的次元から —
109	はじめに 津田 葵
110	第1章 ブラジル移民への菜(しおり) — 横浜・神戸・船上の移民教育 — 横田睦子
124	第2章 日系ブラジル人のコミュニケーション: 広島県東部地域の事例研究
125	まえがき 津田 葵
126	カトリック教会における外国籍信徒との共生への歩み 広島教区における日系ブラジル人を中心に — 津田 葵
140	日系ブラジル人の家庭をとりまく現状 — ことばの問題を中心に — 高阪香津美
150	日系ブラジル人の子どもたちと日本の学校社会 前村奈央佳
160	日系ブラジル人をとりまく地域社会における現状と課題 新庄あいみ
169	職場における共生に向けて — 日本人と日系ブラジル人従業員の意識調査から — 服部圭子
180	第3章 地域社会及びNGO/NPOの取り組み
181	まえがき 山下 仁
182	地方自治体の取り組み: 滋賀県内の市町村を例に リリアン テルミ ハタノ
187	共生に向けた地域の日本語教室の役割と課題 森本郁代
195	ホスト住民の多文化共生に関わる意識 — 大阪府民に対するアンケート調査より — 松尾 慎
203	日系ブラジル人をめぐる国会での答弁 山下 仁

まえがき

真田信治

大阪大学大学院の人文系研究科(文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科)は、現在、21世紀COEプログラム「人文科学」分野での拠点として、「インターフェイスの人文学(Interface Humanities)」を課題名とする事業を推進している。

このプログラムは、文化の生成をつねに複数文化の接触面で動的に見ていく(インターフェイスの人文学)への、人文学の創造的変換を図ることを目的としたものである。具体的には、複数文化の激しい接触のなかで21世紀の社会を的確に捉えるために、人文学を、二つの新しい知、つまり、異なる複数文化の接触と錯綜、そして軋轢などを国家・地域横断的にみる(横断的な知)と、文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生の現場、専門家と一般市民とをつなぐ(臨床的な知)を核とするものへと構造変換しようとするものである。

大阪大学大学院人文系研究科では、複数文化の絡み合いのなかで発生する複雑な社会問題に現実的な対応ができる新しい人文学の拠点形成をめざしているのである。いくつかの研究班が組織され、活動しているが、研究班4(プロジェクト「言語」班)では、「言語の接触と混交」をテーマとした調査・研究を展開している。

本報告書は、その研究成果の一部である。第1部「ブラジル日系社会と日本語」は、ブラジル日系社会における言語接触の実態について、国際交流基金サンパウロ日本文化センターの後援のもとに、ブラジル諸大学における日本語関係学科所属の研究者と連携して記述したものである。国際的かつ学際的な共同研究として位置づけられよう。第2部「日系ブラジル人を取り巻く日本社会—共時的・通時的次元からの諸要因・分析・課題」では、日系ブラジル人を取り巻く日本社会をフィールドとして、母語によって自らを表現する権利と、地域社会にアクセスする権利という両面から、異言語間の相互理解の問題を考えた。

プロジェクト「言語」班では、人間相互のコミュニケーションあるいは言語の機能を特に重視した応用社会言語学の立場からの研究を通して(インターフェイスの人文学)に接近する。

2003.9.30(大阪大学21世紀COEプログラム プロジェクト「言語」班代表者)

Interface Humanities

Group 5

言語の接触と混交

日系ブラジル人の言語の諸相

第1部

ブラジル日系社会と日本語

はじめに 記録・保存事業について

山東 功

本研究事業の名称は「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」である。ブラジル日系社会における日本語の実態について、ブラジル諸大学における日本語関係学科所属の研究者と連携して遂行される国際共同研究として組織されている。具体的には、

- (1) ブラジル日系社会の総合的言語生活調査研究
- (2) ブラジル日系社会の日本語談話資料の記録保存事業・予備調査結果概要
- (3) ブラジル日系社会の言語および言語教育に関する先行研究・文献資料調査研究
- (4) ブラジルにおける日本語研究業績紹介および日本における日系人の言語研究業績紹介
- (5) ブラジル年少者に対する多言語下日本語教育の開発的研究

上記五項目を中心に、日系社会の言語に関する問題を立体的にとらえていこうとするものである。

はじめに、この研究事業についての概略を示し、以下各章で展開される議論の前提について言及することにした。

研究調査に向けて—シンポジウムについて—

研究調査に先駆けて、2003年3月11日(火)に「越境する日本語—ブラジル日系社会の言語をめぐって—」(13:00~16:30 於大阪大学文学部中庭会議室)と題する国際研究会(シンポジウム)が開催された。開会挨拶には真田信治(事業推進者)があたり、工藤真由美(事業推進者)から次の特色をもった研究事業である旨の説明がなされた。(1) 総合的な言語調査研究を実施する点。これまでのブラジル日系社会の言語研究の成果を踏まえつつ、奥地農村と近郊農村との比較という総合的な言語生活調査を実施するなど、本格的なブラジル日系社会の言語調査が計画されていること。(2) 言語調査と並行して、文化人類学や社会学、地域研究といった学際的見地から、ブラジル移民に関する文献資料調査も実施される点。特にブラジル日系社会の日本語を記述した言語資料の探索は、他の学問分野との交流を可能にする上でも大いに期待できること。(3) 包括的で緻密な研究事業が組織されている点。本研究事業は日本とブラジルの日本語研究者が協力し合い、共同作業として歩調をあわせるという、人文科学研究においても大変望ましい姿を先取

していると言えること。以上の三点である。各報告者から以下の題による報告がなされた。

馬瀬良雄「急がれるブラジル日系社会の言語研究」

Doi Elza Taeko「ブラジル多言語環境における日系社会の言語」

森幸一「ブラジル日系人の「日本語」と「コロンビア語」をめぐる動向と主要言説—1908年～1960年代まで—」

佐々木倫子「ブラジルと日本を結ぶ言語調査研究」

以下に、研究調査内容を簡潔に紹介した馬瀬の挨拶文を掲載する。なおDoi報告は第1章で、佐々木、森各報告については第4章で改めて言及する。

馬瀬良雄「急がれるブラジル日系社会の言語研究」

1908年、移民790余名を載せ笠戸丸がサントス港に投錨して95年、人文研(2002)によれば日系人2001年推計人口1,394,279人。日系社会活躍層は2世から3世に移り4世も活躍を始めた。この状況下、1世の母語日本語は、ポルトガル語の接触でどう変容し、2～4世代に伝えられたか、また優勢なポルトガル語に呑み込まれるのか。興味深いテーマがここに展開される。

人文研(2002)の「家庭内人間関係別使用言語」で、1)夫婦間、2)親子間、3)子供間の日本語使用を見る。全体平均で1)26.4%、2)15.9%、3)3.4%。日系社会における日本語の危機的状況は一目瞭然である。そしてその分、ポルトガル語の使用ポイントは上昇する。

そこで「急がれるブラジル日系社会の言語研究」となる。班名ともなっている「言語の接触と混交」は純粋な言語学的立場のほか、社会言語学、言語教育、言語政策学等からの学際的・総合的アプローチが可能だけでなく、必要である。

資料収集ではブラジル日系社会の言語の全体把握が要請される。人文研(2002)の資料には、ビラ・カロン、マリंगा、スザノ福博村、アリアンサが載り、数値は都市と農村とで異なる。両形態地域調査の必要性が浮上する。人文研調査は同世代と親子間の言語使用に限る。3世代同居の時、祖父母と孫はどう意思疎通を図るかも、望まれる情報である。アンケート方式のほか、録音・録画による言語使用状況資料が必要なことも論をまたない。

言語能力は話す・聞くのほか、読む・書くに及ぶ。調査はこれら全体を覆わねばならない。日本語能力では、日本語教育がどう行われ、現在はどうであるかの調査が期待される。例えば、アリアンサには日本語学校4校があり、日本の支援も行われている。教育は日本語保持・普及、日本文化の理解・摂取にどう成果をあげたのか。各種日本語学校のほか、ブラジル学校第2言語日本語学習における同上の資料も希望したい。この問題はポルトガル語教育の問題とバラレルに調査研究されるべきものである。

現在、日本への出稼ぎ型Uターン現象で、2001年、在日ブラジル人は250,000人を超えた。ここでは彼等の帰国時、彼等の子弟を待ち受ける問題をとりあげる。ポルトガル語の学力不足からくる学業の遅滞とそれに起因する学校生活への不適応は、新たな問題を提起する。

滞日経験者の増加や衛星放送の普及で、ブラジルの日本語事情はどう変わったか。ブラジル日系人Uターン現象で起こった日系コロニアの空洞化は、彼等の言語環境にどう影響したか。これらの問題も考えて行かなければならない。

収集資料は単に言語研究にとどまらず、広い研究分野で将来にかけて永く活用されよう。

以上、ブラジル日系社会の言語研究が緊急に行われるべきこと、さらに留意点の幾つかを述べた。日系人社会の言語の推移が把握できる最後の機会である。これらを踏まえた研究計画が立てられ、「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」は、国際的・学際的・総合的プロジェクトとして、工藤真由美教授をキャプテンに就航した。関係者としてこれを心より喜ぶとともに、大方のご指導・ご支援を仰ぎたい。

研究調査事業の流れと概要

初年度においては、共同研究者との第1回研究会を2002(平成14)年12月15日に、さらに日本では第5回研究会を2003(平成15)年1月18日に、第7回研究会を2003(平成15)年2月17日に実施し、次年度における本格的調査の準備を検討した。具体的には、在東京ブラジル日系家族に対する予備調査を1月に実施(中東靖恵、レオナルド・メロ)、昨年度にブラジル側において収集された談話資料の一部文字化作業を試行しつつ、文字化原則の方法論を検討(中東、李吉鎔)、さらに社会言語学的見地から本格的に構成された言語生活調査票の考案(エレン・ナカミズ、李)がなされた。また、ブラジル日系社会の日本語に関する先行研究並びに文献資料の調査を実施(山東功)し、約100件の研究論文を収集した。同期間中、ブラジル側においてもElza Taeko Doi(ブラジル側代表)の指揮下のもと、ブラジル内研究者共同研究会が4回組織され、言語調査に関する具体的手順や方法論について討議が行われた。討議の結果、ブラジル日系社会の調査研究に関しては、談話録音事業と言語生活調査、文献調査の三点が最重点項目であることが確認された。さらに、いわゆるコロニア文学と称されるブラジル日系社会の文学作品や、日系日本語新聞、日系移民一世の自伝や伝記といった文献に対する予備調査もブラジルにおいて継続的に実施されている(森幸一)。2003(平成15)年3月10日には日本側とブラジル側との合同研究会を実施、翌3月11日には、先述のシンポジウムが開催された。

以下に具体的な調査研究内容についての概略を示す。

I. ブラジル日系社会の総合的言語生活調査研究

表題研究は本研究事業の根幹をなすものであり、ブラジル日系社会における本格的な言語生活調査研究として位置付けられるものである。具体的な言語生活調査に先立って、在東京ブラジル日系家族に対する予備調査を1月に実施し、その過程で言語生活調査実施上の問題点に関する総点検を実施した。この結果は中東靖恵、レオナルド・メロ「ブラジル日系社会における言語の総合的研究に向けて(1)」(『岡山大学文学部紀要』39、2003)で公表された。さらに社会言語学的見地から構成された言語生活調査票(エレン・ナカミズ、李)を考案した。

II. ブラジル日系社会の日本語談話資料の記録保存事業・予備調査結果概要

ブラジル日系社会における言語の記述と分析に先立ち、ブラジル在住の日系1世の談話録音資料(ブラジル・カンピナス州立大学所蔵:ブラジル側研究代表者Elza Taeko Doi収録)を文字化することになった。約1時間の録音テープを4名で分担し、文字化作業を行った結果、ブラジル日系1世のフォーマル場面における日本語運用と日本語とポルトガル語が接触・混交することによって生まれた言語事象の実態について、その一部を明らかにすることができた。

III. ブラジル日系社会の言語および言語教育に関する先行研究・文献資料調査研究

ブラジル日系社会の日本語に関する研究史的定置とその検討を行い、成果の一部は山東功「ブラジル日系人の日本語への視点」(『女子大文学』54、2003)で公表された。ブラジル日系人の日本語に関する研究については日系人の手による生活誌的記述から出発した関心の時期(1960年代以前)から、日本からの研究者派遣による国語学・言語学的研究時期(1970年代)を経て、社会言語学、日本語教育学的観点からの研究時期(1980年代以降)という展開が見受けられる。また、本論文では書き言葉資料の有用性可能性についても言及した。

IV. ブラジルにおける日本語研究業績紹介および日本における日系人の言語研究業績紹介

ブラジルにおける日本語研究業績についての紹介を主たる目的としている。ブラジルにおける日本語研究文献は多数存在しているにもかかわらず、そのほとんどがポルトガル語によるものであったため、日本国内での紹介が十分になされてこなかった。本研究事業は、世界の中の日本語という観点から外国における日本語研究の意味を総括的に検討していく上でも大いに有意義なものである。

V. ブラジル年少者に対する多言語下日本語教育の開発的研究

表題研究については、本格的な実施を平成16年度以降に予定しているが、本年度までに「ブラジル年少者に対する日本語教育に関する調査研究」が2003年1月に予備調査として佐々木により実施された。

〈大阪女子大学〉

言語の接触と混交

日系ブラジル人の言語の諸相

第1部 ブラジル日系社会と日本語

第1章

ブラジル日系社会と日本語

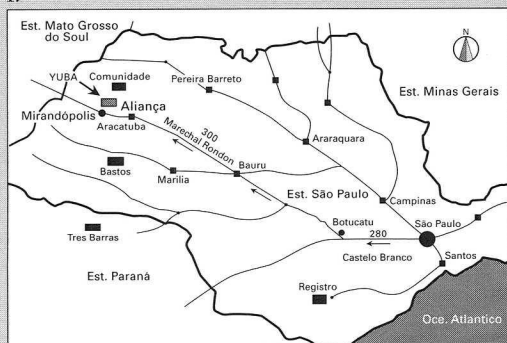
— 研究調査概要とその背景 —

今回の研究調査に関しては喫緊の課題が存在していた。それは日系移民社会の急速な変容に関係している。特に言語の問題に関しては、日本語からポルトガル語への移行が進んだ結果、移民社会調査データにおける言語項目に対して、再検討が迫られるようになったからである。いわゆる観念的な「日本語」と、実際に話される日本語とは大きく異なっているであろうし、何よりも旧来の移民政策が終了した今日、日系移民社会にとって「日本語」の果たす意味が大きく変化していったのである。本プロジェクトのねらいは、この日系移民社会に対する視線への問題提起そのものでもあった。

本章では、以下各章で示される研究調査結果把握の一助として、研究調査全体から明らかになったことを概略的に解説することとしたい。詳細なデータについては別稿にゆだねるが、本章によって今回の研究調査がどのようなものであったのかは、おおよそ理解できよう。なお概略に先立って、ブラジル日系移民成立小史や、今回の調査地であるアリアンサやスザノの地誌的解説を行っている。また、ブラジル移民社会の言語についての解説として、シンポジウムにおけるDoi報告を掲載する。

〈山東 功〉

1.



2.



3.



4.



1. サンパウロ州略地図(アリアンサ・ユバ農場作成) 2. アリアンサ入植地風景 3. ユバ農場図書館 4. スザノ福博村風景 (写真:中東靖恵)

ブラジル日系社会の成立—日本移民小史—

森 幸一

ブラジルへの日本移民は1908年第一回笠戸丸移民に始まり、第二次世界大戦前までに総数約18万8千人の移民がブラジルに入国している(ブラジル労働商工省移民局)。戦後期は1953年に戦後移住が再開され、90年代初頭までに約5万4千人がブラジルに渡航しているものの(この数値は93年までの国際協力事業団扱い移住者数)、80年代には移住者数が急減(注1)、実質的に「移住の時代」は終焉している。戦前、戦後期双方で約24万人の日本人がブラジルに渡航している。

表1はブラジルへの日本移民入国数を四時期に区分して示したものである。戦前期を1924年で区分したのは1924年に、サンパウロ州政府による渡航費支給廃止を受けて、日本政府による渡航費支給が決定され「国策」移民となるという大きな転換があったことに基づいている。この表から、ブラジルへの日本移民は第2期(注2)に全体のほぼ6割が集中していたことが看取されるが、この時期における移民の集中的渡航は後述するように、二つの国家ナショナリズムの狭間でブラジル日本移民の「人となり」を強く規制することになった。

戦前期における日本移民の特徴は(1)その大半が多民族的構成を特徴とするサンパウロ州内のコーヒー耕地(Cafezal)での契約労働移民であったこと(ブラジル人や他の民族集団との集団的持続的な接触)、(2)サンパウロ州政府の移民政策として12歳以上の稼働力三名以上を含む「家族」移民を原則としていたこと(女性、子ども、老人などの存在)、(3)その大半が「出稼ぎ」を目的としていたこと、(4)日本移民の出身地別構成では西日本出身者が卓越していたこと、などにまとめることが可能である。これらの特質はブラジルにおける日系人の「言語」のあり様を大きく規制する

基本的ファクターとなっている。

表1 ブラジルへの日本移民入国数(1908-1963)

時代区分	入国数	比率
第1期(1908-1923)	32.266	13.3%
第2期(1924-1941)	156.349	64.6%
第3期(1942-1951)	151	0.06%
第4期(1952-1963)	53.405	22.1%
合計(1908-1963)	242.171	100.0%

大半の戦前移民の場合、農業契約労働者(コロノ・Colono)としてコーヒー耕地で就労したが、このコロノ制度は奴隷制遺制ともいうべき労働制度であり、コロノとして貯蓄を行い、日本へ「錦衣帰国」を実現する条件はほとんど存在しなかった(注3)。この条件にサンパウロ州奥地における大土地所有制の崩壊、サンパウロ市の工業化に伴う人口増加などの諸条件なども加わり、日本移民の間に、より中・長期的な出稼ぎ

[出典] 前山隆(2001)「同伴移民、妻移民、子供移民—ブラジル日系女性移住体験を中心に—」『阪南論集 人文・自然科学篇』36-3

戦術が、自営農戦術というかたちで析出されるようになる。この戦術は植民地やコロニアと呼ばれた日系地域共同体の形成を随伴するものであり、すでに1910年代から、こうしたエスニック共同体が創設され、その最盛期である30年代には500とも600とも推定される地域共同体がサンパウロ州を中心にして存在していた。

ブラジルへの日本移民の移民政策と関連した「家族」構成の特徴は、第一に出稼ぎ移民として有利な労働力構成が目指され、若い「家族」構成となっていたこと、第二に女性、子どもなどを含む構成であったことなどである。より中・長期的な出稼ぎ戦術の中で、移民間の大きな問題の一つは日本へ帰国した際、ブラジルで成長した子どもの日本社会への再適応問題であった。この懸念から、植民地という地域共同体には日本(語)学校が創立されることになり、そこで日本語教育や日本人教育が行なわれた。中・長期的な出稼ぎ戦術の中、日本移民の経済的安定(上昇)や植民地への定住化が進むと、1920年代から数多くの日本語新聞を中核とする日系メディアが出現するようになる。いわば、地域は勿論、地域を越えたブラジルで「エスニック日本語共同体」が形作られていった。地域共同体の形成は移民がもつ様々な人間関係一同郷・同県、同船、親族など一を通じて行なわれた。その一方で、初期にはより有利な「金儲け」を目指しての活発な地域的移動も繰り返された。こうした動きは前述の移民の出身地構成の力関係と交錯しながら、特徴的な「日本語」を想像してきた可能性が高い。

1920年代後半から終戦直後まで、こうした地域共同体は二つの国家ナショナリズムの強い影響を受けるようになる。日本語教育はより「国語」教育的様相を強くし、国語教育や天皇崇拜儀礼の実践を通じて「日本臣民」を構成するという目的をもつものに変貌を遂げた。一方、30年代の一連のナショナリズム政策は、外国人移民のブラジルへの同化や子弟の「ブラジル国民」化を目的として展開された。植民地に形成された日本(語)学校はブラジルの教育制度に基づく「ブラジル学校」に変わり、日本語教育は違法な存在となり、外国語出版物は廃刊に追い込まれていった。二つのナショナリズムに大きく規制されながら、日本移民はその子弟教育(理想像)のモデルを析出していったが、伯主日従主義、日主伯従主義にしろ、和魂伯才論にしろ、そのモデルは内部に矛盾を抱え込んだものであった。

第二次世界大戦は戦後、移民が新しい生活戦術を析出する上で重要ないくつかの状況の変化をもたらした。一つはブラジルが第二次世界大戦の戦禍の外側にあって、特に日系人の従事する農業部門が好景気となり、財産を築いたこと、日本の敗戦により帰還すべき祖国を喪失したこと、「ブラジル国民」として育つ二世の存在などの状況から、ブラジルへの永住という新たな生活戦術とそれと交錯する新しい自己観=「コロニア」人が析出されていった。コロニア・アイデンティティの析出プロセスは言葉の領域においては、自らが話す「日伯混成語」「ポルトガル語交じりの日本語」

という言葉に、新たに「コロナ語」というレッテルをはり、その言語を日本の日本語からひきはなし、「ブラジルの日本人」の話す言語の独自性[特殊性]を主張していくというものであった。

1950年代からは一時、活動を停止していた地域日本人会(文化協会という名称のもと)が再組織化され、エスニック中央組織も生まれた。日本語教育も50年代初頭に公式に再開され、50年代後半からは「エスニック日本語教育」をめざす教科書製作運動も展開された。しかし、こうした日系エスニック組織は80年代を境に、主要な構成主体であった一世の減少、高齢化などを主因としながら、その求心力を喪失しており、活動の低下や会自体の消滅なども起こってきている。一方、日本語教育は1970年代以降、ブラジル—日本間にトランスナショナルな教師養成システムや研修・留学システムが構築され、パラダイムを継承語から外国語としての日本語教育へとシフトさせながら、現在に至っている(注4)。

永住主義の析出は子弟の高学歴取得による上昇戦術と交錯しながら、サンパウロ市を中心とする日系人の都市移動を活発化するという動きを随伴した。1958年時点では、当初ほとんどが農村部に入った日系人口のうち、農村部居住は全体の55.1%に減少し、サンパウロ市などの市街地居住が44.9%に達している。そして、1988年当時では日系人口の市街地居住は90%程度となり、日系人は優れて都市居住者となっている。市街地への集中は日系人の社会経済的の上昇戦術(高学歴取得)とも関連して、58年時点で56%と卓越していた農牧水産業など第一次産業従事人口を1988年時点では12%にまで減少させ、専門技術職(16%)、管理事務職(28%)といった自由業やサラリーマンなどのホワイトカラー職種を増加させている(注5)。1958年時点で43万人ほどであった日系人口の地域的分布をみれば、その76%までがサンパウロ州に居住、以下、パラナ州18%、マットグロソ州2.1%となっている(注6)。

30年後の1988年には日系人口(注7)は約128万8千人と推定され、その地域的分布ではサンパウロ州居住者が70%を越えて卓越、中でもサンパウロ市に総人口の27%、大サンパウロ都市圏に14%程度が集中していた。サンパウロ州に次いで日系人口が多いのはパラナ州を中心とする南部で全体の12%が集中し、以下中西部4%、北部3%、東北部2%となり、30年前よりも人口の地域的拡散が進行している。日系人口を世代別にみると、移民=一世人口は全体の13%、全体の8割以上がブラジル生まれの日系人となっている。世代別人口比を示せば、二世31%、三世41%、四世13%、五世以下0.3%と三世中心の人口構造となっている。日系人の異民族結婚(Intermarriage)も30年間で増加し、88年では完全夫婦組数の46%が日系人と非日系人の夫婦となっている(注8)。

ブラジルへの日本移民が実質的に終焉した1980年代には、日本の労働市場における単純労働力不足が顕著になり、しかもブラジル経済は「失われた80年代」と呼ばれるように失速し、中間層の

主体となっていた日系人の生活は逼迫していった。こうした二国の状況を主要なプッシュ・プル要因として、80年代半ばから移民及び二重国籍取得二世を中心にする本邦就労現象、いわゆる「出稼ぎ」現象が発生した。この現象はその後、90年3月のコロールプラン（銀行預金封鎖措置）、90年6月の入国管理・難民救済法改正などによって、日系二、三世及びその配偶者に就労可能な査証が与えられることによって拡大した。現在、約27,8万人程度のブラジル国籍者（日系・非日系を含むが日本国籍を保有する一世及び二重国籍者は除外）が日本に居住している。出稼ぎ現象の発生から現在に至るまでに、この現象の内容はかなり大きく変容を遂げ、現在では出稼ぎの定住化（滞在の長期化）や反復化が顕著になり、それに伴い、出稼ぎを巡る問題も生活者としての問題（子弟の教育・非行などの問題、地域社会との共住問題、アイデンティティの問題など）へと展開してきている（注6）。

（サンパウロ大学）

- 1 ———— 戦後移住（国際協力事業団扱い）のピークは1959年の7041人をピークに以後減少傾向を辿り、82年以降100人台を割り込み「移住の時代」は終焉した。
- 2 ———— 国策移民体制が確立していくこの時期（1929年）には、アマゾン流域原生林地帯へ日本移民が導入され、いわゆる「アマゾン移民」も開始された。
- 3 ———— 斎藤廣志（1960）『ブラジルの日本人』東京 丸善書店
- 4 ———— 日系人の言語生活は日本語とポルトガル語の併用からポルトガル語中心の構造へと変質している。日本語は家庭ドメインからも消滅しつつあるのが現状である。この点に関しては、サンパウロ人文科学研究所編（2001）日系社会実態調査中間報告書『サンパウロの家庭内使用言語の項参照のこと。また、パラダイムの転換については太田亨（1997）『海外における日本語教育の連携—ブラジル』『日本語学（日本語教育—21世紀への展望）』16-6 明治書院 203-210、日本語普及センター編（1996）『'95（第4回）日本語シンポジウム記録書 ブラジルにおける21世紀の日本語を考える』日本語普及センターなどに詳しい。
- 5 ———— 日系人はブラジル社会における中間層としての地位を占めていったが、その過程に関しては、Koichi MORI [1998] "Der Brasilianische Nikkei alas Mittelstandsbürger" pp.78-90 参照のこと。
- 6 ———— 鈴木悌一（1964）『ブラジルの日本移民：記述編』東京大学出版会 東京
- 7 ———— 1987,1988年当時の日系人口の人口学的特徴に関しては、サンパウロ人文科学研究所編『ブラジルに於ける日系人口調査報告書—1987・1988—』アンパウロに詳しい。
- 8 ———— サンパウロ人文科学研究所編（1989）『ブラジルに於ける日系人口調査報告書—1987・1988—』
- 9 ———— 森幸一（1991）『ブラジルからの日系人『出稼ぎ』の推移』国際協力事業団編『海外移住』pp.144-164 東京（2001）『還流型移民としての（デカセギ）』森廣正編『国際労働力移動と外国人定住』（法政大学出版会）

【参考文献】

- 移民八十年史編纂委員会編（1991）『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会
- 太田亨（1997）『海外における日本語教育の連携—ブラジル』『日本語学（日本語教育—21世紀への展望）』16-6 明治書院 pp.203-210
- 斎藤廣志（1960）『ブラジルの日本人』丸善
- サンパウロ人文科学研究所編（1989）『ブラジルに於ける日系人口調査報告書—1987・1988—』（2001）『日系社会実態調査中間報告書—2000・2001—』
- 鈴木悌一編著（1964）『ブラジルの日本移民：記述編』東京大学出版会
- 日本語普及センター編（1996）『'95（第4回）日本語シンポジウム記録書 ブラジルにおける21世紀の日本語を考える』日本語普及センター
- 前山隆（2001）『同伴移民、妻移民、子供移民—ブラジル日系女性移住体験を中心に—』阪南大学学会編『阪南論集 人文・自然科学篇』36-3 pp.1-14
- 森幸一（1991）『ブラジルからの日系人『出稼ぎ』の推移』国際協力事業団編『移住研究』28 pp.144-164（1998）"Der brasilianische Nikkei alas Mittelstandsbürger" pp.78-90（2001）『還流型移民としての（デカセギ）』森廣正編『国際労働力移動と外国人定住』法政大学出版会

アリアンサ移住地・スザノ入植地について

浅野卓夫

アリアンサ移住地の民族誌的・歴史的背景

アリアンサ移住地は、サンパウロ州最西端地域ミランドポリス郡の大規模日系地域共同体である。ちなみにサンパウロ市からはおよそ600キロ離れ、先述の「日系社会実態調査」によれば、この奥地農村型の地域では約180戸の日系世帯、およそ640名の日系人が居住し、日系世帯の約8割が農牧畜業を生業としている。アリアンサは3つの移住地から成り、総面積は9000アルケール程度(1アルケール=2.42ヘクタール)といわれている。各移住地では第一アリアンサ文化体育協会、第二アリアンサ鳥取村自治会、第三アリアンサ富山村文化協会というエスニック団体が存在し、それらを包括する全アリアンサ文化協会連合会も存在する。そしてこれら各日系文化協会は、それぞれが会館や運動施設や日本語学校を保有し、入植際や慰霊祭、あるいは運動会やスポーツ大会といった各種行事を行うなど、移住地の社会運営の中心的役割を果たし、また年齢性別組織である青年会・婦人会・老人会もそれぞれ独自の活動を行っている。なおアリアンサ移住地では、各文化協会所属の日本語学校が資金助成や教師派遣(第二・第三のみ)の点で、移住地創設時の「母県」から支援を受けるなど、日本との国際的な関係性が他の日系地域共同体と比較して強いといえる。

ここでアリアンサ移住地の歴史を簡単に振り返っておこう。日本政府は1910年代から1920年代にかけて、農村部の経済疲弊の打開策として海外への国策移民を開始し、ブラジルでも官主導型の植民地を建設したが、1921年発足の信濃海外協会は、従来の出稼ぎ移民型でもこのような国策移民型でもない、移住者の自治協同運営による「定着型」の移住地建設運動に乗り出した。1924年、信濃海外協会は当時のブラジル政府が奥地振興策として売り出したサンパウロ州内陸部の土地を購入し、第一アリアンサ移住地を建設、翌年日本国内で分譲を開始した。なおこの信濃海外協会とアリアンサ移住地建設は、青年の海外移住を促進するプロテスタント系の苦学生支援団体・日本力行会が深く関わり、この移住地では「コーヒーよりも人をつくれ」という理念が掲げられていた。1926年、信濃海外協会は鳥取海外協会と協力して第二アリアンサ、熊本海外協会がヴィラ・ノーヴェア移住地を開設し、翌1927年、信濃海外協会が富山海外協会と共同で第三アリア

ンサを開設した。ただしこれら移住地は、道路や学校や産業施設などインフラ整備不足の問題や自治経営の困難から、後年、国策移住の現地機関「ブラジル拓殖会社」へと経営権を移管する結果となった。なお初期アリアンサ移住地の主要農産物はコーヒー・米・雑穀などであり、ついでアリアンサ産業組合の主導によって30年代後半から40年代頃は綿作や養蚕が行われ、当地域は経済的最盛期を迎えた。しかし第二次世界大戦後は、養蚕業の衰退、綿花価格の下落など厳しい経済状況が続き、戦後は一時養鶏業によって盛り返したが、今日では果樹や蔬菜類の生産、牧畜業などが主である。

ところでアリアンサ移住地といえば、俳句・移短歌など「移民文芸」の発祥地として知られているが、「弓場農場」という特異な日系共同農場の存在も有名である。1934年弓場勇をリーダーとする青年数名が、「祈り、耕し、芸術を愛する」という理念を掲げる農場を創設し、現在では80名ほどの構成員が共同で労働し、あらゆる財産を共有しながら生活している。農場の人々による「ユバ・バレエ団」の舞台公演は、当地の文化創造運動を代表する活動の一つであり、クリスマスの時期に開催されるバレエと合唱と演劇の公演は、遠方からも大勢の客が訪れるこの地域最大のイベントとなっている。

スザノ福博村の民族誌的・歴史的背景

福博村は、サンパウロ市から東に向かって約30キロの距離に位置するスザノ市南部の近郊農村型日系地域共同体である。サンパウロ人文科学研究所の「日系社会実態調査」によれば、この地域では約140戸の日系世帯、およそ510名の日系人が居住する。かれらの生業は半農半商型を特徴とし、スザノ市やサンパウロ市の都市部へ通勤する都市産業従事者も少なくない。なお、当地域では「福博村会(Sociedade dos Amigos do Bairro das Palmeiras)」と呼ばれる日系団体が存在し、スザノ市のヴィラ・イペランジャ地区、パルメイラ地区、チジュコ・プレット地区、バルエリ地区で暮らす、様々な社会経済的背景を持つ日系人を包摂するエスニック集団として機能しており、2001年時点では105名の会員が存在した。福博村会は会員の居住地域ごとに10区に分かれ、これら地域区分は村会からの連絡単位、冠婚葬祭の際の扶助組織として機能している。村会の主要活動としては、新年拝賀式、慰霊祭、運動会、敬老会、十年毎の入植記念祭などの年中行事、また日本語学校の運営などがあげられ、年齢性別組織である青年会・婦人会・老人会もそれぞれ独自の活動を行っている。

福博村の歴史は、1931年の日本人移民家族のこの地域への転住をもって始まる。初期の主要な農産物は蔬菜類がほとんどで、小規模の家族労働型の農業経営を主とした。ちょうどこの時期

は、世界恐慌とブラジルのコーヒー不況などの経済的条件が重なり、コーヒー大農場の契約労働者であった日本人移民が、それまでの短期出稼ぎ型の志向性から、借地農・自営農となり「植民地（日本人移民の集団地）」を形成する長期出稼ぎ型のそれへと生活戦略を転換させた時期であった。こうした歴史的状況の中で、1935年、「福博日本人会」が創設されると、かれらによって土地開拓や道路整備、子弟教育のための学校建設が進められ、当地域でもいわゆる「植民地」が形成されることとなり、日本人入植者も増加していった。第二次世界大戦を契機として日本人会や日本語学校は一旦解散したが、戦後「福博日本人会」は「福博村会」と改称し、1940年代後半から1960年代にかけて、グルッポや日本語学校の校舎や青年会館などの建設、「福博村実態調査」や入植記念慰霊祭などの実践を通じて、エスニック地域共同体としての基盤が固められた。60年代半ば、主要産業は養鶏業へ移行し、ブラジル有数の「養鶏村」へと成長、70年代になると周辺地域に日系農家が集団借地入植しはじめ、福博村の日系人口は約200世帯・1500名へと膨れ上がり、地域共同体としての最盛期を迎えることとなった。

だが80年代からは、「過疎化」がスザノ福博村の深刻な社会問題となる。農業から非農業への産業構造の転換と「デカセギ」現象による若年層の人口流出、日系世帯の少子化や日系人口の高齢化現象、サンパウロ市近郊地帯での治安の悪化がその主要な要因だといえる。しかしこうした問題を抱えながらも、当地域のリーダーらは、「福博村」という概念を村内居住者のみならず都市部への流出者とのネットワークも含めた共同体として見直し、各種行事の実践や新しい「村おこし」の試みを通して、転出者の「ふるさと」としての「ムラ」、あるいは村内居住者と転出者との連帯シンボルとなる「ムラ」という方向性のなかで、日系地域共同体の再活性化の契機を模索している。

（サンパウロ人文科学研究所）

ブラジル多言語環境における日系社会の言語

Elza Taeko Doi

本節では、ブラジルの多言語環境における言語状況を紹介する。公用語であるポルトガル語と共存しながら国土全体に広がりを見せる三つの言語状況に焦点を当て、考察する。第一は原住民であるインディオの言語、第二に移民の言語、第三が国境地域における言語接触である。

2000年現在のブラジルの人口は約1億7千万人（IBGE 調査による）で、公用語がポルトガル語ということから、国民の大半がブラジルは単一言語国家であるという認識を持っている。ブラジルの言語状況にまつわる、この単一言語国家の伝説ともいべきものは、「インディオ社会や移民社会のように、権威の無いポルトガル語バリエーションを話すコミュニティ、つまりマイノリティーとして扱われるマジョリティーの抹消に役立つ」（Cavalcanti, 1999）ものと言われている。その一方で、ブラジル国内で話される多数の言語が主に口語に基づいていることから（たとえ、定期刊行物があるものでも）、地位の低いものという烙印を押され、あたかも存在しないかのように扱われている。（Cavalcanti, 1999）

しかし、ブラジル国内の諸民族の分布図を見ると、(1) 全国、特に北部と中部北にインディオ社会、(2) 南東部と南部に移民社会（ドイツ系、イタリア系、日系、ポーランド系、ウクライナ系等）、(3) スペイン語圏である隣国との国境地域の移民社会、あるいは生粋のブラジル人社会（Cavalcanti, 1999）が存在することがわかる。

ブラジルで話されるポルトガル語に関しては、ブラジルで使用される以前のアラブ語からの借用語以外に、インディオの言語からアフリカの言語、移民の言語まで様々な言語からの借用語が見られる。

インディオの諸言語

ブラジル発見の西暦1500年の時点で話されていた約1300言語の中で現在残っているのはわずか180言語（セキ、1991年、FUNAI(国立インディオ保護局)、2003年）に過ぎない。約25万人の話者がいるこれらの大半の言語は数少ない話者に使用されており、消滅寸前の状況に置かれているが、インディオの言語の背景には、保存、消滅、活性化などの状況も確認されている（Cavalcanti,

1999)。FUNAI(国立インディオ保護局)の2003年度の調査によると、言語をまだ保持しているインディオ社会はブラジルの北部、中部北、南部に集中している。なお原住民の言語がもう話されていないコミュニティでも、その言語の痕跡がインディオの話すポルトガル語に見られると言われていた (Maher 1996, apud Cavalcanti, 1999)。

ブラジルのマイノリティーの言語の中で、バイリンガル教育の権利が1998年の憲法に保証されているのはインディオの言語のみである。

移民の言語

Ribeiro(1995)によると、ブラジル国民として同化したヨーロッパ移民は約500万人と言われている。(奴隷として連れられてこられたアフリカ人を含まない)500万人から700万人の移民の内訳は、ポルトガル人176万人、イタリア人162万人、スペイン人71万9千人、ドイツ人25万7千人、日本人24万3千人、ロシア人11万9千人、オーストリア人9万8千人、トルコ人7万9千人、ポーランド人5万4千人、フランス人5万人となっている(フォーリャ・デ・サンパウロ紙 1997年7月13日)。

領土を最初に占領したポルトガル人は例外として、後からやってきた他の移民は少数言語話者と言うことができるが、たとえばドイツ移民のように比較的古い移民でさえ、その言語は現在もコミュニティの中に様々なレベルで生きつづけ、コミュニケーション手段として使用されている。

国境地域の言語

国境周辺ではポルトガル語とスペイン語、及び各々のバリエーションが見られる。特にウルグアイとの国境およびパラグアイとの国境の各地域で言語接触の特有の状況を引き起こしている。このような状況は、両国民が共存する国境線を共有する町々でも、国境周辺の移民社会でも起き、例えばBrasiguaios(ブラジルパラグアイ人)と呼ばれるパラグアイに移住したブラジル人は後者の例である。このような状況は両話者間の接触又は摩擦の原因となる。

Cavalcanti(1999)によると、インディオの言語も移民の言語もマイノリティーのバイリンガル状況の様相を呈し、様々なレベルでの母語とポルトガル語の使用が見られる。しかし、この状況がさらに特殊な言語社会を生むことから、母語とポルトガル語の二つの言語のバリエーションを含むこの状況は多言語環境であると言うことができる。

この両社会に関して、インディオの言語と移民の言語の地位の違いを強調する必要があるだろう。インディオの言語はネイティブ・ランゲージであり、「インディオ国内」で話されるのに対して、移

民の言語は祖国において公用語である。これはその言語が持つ代表性又は権力のシンボルを伴い、自分の言語使用に対する否定的な姿勢を引き起こし、「標準語」から外れた、変わった、おかしいものと見るということにもなりかねない。移民社会に関する研究 (Jung, 1997; Leme, 2001; Takano, 2002 など) に、ブラジルでのこれらの話者に見られる同様の姿勢が示されている。

占領者に抑圧されて、抹消されたケースもあるインディオ社会の言語と違い、外国語の使用と教育が禁止された1930年代の独裁政権時代を例外として、移民の言語はこのような不幸な目には合わなかったと言える。ドイツ系社会 (Pereira, 1999)、イタリア系社会 (Leme, 2001)、日系社会等の様々な移民とその一部の子孫がポルトガル語も祖国の言語 (あるいは継承言語) も上手に話せないと言うのに対して、インディオ社会の話者の一人の「ポルトガル語はよく話せないが、母語の世界では識者です」という発言 (Cavalcanti, 1999) は意味深いものと思われる。従って、インディオの言語と移民の言語のどちらもマイノリティーの言語と見なされてはいても、使用する言語に対する話者の姿勢に違いがある。

この姿勢は言語の保存と習得に影響を与えると思われる。インディオにとって、ポルトガル語は自分達の「国家」が置かれている国土の言語であるが、それに対して、移民にとってポルトガル語は自分達が移住した国の言語である。従って、移民はポルトガル語習得の必要性を感じ、子供がブラジル社会で生きていけるように、ポルトガル語での公教育を受けさせたが、隔離された村で生活し、さらに抑圧の経験を持つインディオには、同様の関心が早期からあまり示されなかったように思われる。

ブラジルの多言語環境において、移民の言語はマイノリティーの言語と扱われていることから、祖国の方言と、標準語でないポルトガル語の使用とともに、コードスイッチングと混交を特徴とするバイリンガリズムは、移民社会が通らなければならない段階のひとつと考えられる。これは、少数派言語の維持を推進又は妨害をする要素によって、多数派の言語の方向へ変化/移動が起きるまでの一時的なものかも知れないし、長期間のものかもしれない (Fasold, 1984; Grosjean, 1982; Romaine, 1989; Appel and Mysken, 1988) (この状況は、様々な面において言語が対立関係にある国境の言語接触とは異なる)。

様々な言語のバリエーションならびに外国語、二言語話者に見られがちな言語的特徴、用法についても同様のことが言えるだろう (久山, 2000; Nawa, 1989; Mase, 1987; 馬瀬, 1986; 他)。さらに、日系移民社会の言語には上記の特徴の多くが見られるが、一世紀近い移民歴史に関わらず日本語がまだ日系社会で使用されていることに影響している要素の一つは50年代から70年代にかけての新たな移民復興によるものとも言えるだろう。

移民の言語使用を特徴付けるのは、言語の象徴的機能及びコミュニケーション機能 (Edwards,

1985)の並存だと考えられる。日系社会の場合、子弟に対する日本語教育を通して日本語を保存する関心は存在するが、コミュニケーション手段としての機能、つまり言語の使用と維持に貢献する機能は家庭と地域社会の限られた範囲に限定されているのが現状だといえる。従って、日本語の実際の使用／必要性は話者の消滅とともに徐々に減少あるいは消滅する傾向にあると思われる。しかしながら、日本語の痕跡は、上述のインディオの場合と同様に、日系人の話すポルトガル語にもブラジルポルトガル語にも残ると考えられる。

(カンピナス州立大学)

【参考文献】

- APPEL, R. and MUYSKEN, P. (1987) *Language Contact and Bilingualism*. London : Edward Arnold. ● CAVALCANTI, M.C. (1999) Estudos sobre Educação Bilingüe e Escolarização em Contextos de Minorias Lingüísticas no Brasil (Studies on bilingual education and schooling in Brazilian context of linguistic minorities). *Revista DELTA*, v.15, no. Especial : pp.385-417
- EDWARDS, J. (1985) *Language, Society and Identity*. Oxford : Basil Blackwell/Andre Deutsch ● FASOLD, R. (1984) *Sociolinguistics of Society*. Oxford : Basil Blackwell. ● GROSJEAN, F. (1982) *Life with Two Languages : An Introduction to Bilingualism*. Cambridge, Ma : Harvard University Press. ● FUNAI (2003) Homepage da Fundação Nacional do Índio: <http://www.funai.gov.br>
- HAMERS, J.F. and BLANC, M.A. (1983) *Bilinguality and Bilingualism*, 2^{ed.}, Cambridge : Cambridge University Press. ● JUNG, N.M. (1997) *Eventos de letramento em uma escola multisseriada de uma comunidade rural bilingüe (alemão/português)*. Dissertação de Mestrado. Unicamp. ● LEME, M.L.A. (2001) *Dio, Che brut estudá : Um estudo lingüístico da comunidade tirole-trentina da cidade de Piracicaba*. Campinas : Editora da Unicamp ● MAHER, T.M. (1996) *Ser professor sendo índio : Questões de linguagem e identidade*. Tese de Doutorado. Unicamp. ● MASE, Y. (1987) *A Língua Japonesa dos Imigrantes Japoneses e seus Descendentes no Brasil. Estudos Japoneses*, S.Paulo : Centro de Estudos Japoneses da USP, 1987. ● NAWA, T. (1989) *Bilinguismo e mudança de código : uma proposta de análise com os nipo-brasileiros, residentes em Brasília*. Tarallo, F. (org.) *Fotografias Sociolingüísticas*. Campinas : Editora Pontes e Editora da Unicamp. ● PEREIRA, M.C. (1999) *Naquela comunidade rural, os adultos falam 'alemão' e 'brasileiro', na escola, as crianças aprendem o português. Um estudo de continuum oral/escrito em crianças de uma classe bisseriada*. Tese de Doutorado. Unicamp
- RIBEIRO, D. (1995) *O povo brasileiro : A formação e o sentido do Brasil*. São Paulo : Companhia das Letras. ● RODRIGUES, A. D. (1994) *Línguas Brasileiras : Para o conhecimento das línguas indígenas*. São Paulo : Edições Loyola ● ROMAINE, S. (1995) *Bilingualism*. 2^{ed.} Oxford : Blackwell. ● SALAWDEH, O.K. (1997) *Manutenção e Mudança de Língua: Um Estudo da Comunidade Árabe em São Paulo*. Dissertação de Mestrado. Unicamp. ● SEKI, Lucy (1999) *Linguistics of Indigenous Languages in Brazil*. *Revista DELTA*, v.15, no. Especial : 385-417 ● TAKANO, Y. (2002) *Tensão Diglôssica na Aquisição de Língua : Um Estudo de Bilingües nipo-Brasiliense*. Dissertação de Mestrado, UnB. ● 久山恵 (2000) 「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語の借用：その形態と運用」*The Japanese Journal of Language in Society*, vol.3-1. ● 馬瀬良雄 (1986) 「ブラジル便り—ブラジル日系人の日本語」*「言語生活」*418.

研究調査結果概略

ブラジル日系社会調査班(注1)

言語接触・方言接触への包括的・動態的アプローチ

グローバル化の現在、Cambridge Approaches to Language Contactシリーズが刊行される等、世界の様々な地域での言語接触あるいは接触言語の研究が、大変盛んになってきている。日本語を中心に考えれば、現在これが最もダイナミックに起こっているのは、「ウチナーヤマトグチ」と「コロニア語」というような名称が使用されていることから判断しても、国内においては沖縄地域であり、国外においてはブラジル日系社会ではないと思われる。本プロジェクトは、ブラジル日系社会における、日本語とポルトガル語という系統の異なる言語の接触状況に、包括的かつ歴史的(動態的)にアプローチしようとしたものである。

言語接触論をめぐるのは、大きく言えば次の3つ(アイデンティティのレベルを分けるとすれば4つ)のレベルの相関性を考慮した上での「統合的アプローチ」が求められるであろう。

- ① 政治、経済、社会的レベル
- ② 言語行動レベル(言語使用と意識)
- ③ 言語構造レベル

また、これらの3つの側面は、極めて単純化して言えば、①のレベルの変化が②のレベルの変化をもたらし、②のレベルの変化が③のレベルの変化を促すことから、「歴史的・動態的」に把握していく必要がある。

さらに、言語の問題を中心に考えれば、ブラジルへの日系移民は、2つの障壁に直面したことが考えられる。1つは、ポルトガル語というブラジルにおける優勢言語への対応の問題である。もう1つは、(移民時の年齢や教育歴の問題等を考えても)様々な方言を母語とする移民間で日本語によるコミュニケーションを行うにあたっての地域共通語としての日本語の生成の問題である。従って、ブラジル日系社会では、単純な日本語とポルトガル語の接触ではなく、日本語内部の方言接触とポルトガル語との接触が重層的に起こったと考えなければならないのである。(なお、ポルトガル語内部でのバリエーションについては、今回の調査研究では取り上げる余裕をもたなかった。)

以上のことから、本プロジェクトは、日本とブラジル双方の、文化人類学、社会言語学、応用言

語学(日本語教育学)、狭義言語学を専門とする研究者による国際的・学際的プロジェクトとして、予備調査を経た上で、次のような系統的調査を実施した。

(1) サンパウロ人文科学研究所において2000～2001年にかけて実施されていた『日系社会実態調査』に基づいた「言語生活調査」の実施。(第2章参照)

(2) 「言語生活調査」に基づいた「談話収録調査」の実施とその文字化。(第3章参照)

(3) 同時並行的に、文献調査や日本語教育に関わる聞き取り調査等の実施。(第4章参照)

精密な分析とモデル化等はすべて今後の課題であるが、以下では、この報告書に掲載されている文化人類学を専門とする研究者による解説論文を背景にして、日本語の側面を中心に、世代差を軸とする「言語生活調査」と「談話録音調査」の結果の、現時点における概要を示すことにする。(第4章に掲載されている諸論考については、それぞれ独立したかたちで読みごたえのあるものになっているので、ここでは割愛する。)

世代の移行と日本語の動的諸相

紙幅の都合上、極めて単純化して図式化すれば、図A, Bのようになる。

まず、図Aを見られたい。太線の逆三角形は「日本語」であり、細線の三角形は「ポルトガル語」である。「1世」「2世」「3世」ごとに、日本語からポルトガル語への移行の連続性が示されている。同時に、日本語とポルトガル語の能力と使用において、1世と3世が鏡像関係にあることも示されている。典型的なかたちで、日本語とポルトガル語の二言語話者が生まれ、文レベルのコードスイッチングが頻繁に起こってくるのは、網掛け部分で示した2世である。左側の「地域」「家庭」(「祖父母」)は、ドメインであり、右側の「複文・連文」「単文」「単語」というのは、言語構造的側面である。ドメインの縮小化と言語構造面での単純化が相関していることを示している。太線の逆三角形の上部は、4技能である。複雑化を避けるため、これを取り出して図式化したのが、図Aである。ここでは、1世では4技能が揃っていること、逆に、3世では「聞く」能力に限定されてきていることが示してある。

以下、上記のことを踏まえて、少し詳しく説明することにする。(ポルトガル語に関わる言語生活調査の分析、ならびにブラジル側研究者によって実施された談話録音調査の整理がまだ進んでいないため、日本語を中心に示す。)

(1) ここで「1世」としてあるのは、(現時点での分析結果において、成人移民と戦前の子供移民の間に顕著な差が見られなかったため)日本生まれの移民すべてを含んでいる。(戦前の子供移民が、教育歴に関わらず、成人移民と変わらない日本語を身に付けているのは、地域における日本語

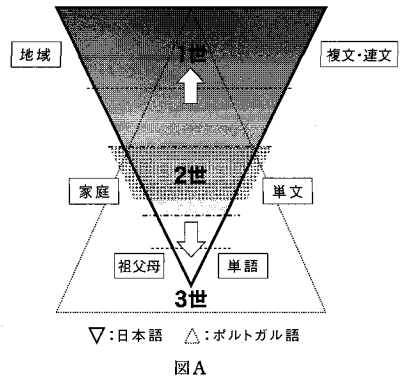
の機能やアイデンティティの問題、あるいは国語としての日本語意識の問題などを含んでいると予想されるが、この点の分析は今後の課題である。)この1世の特徴は、次の4点にある。

- ① 家庭ドメインのみならず家庭外ドメインでも日本語を使用
- ② 日本語は聞き話す能力のみならず、読み書く能力も備えている。
- ③ 上記の点と相関して、複雑な構造をもつ文を単位としての(日本における日本人と基本的に変わらない)談話構成能力をもっている。
- ④ 出身方言は明示的に出てこず、様々な地域出身の移民間で地域共通語としての「コロニア日本語」とでも言うべき方言接触による日本語のバリエーションが生成されている。(この点については後述)

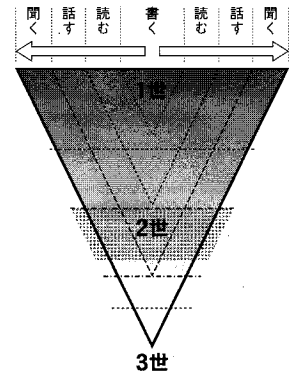
(2)「2世」には、様々な様相があるのだが、1世寄りのタイプ、3世寄りのタイプ、その中間の最も2世らしいタイプに3分類してモデル化している。2世のバリエーションをもたらす要因としては、(a)言語形成期の言語が日本語かポルトガル語か、(b)ブラジルにおける教育程度の高さ、が絡んでいるようである。基本的に、言語形成期の言語が日本語であり、高くない教育歴の2世は、日本語能力(聞き話す能力)が高く、言語形成期の言語としてポルトガル語が関わり、ブラジルでの教育歴の高い2世は、日本語能力は3世に近くなっている。大きく言って、2世の特徴は、次の点にある。

- ① ドメイン的には、日本語使用は「家庭内」への限定化が進む。
- ② 聞き・話しの2技能への限定化が進む。
- ③ 上記のことと関わって、コミュニケーション活動の単位としての文の構造の単純化(複文よりも単文を多用)が進む。そして逆に、ポルトガル語が、基本的に単語レベルの借用にとどまっている1世とは異なり、2世では、文レベルの日本語とポルトガル語のコードスイッチングが頻繁に起こってくる。日常的な話題では日本語を、抽象的な話題ではポルトガル語を使用するというような切り替えも見られる。
- ④ 「コロニア日本語」とでも言うべき接触方言としての日本語のバリエーションは、1世と同様に使用されている。

(3)「3世」になると、基本的に日本語からポルトガル語への移行が完成している段階である。(ただし、今回の調査では、3世の調査対象者数が少ないため、絶対化はできない)日本語能力に



図A



図B

差がでてくる要因としては、(a)日本語教育歴の有無、長短と(b)デカセギ経験の有無、長短が、絡んでいるようである。3世の特徴は次のようになる。

- ① 「祖父母」がいる場合に、「祖父母」との会話において、日本語を使用、習得している。(これは、日本語が一定のドメインで機能しなくなっているということを意味しよう。)
- ② 4技能のうち、聞く能力が最後まで残っている。(逆に、3世では、ポルトガル語は4技能すべてが揃ってくる。)
- ③ コミュニケーション活動は基本的にポルトガル語によって行われるので、日本語を話せる3世でも、文レベルの使用はできなくなっており、基本的に単語レベルの会話が中心になってくる。(格助詞の使用の限定化、動詞の基本形とテ形の使用への限定化、終助詞へへの限定化などが連動している。これは、コミュニケーションの単位が文であることを考えると、もはや正常な意味での日本語使用ができなくなっていることを意味しよう。)

以上が3世の特徴であるが、現実には祖父母のいる家庭が無くなりつつあることから、1世における「国語としての日本語」ではなく、言わば「外国語としての日本語」教育が必要な段階に至っているとえよう。

コロンビア語をめぐって

マクロな観点からの「コロンビア人アイデンティティ構築と絡み合うコロンビア語の発見」への歴史的プロセスについては、紙幅の都合上、別稿として用意される森幸一論文を参照されたいが、ここでは、(社会)言語学的に見た、現時点での概要を示しておくことにする。

コロンビア語はブラジル日系社会の人々の間で、「日本語とポルトガル語を混ぜて使用すること」と意識され、言語生活調査の結果では、肯定的、否定的、中立的な三つの評価・態度が見られる。(その実質的内容についての分析は今後に残されている。)

言語と言語が接触・混交を起こす場合、単純化して言えば、①接触関係の質・程度と、②それぞれの接触言語の実態とがまず問題になってくるであろう。①の点について言えば、大きく、ポルトガル語と日本語とに二分した場合では、1世における単語レベルの言わば浅い接触段階から、2世における文レベルのコードスイッチングが起こってくる深い接触段階を経て、3世におけるポルトガル語への移行が観察できる。(ただし、急いで3世におけるポルトガル語使用のなかに、日本語の痕跡がどのようにあるかの点はまだ全く分析できていないことを付け加えなければならないし、また、個人レベルの接触関係と地域社会レベルの接触関係のきちんとした分析もできていないことも付け加えておかなければならない。)

以上のような考え方では、日本語内部におけるバリエーションは不問に付しているのであるが、上記のようなポルトガル語との接触とおそらく同時並行的に、日本語内部での言語(方言)接触、あるいはそれに伴う単純化や類推形式の生成などが起こったと考えられるのである。ブラジル日系社会の1世、2世の日本語に特徴的な点は、下記のようなものである。

(1) 東日本方言的要素(あるいは標準語的要素)と西日本方言的要素の混在・併用

イルとオル、～テルと～トル、～ナイ(～ナカッタ)と～ン(～ンカッタ)など

(2) 西日本方言形式のコロニア共通語化(1世の東日本出身者でも普通に使用)

～ヨル、ヨウ～セン、～シキランなど

(3) 単純化

すべての動詞の五段活用化、ラ抜き可能形式や～シナイ(セン)デス形式の使用

男女差を示す諸形式の不使用

(4) 類推による生成形式

行カンキャンラン(行かなければならない)のようなモダリティ形式の使用など

(ただし、日本における方言における実態については未確認)

日本語内部の方言接触と同時並行的なポルトガル語との言語接触という重層的な展開プロセスを今後の分析においては考慮していかなければならないであろう。あくまでもまだ憶測にすぎないが、標準語あるいは東日本方言としての～シテル形式が、「死による、行きよる、12時になりよる」では簡単に表せてしまう「変化過程」の意味を表すことができないとすれば、ポルトガル語との接触状況において、この形式をコロニア共通語化したとしても不思議ではない。昨年ブラジルを訪問した際、「日本語の死ンデイルは結果を表します」という私の発言に対して、「今死ンデイルなら、死につつあるという進行の意味になりますね」と確認した1世の方(長らく日本語教育に携わってきた)の質問は印象的であった。この事実は、日本語内部の言語(方言)接触とポルトガル語との言語接触が、無関係に進行したのではなく、相互影響を引き起こしつつ進行していったのではないかという推測を促すのである。

言語接触論は、最もマクロな政治・経済・歴史的観点から、最もミクロな複数の諸言語(諸方言)の構造的実態の観点に至るまで、複眼的に追及していかなければならないであろう。

1 ———— 本概略はブラジル日系社会調査班の共同討議によってまとめられたものである。

言語の接触と混交

日系ブラジル人の言語の諸相

第1部 ブラジル日系社会と日本語

第2章

移民社会と言語接触

— 言語生活調査について —

ブラジル日系社会では、現在どのような言語生活が営まれているのであろうか(Who 'speaks' what language to whom, when and for what purpose?)。あるいは、ブラジルに渡った日系移民は、どのような意識、態度、戦略で、優位言語としてのポルトガル語に対応しようとしてきたのであろうか。そして、越境した日本語はポルトガル語との接触の中で、日系人のアイデンティ意識と絡み合いながら、どのような運命をたどろうとしているのであろうか。

言語生活調査は、このような問いに応えるべく、実施されたものである。従来様々な個別的研究が行われてきたが、本プロジェクトにおける言語生活調査の特徴は次の点にある。

(1) 2000～2001年にかけて、大都市、近郊農村、地方農村、奥地農村の4地点を対象にして実施された「日系社会実態調査」に基づいて設計されたものであること。

(2) 「社会的属性」「言語を中心とした生活史」「地域、職場、家庭等のドメイン別の言語使用状況」「4技能別の日本語およびポルトガル語の能力意識」「訪日経験と言語意識」「日本語教育意識」「日本語とポルトガル語を混ぜて使用することに対する意識」を総合的に考える調査項目を設定したこと。

以下では、まず「日系社会調査と言語生活」において、ブラジル日系社会を対象に行われた従来の(社会)言語学的研究のもつ歴史・社会・文化的状況への軽視や包括的視点の欠如といった問題点を克服すべく、どのような体系的・動的アプローチを試みようとしたかが、この調査の限界点とともに、詳細に提示されている。次に、「言語生活調査結果概要」では、「社会的側面」と「言語的側面」の双方からの分析結果のごく一部が、1世、2世、3世という世代を軸に紹介されている。

世代の違いに反映されている動的側面について言えば、社会的側面での変化に基本的には相関しつつ、言語的側面が、1世と3世とが鏡像的關係にあること、つまりは、日本語を多様なドメインで、聞き、話し、読み、書きという4技能を備えて使用する1世世代と、逆に、日本語に代えて、ポルトガル語を使用するという3世世代との鏡像性である。2世世代は、両義的、中間の様相を示している。二言語話者やsemi-speakerが出現してくるのは、2世世代に特徴的である。

言語行動のあり方(使用と意識)の変化は、2世世代にみられる多様な様相のなかに、政治・経済・歴史的状況のもとにある社会・文化的側面と相関しつつ潜んでいると思われる。第3章で述べる談話収録調査においても、相対的に見て均質な1世、3世に対して、2世の多様性が見られたのである。これらの統合的で精密な分析は、すべて今後の課題である。

〈工藤真由美〉

日系社会調査と言語生活

森 幸一

本節では大阪大学21世紀COEプロジェクト『インターフェイスの人文学』『言語の接触と混交』班が実施している「ブラジル日系社会における言語の総合的研究及び記録・保存事業」(事業推進者: 工藤真由美教授)の研究課題の一つである、ブラジル日系社会における言語生活調査とそれに続いて実施された談話収録調査がどのような経緯で立案され、いかなる調査設計をへて実施されてきたのかについて概観する(注1)。

ブラジル日系人の「言語」をめぐる研究(や言及)は大別すれば、移民自身によって行なわれた研究(や言及)と言語学分野の研究者によって行なわれた研究(や言及)に区分することができる。移民自身によって行なわれた「言語」に関する研究は戦後一時期、「コロニア語」に関する研究(や言及)が展開されるものの(半田[1952、1972、1980a、1980b、1980c]、アンドウ[1956、1958、1966]、アンドウ他[1951]、木村他[1951]、佐藤[1956]、半田他[1970]、前山[1972])(注2)、当初から一貫して日本語教育分野を中心に実施され、現在に至っているといっても決して過言ではない(注3)。戦後になると、社会学的な観点から1958年と1987/1988年の2度、日系社会実態調査が全国的規模で実施されたが、その調査項目の中に、話し言葉、家庭内使用言語、言語能力意識などの設問が含まれ、断片的ながら当時の言語生活の社会学的な特徴を我々に提示してくれている(注4)。

一方、(社会)言語学領域からの、ブラジル日系人・日系社会の言語をめぐる専門研究や言及(注5)は山東[2003]や中東&MELO[2003]らの概観によると(注6)、1970年代からはじまり、現在までに比較的多くの蓄積が存在している(注7)。中東&MELO[2003:70-72]の整理によれば、ブラジル日系社会における言語学的研究の主要な対象は「コロニア語」と呼ばれる一種独特の日系人の話す日本語」であり、中心的な研究の課題として、「コロニア語」におけるポルトガル語からの語彙借用研究(太田[1959]、比嘉[1982]、鈴木[1979]、久山[2000a、2000b]など)、「コロニア語」の機能(比嘉[1982])、日系人の言語の方言的特徴(馬瀬[1986]など)や敬語行動(鈴木[1994])などが考察され、さらに特定の日系集団地を対象にした言語生活の実態調査も存在している(永田[1990、1991]など)。

しかしながら、山東[2003]は、ブラジル日系社会で実施されてきた言語学的研究にはいくつか

の問題や限界があると指摘している。例えば山東によると、従来の言語学的研究には日系人[社会]の言語学的実態を包括的視点をもって全体的体系的に記述・分析したものはほとんどないという。筆者なりに言語学的研究を検討すると、山東が指摘する包括的視点の欠如のほかに、研究を行なう上で方法論的な問題や日系人や日系社会が経験してきた歴史、社会、文化的状況を踏まえた分析なり解釈の軽視ないし欠如という問題も指摘できるように思われる。これらの問題は社会言語学という学問領域全体が抱えるものともいえなくはないが、少なくともブラジルにおける言語学的研究は社会科学的方法論や認識(たとえば事例の代表性[representividade]や全体的な把握[totalidade:山東のいう包括的視点]という視座など(注8))、さらには分析手法などにナイーブではなかったといえるのではなからうか。

本プロジェクトは、従来のブラジル日系人の言語をめぐる専門的研究が抱える、こうした限界を超えて、ブラジル日系人の言語研究の新たな展開や可能性を追求するという立場から立案された。本プロジェクトは従来の言語学的領域からのブラジル日系人の言語研究を批判的に継承しながらも、それらに内在する方法論的な問題などを克服し、しかも様々な関連諸科学との共同作業を通して総合的学際的体系的に、ブラジル日系人の言語(生活)にアプローチしようと意図するものである(注9)。

言語生活調査立案の基礎となった『日系社会実態調査』(2000/2001)

言語生活調査立案の背景

言語生活調査を立案する上で重要かつ決定的な役割を果たした調査がある。本プロジェクトの事業推進者である工藤は2002年8月、ブラジル・サンパウロ大学(USP)で開催された日本語・日本文学・日本文化学会(注10)に招聘され、2日間にわたって講義を行う機会をもった。工藤はブラジル日系人の包括的言語研究に大いに関心を抱いており、同学会にやはり招聘され講義を行っていた筆者と休憩時間や昼食時など頻繁に、言語(接触)研究の重要性や意義、日系人の言語的特質、日系社会の言語生活などについて意見を交換した。筆者は工藤に対して、当時所属していたサンパウロ人文科学研究所(Centro de Estudos Nipo-Brasileiros、以下CENBと略す)が2000年から2001年にかけて実施した日系社会実態調査報告を贈呈し、この基礎調査は将来的な調査研究のために利用されるべき立案されたものであることも伝えた。

この調査に関しては後述するが、社会科学的方法論よっての言語(接触)研究、ブラジル日系人の総合的体系的な言語研究の可能性を模索していた工藤にとって、この調査(報告書)は少なくとも可能性を構想へ、そして構想から具体的プロジェクトへと昇華させていく上で大きな役割を

果たしたのではないかと推測している。

日系社会実態調査の概観

日系社会実態調査は国際協力事業団の資金助成を受けて、日系人の生活実態や日系地域集団地の抱える諸問題を明らかにし、その解決策を模索する際の基礎データとすることを目的に、2000年から2001年にかけて実施されたもので、当時CENB専任研究員であった筆者と、本プロジェクトの研究協力者で、当時CENB客員研究員であった浅野卓夫が、立案―準備―調査―集計・分析―報告書作成に至るすべての調査プロセスを担当した。この調査の目的をより詳細にみると、「立地条件が異なる複数の日系地域コミュニティの実態調査を行い、日系人口の特徴、日系の個人や世帯の生活状況、地域社会が抱える問題、日系人の文化やアイデンティティに関して、データを収集」し、同時に「日系人個人や日系社会が抱えるさまざまな問題(たとえばデカセギ問題、高齢者問題、日本語教育問題、治安問題など)をコミュニティレベルで詳細に把握すること、そして立地条件の異なる複数の地域コミュニティ間でそれらを比較」し、問題解決のための基礎データを提示することを目的にしたものであった(注11)。

日系社会実態調査はブラジル、特に日系人口が集中するサンパウロ州を中心とする南東部(注12)やパラナ州を中心とする南部に散在する日系地域集団地を、その立地条件から大都市、地方都市、近郊農村、奥地農村に区分し、それぞれの立地環境に創設された日系集団地をそれぞれ一地区ずつ選定し、そこを対象にインテンシブな調査を実施したものである。調査対象地区として選定されたのが、サンパウロ市ピラカロン(Vila Carrão)地区(大都市のケース)、パラナ州マリంగా市(Maringá)(地方都市のケース)、サンパウロ州スザノ市(Suzano)福博村(Vila Ipelândia)(近郊農村のケース)そして同州ミランドポリス市(Mirandópolis)アリアンサ移住地(奥地農村)であった(注13)。各調査地区の概要を示したのが表1(次頁)である。

日系社会実態調査では日系世帯とそこに同居する世帯員を調査対象とした。調査対象世帯の選定は都市部のケース(前二者)では、それぞれの地域に組織された中核的なエスニック組織である文化(体育)協会(通称)「カイカン(会館)」会員世帯名簿(注14)からの無作為抽出法、農村部のケース(後二者)においては、当該地域に居住するすべての日系世帯が調査対象とされた。前者のケースでは、サンプル数は社会学的傾向性を把握可能な数量を考慮し、各エスニック組織会員世帯の4分の1を抽出した(注15)。都市部のケースにおいては、中心的なエスニック組織の会員という指標が対象選定に関わっているが、都市部の場合エスニック組織への加入率は非常に低率であり(注16)、しかもその中心は一世と若干の二世であるという特徴をもっている。従って、都市部のケースではサンプル自体が最初からある種の偏向をもったものとならざるを得なかった。

日系社会実態調査は、調査員による調査票調査とコーディネーターによるインタビュー調査を主な方法論として、それぞれの地域で10日ないし2週間ほどの期間実施された。調査員は基本的に二か国語を話す人材を雇用し、調査マニュアルなどを使って事前にトレーニングを行い、調査地に派遣された。調査コーディネーターは調査全般を指揮し、調査期間中に発生した問題を解決する役割のほか、当該地域の日系人の歴史や日系団体の種類や活動などに関する聞き取り調査、資料収集などに当たった。調査は「日系人・世帯」の生活実態の総合的な把握が主目的であったことと関連して、使用された調査票の種類(注17)も、①世帯調査票、②世帯調査票補票(注18)、③デカセギ帰国者再適応調査票、④高齢者用調査票、の4種類であった。この4種類の調査票に盛り込まれた主要な設問項目(大分類)は表2に示すとおりである。

現地調査は現地日系リーダー及び調査対象者の全面的な協力を得て、スムーズに実施され、最終的にアプリケーションできた調査地ごとの調査票数は表3のとおりである。各調査地での調査

立地条件	調査対象地	特徴
大都市	サンパウロ市東部ピラカロン地区(本土系日系人世帯約1千世帯、沖縄系約1千世帯)	当該地域の日系コミュニティは戦後に創設されたもので、現在、本土系日本人会と沖縄県人回支部の二つの日系エスニック組織が併存している。この中心的組織への加入率は双方ともに約50%程度と推定されている。これらはサンパウロ市内でも活発に活動しているエスニック組織である。
近郊農村	サンパウロ州サザノ市福博村(134世帯)	1930年代初頭、サンパウロ州奥地からの転入移民が入植し、その後入植者が増加するかたちで「自然発生」的に成立した植民地。村人会により戦後はほぼ10年ごとに独自の実態調査が実施されており、「村」の歴史的な推移を把握することが可能。戦後移民も多く入植し、村のリーダーとなっている。
地方都市	パラナ州マリンガ市(地域に居住する日系世帯数は不詳。当地の日系クラブ会員世帯数は約1千世帯)	戦前、サンパウロ州奥地から転住した移民にはじまるコミュニティで、現在は二世及び三世を主体にしている。当地には中核的エスニック組織としてスポーツクラブ型日系組織がある。市行政とタイアップした「日系文化」実践活動が盛んである。
奥地農村	サンパウロ州ミランドポリス市アリスサンサ移住地(187世帯)	1920年代に海外移住協会によって創設された移住地で第1から第3までに移住地がある。それぞれ長野村、鳥取村、富山村と名付けられている。ブラジルで最も古い定着型日系農村集団地の一つである。戦後移民は少なく、戦前移民とその子弟を中心的なメンバーとしている。

表1 日系社会実態調査 調査地の概要

調査対象	調査項目(大分類)
日系世帯	世帯員数、家族類型、居住環境、世帯におけるデカセギ経験者・高齢者の有無、世帯収入、家庭内使用言語、日系団体加入状況、定期講読物、日系メディア、日本の親族との交際、日本・ブラジルのシンボルの存在、耐久消費財の所有状況、スポーツ活動、日本的な行事・習慣などの実施状況など
日系世帯員(個人)	名前、世代、年齢、性別、国籍、学歴、宗教、デカセギ経験、訪日経験、日本語能力意識、日本語学校への通学経験、医療保険・年金制度への加入状況など
日系高齢者(65歳以上)	居住環境、子どもとの同居、経済状態、医療・年金制度への加入状況、医療・社会福祉団体の利用状況、健康状態、不安・問題点、日常生活の実態など
デカセギ帰国者	デカセギ回数、期間、目的、成果、目的の達成度、デカセギ以前の就労状況、帰国後の再適応、デカセギのマイナス面・プラス面(意見)、再度のデカセギ予定など

表2 日系社会実態調査項目(大分類)

完遂率は世帯調査票を基準にみれば、サンパウロ市ピラカロン地区（調査対象世帯リストの83%、235世帯）、スザノ福博村（全数134世帯、100%）、マリंगा市（調査対象世帯リストの90%、271世帯）、アリアンサ移住地（全187世帯中の98%、185世帯）であった。

調査から得られた個人及び世帯レベルのデータはコード化され、Microsoft Excelを用いてデータベース化した。そして、このデータベースを利用して、2001年末に主要結果（単純集計のみ）のみをサンパウロ人文科学研究所編『日系社会実態調査中間報告書』として公表した。日系社会実態調査には、日系人の言語生活に関して、①家庭内人間関係別使用言語、②定期講読物、③日系メディア、④日本語能力意識、⑤日本語学校通学経験、などが含まれている（注19）。

調査票	ピラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
世帯調査票	235票	134票	271票	185票	825票
世帯調査票補票	236票	134票	271票	185票	826票
日系高齢者調査票	124票	78票	98票	139票	439票
デカセギ帰国者再適応調査票	54票	44票	89票	61票	248票

表3 調査地別調査票総数

言語生活調査に向けて

言語生活調査は前節で概観した日系社会実態調査に依拠しながら立案された。ここでは言語生活調査に関して、調査地の選定、調査対象者の選定、調査項目の検討と決定、調査準備から調査実施、集計と分析に至る一連の過程を概観していく。

調査対象地の選定と課題の設定

言語生活調査は調査の目的や方法論のほか、調査研究に充当できる時間と資金、そして人的資源、環境などを勘案しながら設計された。言語生活調査はブラジル日系人・日系社会の言語生活の実態を総合的体系的に把握することを目的とするもので、この目的に沿って特定の日系集団地を調査地として、そこで包括的かつインテンシブな調査を実施していくことを基本とした。

調査地は「日系社会実態調査」で調査地となった日系集団地のいずれかから選定するというのが前提であった。その理由は、これらの集団地における調査対象世帯（個人）に関する情報が既に存在し包括的体系的な調査設計が可能だったこと、共同研究者にこれらの集団地を熟知し、かつ調査地の人々とラ・ポール関係を構築していたものがあつたこと、文書史・資料などが存在しており

集団地の歴史や現状を把握する上で有利だったことなど調査の容易性が見込まれたことである。

言語生活調査の調査地として、4つの集団地のうち、どれを選定するのかについては2002年12月から翌年3月にかけて、日本とブラジル間で多くのメールのやり取りを通じて、さらには2003年3月大阪大学で開催された国際研究会「越境する日本語」の中などで活発に議論された。この議論では、4地点の比較、一地点での集中的調査、都市部—農村部という言語環境が大きく異なる集団地での比較、農村部二地点の比較など様々な意見が提示された。そして、最終的には以下に列記したような事由により、今回の言語生活調査の調査地は農村部に位置する二つの集団地、即ち、スザノ福博村とアリアンサ移住地に決定された。

(1) 日系社会実態調査における調査対象世帯の選定は農村部(悉皆調査法)と都市部(無作為抽出法)で異なり、しかも都市部の場合、当該地域の日系団体に所属する会員リストを使った抽出法が採用されており、当初から対象母集団が当該地域の日系人の実態を反映しておらず、都市部と農村部との比較考察は困難である。

(2) サンパウロ市ビラカロン地区の場合には、本土系日系人と沖縄系日系人が共住しており、後者の場合には「日本語」と「沖縄方言(ウチナーグチ)」というファクターも考慮しなければならず、最初の調査研究で、こうした「応用問題」に着手するのは様々な困難性を伴うことになる。

(3) サンパウロ市及びパラナ州マリンガ市という都市部の場合、調査対象選定のバイアスに加えて、治安問題や都市的生活スタイルなどの存在を勘案すると、調査実施にかなりの困難を伴うことが予想され、所期の目的を達成できない可能性が高い。また、パラナ州マリンガ市の場合、調査は調査員をサンパウロ市から派遣することになり、調査資金が非常に多くかかることが予想される。

(4) マリンガ市の場合、二、三世層を中核とする人口構成となっており、本プロジェクトの課題である「言語の記録・保存事業(日本語)」実施にとって相応しい調査地ではない。

この時点で、我々は言語環境が大いに異なる都市部での調査及び都市—農村部の比較研究を断念することにし、都市部を含む比較考察は今後の課題として残されることになった。

2003年3月時点で、サンパウロ州内陸部に位置する二つの農村日系集団地—スザノ市福博村とミランドポリス市アリアンサ移住地—が今回の言語生活調査の調査地として選定された。この集団地の日系世帯数・人口数などを『日系社会実態調査報告書』からみると、スザノ市福博村は総世帯数134世帯、日系世帯総数は512人、平均世帯員数は3.82人、一方、アリアンサ移住地は総世帯数185世帯(注20)、日系世帯員数644人、平均世帯員数は3.76人である。

この二つの集団地は1920年代半ばから30年代初頭にかけて創設された植民地で、ナショナリズム政策(注21)などの影響を同様に受けてきたなど歴史的な共通性をもっている。また、脚注12で示した日系社会実態調査の言語関連項目の集計結果(家庭内人間関係別使用言語、日系メディア

ア、日本語能力意識、日本語学校通学経験などはかなりの類似性を示している。こうした類似性の一方で、二つの集団地間には立地条件と関連する生業形態、生活スタイルなどの異質性をはじめ、

(1) アリアンサ移住地は日本の海外協会が最初から永住型移住地建設を目指した、いわば自営農の計画移住地であったのに対して、スザノ福博村は一旦コーヒー耕地にコロノ(農村賃金労働者)として入った移民たちが、より有利な条件を求めて移動、定着した自然発生的な集団地であった。

(2) アリアンサ移住地は戦前移民とその子弟を中心にし、戦後移民はほとんど入植していないのに対して、スザノ福博村は戦前移民と比較的多く入植した戦後移民とこれらの子弟から構成される集団地である。

(3) この二つの集団地に入植した移民の出身地別構成はアリアンサ移住地の場合、その創設に信濃海外協会、鳥取海外協会、富山海外協会が深く関わっていたことと関連して、それらの県出身者が当初卓越していたのに対して、スザノ福博村は同県・同郷などの社会関係を利用した移動と関連して、福岡県出身者が相対的に多く入植している。

(4) 両者の創設プロセスの相違は日本語教育環境にも大きな違いをもたらしている。特に1970年代以降では、アリアンサ移住地では長野、富山、鳥取県が移住地内の日本語教育に対して、資金支援、教師派遣、教材提供など様々なかたちで関与しているが、スザノ福博村においてはこうした移民母県からの支援はほとんどない。

などの異質性も認められる。

我々はこうした類似性と異質性を踏まえながら、この二つの集団地において、世代間比較考察を通じての包括的かつインテンシブな言語生活調査と談話収録調査を行なう上でいくつかの課題群を設定した。

(1) 二つの集団地における言語生活の実態を世代間の比較を通じて総合的包括的体系的に把握すること、言語生活にはどのようなファクターがどのように影響を及ぼしている(きた)のかを考察すること。

(2) 二つの集団地で話されている日本語やポルトガル語はどのような特徴をもっているのかを同様の視点から考察すること(これは談話収録調査の結果から分析、考察されるべき課題であるが、言語生活調査も後述するように、フォーマルな対話というかたちの談話収録もかねていた)

(3) (1)、(2)の個別的考察を行なった上で、その結果を比較考察しながら、言語生活や言語それ自体の地域的世代的変差とその内容、さらにはそれを規定する歴史的社会的文化的諸ファクターを明らかにし、農村部における日系人の言語生活や言語に関するモデルの構築を目指すこと。さらに「コロニア日本語」と呼びうるような共通語が存在するかどうか、するとすれば、どのような特徴をもっているのかを考察すること。

言語生活調査インフォーマントの選定—サンプリングの方法・サンプルの特徴—

調査地の選定に続く作業は言語生活調査の対象者を選定することだった。調査対象に関して、我々は①スザノ福博村(512人)、アリアンサ移住地(644人)に居住する日系人全体を対象とする
 悉皆調査は調査地の言語生活の実態や言語意識などを考察するという目的からすれば必ずしも必要ではない、②調査資金、期間、人材などを勘案すると悉皆調査は不可能である、という認識から、標本(サンプル)による調査を実施することにした。サンプリングに関しては「包括的視点をもつ全体的把握」という目的が最重要視されたことは言をまたない。

我々がサンプリングの基準として採用したのは年齢(15歳以上)と世代(注22)であった。それは、先行研究からの知見や「日系社会実態調査」のデータなどを検討した結果、世代と言語能力意識や言語生活の実態にはある種の相関関係が予想されており、また、世代は通時的にも共時的にも、当該集団地の言語生活の実態を包括的に考察する上で有効な指標と考えられたためであった。

我々は世代という指標に基づき、まず二つの集団地に居住する15歳以上の日系人を一世、二世、三世以下[以降]というサブグループに類別した。この際、日系世帯に含まれる非日系世帯員は除外し、四世、五世という世代帰属者及び混血日系人は三世以下[以降]というサブグループに含めた。そして、この三つのサブグループを言語生活調査の世代サンプリングのための母集団とした。

次に、我々はこの三つの母集団からどのくらいのサンプルを抽出するかを検討した。このとき、我々が念頭においたのは第一に二つの集団地における言語生活実態の世代間比較考察を通じての包括的把握に有意な数量であること、第二に本プロジェクトの目的の一つである「言語の保存・記録事業」との関連であった。両調査地における15歳以上の世代別人口構成(一世、二世、三世以下、非日系、その他・無回答という範疇による)をみたのが表4である。この表から両調査地とも一世人口は20%未満で、人口構成の中心は二世と三世以下の日系人となっていることがわかる。この世代別人口構成比に対応し、世代間比較考察が可能な数量をサンプルとして抽出するのが包括的全体的把握という目的にとって最も理想的なかたちといえるが、しかし、「言語の保存・記録」を念頭におけば、高齢化が著しく進行する一世を多くサンプルとして抽出し、「消滅しつつある」言葉を数多く保存することが、保存・記録の緊急性からいってもものぞましい。我々は世代間の比較考察に基づく全体的把握と緊急性を有する言語の保存・記録という二つの目的をともに重視する立場にたち、さらに調査資金や期間、調査員数なども考慮しながら、各調査地の各世代40人というサンプル数を設定した。この各調査地各世代40人という数量はそれぞれの集団地内及び集団地

世代	スザノ福博村	アリアンサ移住地
一世	100(21.4%)	103(17.7%)
二世	217(46.5%)	299(51.4%)
三世以下[以降]	120(25.7%)	170(29.2%)
非日系人	22(5.0%)	10(2.0%)
その他・無回答	8(2.0%)	—
合計	467(100.0%)	582(100.0%)

表4 スザノ福博村・アリアンサ移住地における

15歳以上世代別人口構成

[出典] サンパウロ人文科学研究所編 [2002] p.55表改定

世代	スズノ福博村	アリアンサ移住地	合計
一世	46(46,0%)	45(43,7%)	91
二世	43(19,8%)	46(15,3%)	89
三世以下	42(25,5%)	48(20,9%)	91
合計	131(37,6%)	139(21,9%)	270

表5 抽出された世代別サンプル数
 [註] ()内はそれぞれの世代総人口に占める
 サンプル数の割合を示す

間の世代別比較考察を行なう際に分析の有意性を維持しうるものである。一方、この40人というサンプル数は世代構成比の小さい一世世代ではその半数近くの言語生活調査を行なうということを意味しており、保存・記録事業という目的も達成できる数量であろう。

サンプリングは三つのサブグループに類別された個人のリストを作成し、そのリストから40人を目安に等間隔抽出するという方法で行なわれた。実際には、不在、死亡・病気、調査拒否などの事由が予想されたため、40人よりも若干余裕をもたせるかたちでサンプリングを行なった。こうして抽出されたサンプル数は表5に示すとおりであり、一世のサンプル数が世代人口構成比に比して相対的に多く、それぞれ人口数の40%以上になっている。一方、二世、三世以下は世代別人口数の15%から25%程度となった。また、スズノ福博村、アリアンサ移住地の総人口に対するサンプル数の比率はそれぞれ38%、22%となった。

次に、調査地ごとに、抽出されたサンプルの10歳別年齢構成をみてみよう[表6、7]
 この年齢別世代別人口構成によると、スズノ福博村、アリアンサ移住地の言語生活調査サンプルは次のような特徴をもっているといえる。一世に関しては、年齢層は70歳代と80歳代に多く集中する(スズノでは戦後移民の存在から50歳代も多くなっている)、二世に関しては、スズノ福博村は40歳代から60歳代までに集中し、アリアンサ移住地では50歳代と60歳代に多く、三世に関しては双方ともに30歳代以下の年齢層にほぼ集中している。こうした世代ごとの年齢分布は家族内地位

世代	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	合計
一世	—	—	—	1	10	4	21	10	46
二世	—	5	3	8	17	9	1	—	43
三世以下	4	20	10	7	1	—	—	—	42
合計	4	25	13	16	28	13	22	10	131

表6 スズノ福博村言語生活調査サンプルの年齢構成

世代	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	合計
一世	—	—	1	1	3	9	16	15	45
二世	2	2	4	5	17	14	2	—	46
三世以下	14	15	18	2	—	—	—	—	49
合計	16	17	23	8	20	23	18	15	140

表7 アリアンサ移住地言語生活調査サンプルの年齢構成

関係でいえば、一世=祖父の世代、二世=父母の世代、三世=子供の世代という「三世代」を代表するものということも可能であろう。

調査項目の決定プロセス

言語生活調査では、調査票を用いた構造的面接法と面接場面の録音[記録・保存]を主な調査法として用いた。言語生活調

査に用いた調査票に盛り込まれた調査項目(設問項目)は概ね以下のようなトランスナショナルな作業を通じて検討され、確定された。調査項目の選定―決定は、まず日本側において社会言語学を専門領域とする共同研究者が中心となり、当該学問領域から重要かつ必要である設問項目を検討し、ブラジル側にメール等を利用して送付する。ブラジル側では文化人類学や社会学を専攻し、かつブラジル日系社会において多くの調査研究経験を有する共同研究者や研究協力者が、日本側の送付した設問項目を、ブラジル日系社会の現実を反映し、調査に適用可能なかたちに練り上げる(質問文、選択肢のカテゴリーの選定など)作業を行ったり、現実には適用し得ない設問項目に関しては日本側に送り返し、言語学領域からの再考を要請したりした。こうした作業は国際的学際的な共同研究であるという本プロジェクトのメリットをフルに活用したものと見えるだろう。設問項目を巡るやり取りは2003年3月末、調査準備の最終リミットまで熱心に続けられた。

調査項目(設問)は基本的に①言語行動面、②言語意識・意見面という二つの範疇に区分することができる。換言すれば、言語生活調査票は日系人の言語生活の実態を行動と意識という側面から総合的に把握するという意図を持って作成されたといえよう。この調査票はこうした目的のほか、2003年7月下旬から予定されていた談話収録調査の対象者選定のための基礎データ及びフェイスシートとして利用する目的ももっていた。この目的のために、調査項目の中に「言語を中心とした生活史」という範疇に類別される設問が組み込まれた。この範疇に含まれる設問群は数量的分析とともに、半構造的インタビューによって、ある程度、調査員が被調査者とのフォーマルな対話を引き出すことも意図しており、この対話を録音することで談話データとして、あるいは談話収録調査対象者選定のための基礎データとして利用することも意図されていた。また、調査票には調査員の観察による、被対象者の談話収録調査実施者としての適性を判断する項目も盛り込まれた。つまり、言語生活調査はそれ自体完結した調査であるとともに、談話収録調査の予備調査も兼ねた「構造」をもっていた。

調査項目に関する詳細な説明は別の箇所で行われる予定であるので、ここでは言語生活調査票に盛り込まれた設問項目について、大分類項目だけを一覧表として提示するにとどめる。(表8)

言語生活調査準備作業

言語生活調査実施のための具体的な準備作業が2003年3月末から開始された。主要な点を箇条書きで示す。

(1) 調査票の印刷製本及び調査関連書類の作成―調査票はオフセット印刷。調査関連書類には調査協力依頼書、調査録音承諾書、調査対象者リスト、調査実施マニュアル、調査票回答カード、調査員の身分証明書(写真つき名札、調査員の氏名や身分証明書番号などを記入した紹介文

設問の範疇	設問番号と内容	対象者
①社会的属性	1.性別、2.生年月日、3.世代、4.国籍、5.誕生地、6.婚姻上の地位、7.配偶者の国籍、8.学歴(日本)、9.学歴(伯)	すべての被調査者
②言語を中心とした生活史(1)	10.渡航年、11.移住時の家族構成、12.当初のブラジル滞在期間[予定]、13.最初の入植地、14.最初の入植地における日本人、15.ガイジンとの接触、16.移住前のポルトガル語の知識、17.移住直後のポルトガル語使用、18.成人後のポルトガル語学習、19.日本へのデカセギ、20.日本語学校通学経験	一世のみ
③言語を中心とした生活史(2)	21.誕生地—農村/都市、22.子供時代の家庭内使用言語、23.学齢期以前の友人との会話、24.日本学校への通学、25.成人後の日本語学習、26.デカセギ体験	二世以下
④家庭での言語使用	27.同居世帯員、28.家族に対する使用言語、29.家族がInf.に対して使う言語、30.家庭団樂時の言語、31.NHK海外視聴装置、32.日本の親戚との交際、33.家庭で定期購読している新聞・雑誌	すべての被調査者
⑤言語使用—メディア・娯楽ドメイン—	34.NHK海外放送、35.日本のビデオ、36.ブラジルのTV番組、37.ブラジルの日系TV番組、38.NHK短波放送や日系ラジオ、39.日本語の新聞、40.ポルトガル語の新聞、41.日本の歌、42.カラオケ	すべての被調査者
⑥言語使用—職場・地域社会ドメイン—	43.仕事での日本語使用、44.仕事でのポルトガル語使用、45.地域の日系団体の会合や活動への参加と使用言語、46.友人構成と使用言語、47.宗教帰属、48.宗教活動への参加状況と使用言語	すべての被調査者
⑦日本語能力意識	49.日本語会話、50.日本語聴解、51.日本語読解、52.日本語書く	すべての被調査者
⑧ポルトガル語能力意識	53.会話、54.聴解、55.読解、56.書く	すべての被調査者
⑨日本語教育意識	57.日本語学習希望、58.子供・孫に日本語学ばせたいか、59.若い日系人の日本語学習の必要性、60.地域の日本語学習を巡る問題、61.日系人が日本語を話すのは当然という意見への態度	すべての被調査者
⑩訪日経験と言語意識	62.訪日経験、63.訪日目的、64.日本語通じたか、65.ブラジルの日本語と日本の日本語の相違、66.日本での居住・理由・日本語学習希望、日本語の上達、日本のイメージ	すべての被調査者
⑪コロナ語を巡る意識	67.日本語とポルトガル語を混ぜるか、68.日本語とポルトガル語を混ぜることに対する意見	すべての被調査者

表8 言語生活調査票の構成・設問項目(大分類)・対象者

書)、調査協力礼状などがある。これらは調査実施マニュアルを除いてすべてポルトガル語、日本語の二ヶ国語で作成されている。

(2) 調査地との打ち合わせ—共同研究者、研究協力者が現地に出張し、スザノ福博村は村のリーダーである大浦文雄氏を中心とする福博村会のメンバー、アリアンサ移住地はアリアンサ文化協会連合会及び第1から第3までの各移住地の文化協会役員に対して、調査に関する詳細な説明を行なうとともに協力方を要請した。具体的には調査日程の調整と決定、調査員の集団地内移動にかかわる交通手段の確保、宿泊場所の確保、食事の手配、調査協力依頼書の配布依頼などの作業を行なった。両集団地とも、我々の調査の意義と重要性を理解いただき、全面的な協力を得ることができた。

(3) 調査員の募集と調査実施マニュアルによるトレーニング—言語生活調査時期は日本側チームが参加する談話収録調査が7月下旬から8月上旬という時期を動かさない状況や談話収録調査

のための様々な準備作業などの存在を勘案すると、4月から5月上旬までの時期に実施しなければならなかった。しかし、この時期、ブラジル側共同研究者の大半は大学での前期講義が始まっており、フルタイムの参加は困難であった。そこで、言語生活調査は基本的にアルバイト調査員を用いることにし、日本語を母国語とする日本人を対象に調査員募集を行なった。その結果、カンピーナス大学留学生、日系人と結婚した日本人女性（日本語教師）、サンパウロ市内の日本人大学生、邦字新聞記者など、日本語を母国語とする青年たちを採用することができた。調査員に対しては調査に先立ち、4.5時間のトレーニングを行なった。トレーニングは「調査実施マニュアル」に沿って、本プロジェクトの概要、言語生活調査の目的、調査票のアプリケーションの方法、録音器材の操作方法、録音承諾書、調査地の概要、調査携行品などが共同研究者及び研究協力者から詳細に説明され、調査員のフィールドワーク実践の統一性が可能な限り図られた。

言語生活調査—実施状況—

言語生活調査はスザノ福博村では2003年4月中旬、アリアンサ移住地では4月下旬から5月はじめにかけて、それぞれ一週間ほどの期間で実施された。調査員には期間中、一日に付き2～3件のインタビュー調査が割り当てられたが、調査地のリーダー、協力者、被調査者等の全面的な協力と、調査員の努力により、ほぼ所期の目的を達成して言語生活調査を終了することができた。

言語生活調査はスザノ福博村131人、アリアンサ移住地140人を対象に実施されたが、最終的には両地域とも死亡、病気療養中、転出、デカセギ、調査期間中の不在などの事由により言語生活調査を実施できなかったケースも出現した。スザノ福博村の場合には24人、アリアンサ移住地の場合には38人が上記のような事由で調査不能であった。従って、言語生活調査を実施し得たのはスザノ福博村107人（82%）、アリアンサ移住地101人（73%）となった。

言語生活調査実施状況を世代別にみると、両調査地ともに一世、二世の調査完遂率は8割を超えたものの、三世層になると転出、不在、デカセギなどの事由からの調査不可能のケースが数多く出現し、調査完遂率は6割程度に留まることになった。言語生活調査は調査予定者の82%、73%で調査を実施しており、所期の目的は達成したと考えられたが、事例数を増やすために、調査期間中に新たに調査対象者を抽出し、スザノ福博村（三世のケース1例）、アリアンサ移住地（一世4例、二世5例）双方で追加調査を実施した。

この結果、最終的にはスザノ福博村108人、アリアンサ移住地110人の言語生活調査を完遂した。この言語生活調査実施者の世代別人数は表9に示したとおりである。

世代	スザノ福博村	アリアンサ移住地	合計
一世	39	41	80
二世	41	41	82
三世以下	28	28	56
合計	108	110	218

表9 言語生活調査実施者の世代別調査地別人数

調査データのデータベース化と集計分析

言語生活調査で収集されたデータ(調査票)と録音済みカセットテープは5月下旬に事業推進者の属する大阪大学に送付され、日本側の共同研究者や研究協力者の手で、コーディング作業、コード化されたデータのコンピュータへの入力作業(Excel使用)そしてデータベースによる集計分析作業が実施された。また、日本側においては、データと言語生活調査時に録音されたカセットテープの聴取、さらには調査票に盛り込まれた談話調査適性項目などを参照しながら、7月に実施された談話収録調査の調査対象者の選定作業が行なわれた。ブラジル側チームの談話収録調査の調査対象者の選定作業も、日本側が作成したデータベースを用いて進められた。

おわりに

日系社会言語生活調査は以上のようなプロセスを経て立案、準備、実施された。既に指摘したように、本研究は様々な限界と今後の課題を残している。我々が実施しえた調査は約140万人と推計される日系人口のごく一部、しかも農村部居住者に制限されており、言語環境が著しく異なる都市部に在住日系人(社会)の言語生活の実態は未調査のままである。また、農村部日系集団地とはいっても、我々が実施しえたのはサンパウロ州内に位置するたった二つの集団地にすぎない。ブラジル国内の日系集団地は農村部だけでも100箇所以上存在すると見られているが、そのほとんどにおける言語生活実態に関しては何の情報ももっていない。これらの集団地は北はアマゾン地域から、南部、さらには東北伯地域、中西部地域という様々な気候的地理的歴史的社会的環境の差が大きい地域に散在しており、日系人の言語生活や言語の地域的変差などに関する研究は重要な今後の研究課題となるだろう。さらに、ブラジルの日系人口の約10%を占め、他の本土系日系人とは重なりあう部分もあるものの、異質な歴史過程をブラジルにおいても経験してきた沖繩系日系人の言語生活に関する実態把握も今後の課題であろう。

また、今回の言語生活調査及び談話収録調査では、ブラジル日系人の言語のうち、日本語という領域が中心的に調査されることになった(この問題は「消滅しつつある言語」の記録・保存の緊急性とも関連する)。もちろん、日本とブラジル側との研究分担により、ブラジル側チームはポルトガル語による談話収録を中心に実施しているが、今後、日系人を巡る言語研究は日系人の話すポルトガル語の側面を重視し、日本語とポルトガル語の相互関連性を視野に入れた総合的包括的な考察、モデル構築という方向へさらに展開されねばならないだろう。

さらに、グローバリゼーションの進行により、特異な言語状況を背負った日系人の新たな移動(日本へのデカセギなど)が活発化している現在、ディアスポラの日系人を対象にした言語研究も

今後益々重要性を持ってくるに違いない。以上のような様々な限界を認識しつつも本プロジェクトは実施された。本プロジェクトは将来のブラジル日系社会(日系人)の言語学的研究の展開と深化にとって、そしてグローバル化の進行の中で、今後益々増加するだろう日本語と他言語との言語接触をはじめとする言語学的研究に対して大きな貢献をなしていくだろうとも自負している。

我々の研究は小さな一歩であったが、重要な一歩であったに違いない。

(サンパウロ大学)

1 ————— 本論は言語生活調査の立案から調査設計までを中心に概観するものであり、実際の調査におけるフィールドワーク実践に伴う諸問題の検討は、本プロジェクトの共同研究者である中東や研究協力者であるMeloが実施した談話収録調査を中心とする予備調査の中で行なわれているので、そちらを参照していただきたい。中東靖恵(2003)Leonardo A. de P. MELO「ブラジル日系社会における言語の総合的研究に向けて(1)」『岡山大学文学部紀要』第39号 岡山大学文学部 pp.67-82

2 ————— 移民、特に知識人たちが日系人の日本語、即ち「コロナア語」に言及し始めるのは50年代初頭からで、その中心的な論者は半田知雄、アンドウゼンパチらであった。半田の主要な論考としては1952年「ブラジルにおける日本語の運命」『時代』第15号、アンドウゼンパチの主要論考は1956年「コロナア語」『エスペランサ』第3号、1958年「二世とニッポン語」(私家版)などがある。半田は1980年に『言語生活』誌346号から348号に、三回の連載で「ブラジル日系社会における日本語の問題」と題する論考を発表している。

3 ————— 日本語教育関係の研究は、輪瀨俊彦郎によるリベイロン・プレット地域における子弟教育に関する調査を最初とし、最近では日本語普及センターによる日本語シンポジウム報告書まで、連続として継続されてきている。

4 ————— 1958年の調査はサンパウロ大学日本文化研究所の創設者である鈴木梯一を委員長とする「ブラジル日系人実態調査委員会」がブラジル日本移民50周年記念事業の一環として、悉皆調査法によって実施したものである。この調査結果は『ブラジルの日本移民(記述篇)』『ブラジルの日本移民(資料篇)』として、いずれも1964年に東京大学出版会から日英二か国語で出版されている。一方、1987、1988年に実施されたブラジル日系人口調査はサンパウロ人文科学研究所の日本移民80周年記念事業の一環として、国際協力事業団からの委託調査として行われたもので、方法論としては層化地域サンプリング法が用いられている。筆者はこの調査にコーディネーターとして参加し、報告書を執筆した。この報告書は1990年、サンパウロ人文科学研究所編『ブラジルにおける日系人口調査—1987-1988—』として刊行されている。これら二回の日系人口調査には言語関連の設問項目もいくつか含まれている。たとえば、1958年調査では「家庭内で家長が子どもと話すとき、主としてポルトガル語で話しかけるかあるいは日本語で話しかけるか、それとも両者を混合して使っているか」という設問によって、当時の日系家庭の家庭内使用言語状況の一端が明らかにされている。この結果を要約すれば(1)日本生まれの家長の場合には日本語が多く、ブラジル生まれの家長の場合には、日本語使用は減少し、両国語の併用、ポルトガル語が増加する、(2)市街地の方が農村に比較して日本語使用が少なく、併用及びポルトガル語使用が増加する、(3)家長が移民であっても、市街地での日本語使用は少なくなる、(4)市街地居住年数が多くなればなるほど、日本語使用は減少する、(5)日本で教育を受けた者は日本語使用が卓越し、ブラジルの中等以上層では圧倒的にポルトガル語の使用率が上昇する、(6)家長の日本における職業—農業・非農業—で使用言語の差はなく圧倒的に日本語が多い、など家庭内での言語使用をめぐる社会的傾向性が示唆されている。1987-1988年調査では、ポルトガル語—日本語習得状況(意識)と家庭内使用言語という設問がもうけられており、以下のような傾向性が指摘されている(『ブラジルにおける日系人口調査—1987-1988—』pp.106-113)

(1)日本語・ポルトガル語習得状況(意識)では男女差はほとんどなく、日本語・ポルトガル語ともに「十分できる」が36%程度、続いて日本語が全くできず、ポルトガル語は十分できるとする者が33%、日本語は少し出来、ポルトガル語は十分できるが25%程度となっている。農村・都市別では農村部居住者の方が双方とも十分できるが都市居住者を上回っている。(2)家庭内において何語を話しているかに関しては、過半数(56%)の世帯でポルトガル語が日常的に話され、日本語が話されている世帯はわずかに6%にすぎない。また両国語併用は20%程度であった。都市・農村別では農村の方が日本語使用率が都市の三倍程度(22%)となり高くなっている。(3)家庭内人間関係別使用言語に関しては、世帯主夫婦の場合にはポルトガル語を使用するケースが48%程度で最も多く、日本語及び両国語の併用はそれぞれ10%台となって拮抗している。都市・農村部別にみると、都市部でのポルトガル語使用率が高く、農村部では逆に日本語使用率が高くなっている。一方、親子間(世帯主の世代と子どもの世代)ではポルトガル語使用が51%と過半数になり、この比率は農村部よりも都市部で高くなっている。他方、世帯主と親との使用言語は日本語が最も多く39%、続いて両国語併用となっている。都市・農村別では農村で日本語使用が著しく高く7割近くに達している。

- 5 ———— ブラジル日系人の言語に関する言及は主に『言語生活』という雑誌で、野元菊雄、半田知雄、馬瀬良雄などによって1960年代末から80年代にかけて盛んになされている。この雑誌における日系人の言語に関する言及は1959年の太田典礼「ブラジル邦人の言語生活」『言語生活』97 64-70である。
- 6 ———— 山東功(2003)「ブラジル日系人の日本語への視点」『女子大文学 国文篇』54 大阪女子大学人文社会学部 36-54 中東靖恵(2003)Leonardo A. de P. MELO「ブラジル日系社会における言語の総合的研究に向けて(1)」『岡山大学文学部紀要』第39号 岡山大学文学部 67-82 日本人研究者、ブラジル日系人研究者による「ブラジルの日本語」研究のレビューは山東(2003)に詳しい。
- 7 ———— 1970年代以降、ブラジルの日本語、日系人の話す言語研究はブラジルの日系人研究者の研究対象ともなってきた。現在までの研究業績は本プロジェクトのブラジル側共同研究者がリストおよびレビュー論文を作成中である。
- 8 ———— たとえば、永田(1991)や久山(2000)の論考をみよ。永田高志(1991)「ブラジル日系人の言語生活—アサイ日系社会を例に—」『移住研究』28、国際協力事業団、45-54、久山恵(2000)「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用—その形態と運用—」『社会言語科学』3-1、社会言語学会 4-16
- 9 ———— 中東&MELO 前掲論文[2003] p.73
- 10 ———— この学会はブラジル国内で日本語・日本語文化・文化領域のコースないし講座をもつ諸大学が毎年持ちまわりで開催しているもので、2002年8月の学会はカンピーナス大学とサンパウロ大学の共催というかたちで、サンパウロ大学日本文化研究所で行われた。この学会には本プロジェクトの共同研究者中東靖恵も何度か参加、研究発表を行っている。
- 11 ———— サンパウロ人文科学研究所編(2001)『日系社会実態調査中間報告書』サンパウロ p.2
- 12 ———— 1987年にサンパウロ人文科学研究所が実施した調査によると、ブラジルの日系人口は128万人程度と推定され、地域別には南東部にその79%ほどの91万人が、続いてパラナ州を中心とする南部に総人口の12%、14万人程度が集中している。南東部ではサンパウロ市及び大サンパウロ都市圏に50万人程度、これらを除くサンパウロ州内に40万人程度が集中していた。サンパウロ人文科学研究所編(1989)『ブラジルに於ける日系人口調査報告書—1987・1988—』サンパウロ、人文科学研究所、pp.14-21
- 13 ———— これらの調査地区の決定には先行する調査研究の存在、文献資料の有無、調査協体制の確保など様々な条件が勘案されている。
- 14 ———— 都市部に居住する日系人の統計的調査の困難性はバイアスのかからないサンプリングを行なうことができないという点にあり、こうした調査を実施しようとすれば調査地域に居住する住民全部を調査し、日系人の存在を確認するという作業をまず実施しなければならないが、現実的には不可能である。
- 15 ———— サンパウロ市ビラカロン地区のケースでは、地域内に沖縄系、本土系の二つのエスニック組織が併存している。このため、この地域に関しては両方の会員名簿から抽出を行った。
- 16 ———— 1987年の調査結果によると、都市部における日系団体への加入状況は25%、農村部において56%にすぎない。日系団体のタイプ別では地域文化協会への加入率が最も高いがそれでも17%にすぎない。サンパウロ人文科学研究所前掲書 1989 p.115
- 17 ———— ビラカロンとスザノ福博村調査では、このほかに「日系人アイデンティティ調査票」も適用されたが、いくつかの設問項目に人種偏見的内容のものが存在したため、アリアンサ、マリंगाではこの調査票を用いた調査を断念した。
- 18 ———— 世帯調査票補票は当該世帯からさまざまな事由により展開を逃げていった旧世帯員に関する情報を得、世帯やコミュニティの動態的な側面を把握するために適用されたものであった。
- 19 ———— ここでは、日系人の言語生活に関連する設問項目の調査結果について、それぞれ単純集計結果を提示しておこう。様々なファクターとのクロス集計は現在、言語生活調査結果とともに行われている。

(1)家庭内人間関係別使用言語

親子間使用言語	ビラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
ポルトガル語	86(40.4%)	31(28.7%)	187(71.4%)	39(24.7%)	343(46.3%)
日本語	26(12.2%)	31(28.7%)	14(5.3%)	47(29.7%)	118(15.9%)
日本語とポルトガル語併用	70(32.9%)	46(42.6%)	61(23.3%)	72(45.6%)	249(33.6%)
その他	25(11.7%)	—	—	—	25(3.4%)
不明	6(2.8%)	—	—	—	6(0.8%)
合計	213	108	262	158	741

○親子間(世帯主と子ども)

表1. 家庭内使用言語—親子—

親子間使用言語	ビラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
ポルトガル語	53(29.4%)	36(31.3%)	152(63.3%)	38(25.3%)	279(40.7%)
日本語	48(26.7%)	43(37.4%)	24(10.0%)	66(44.0%)	181(26.4%)
日本語とポルトガル語併用	41(22.8%)	35(30.4%)	63(26.3%)	46(30.7%)	185(27.0%)
その他	34(18.9%)	—	—	—	34(5.0%)
不明	4(2.2%)	1(0.9%)	1(0.4%)	—	6(0.9%)
合計	180	115	240	150	685

○夫婦間(世帯主夫婦)

表2. 家庭内使用言語－夫婦－

親子間使用言語	ビラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
ポルトガル語	152(83.1%)	82(74.4%)	242(84.7%)	34(55.2%)	492(76.8%)
日本語	6(3.3%)	4(4.9%)	4(1.7%)	8(6.0%)	22(3.4%)
日本語とポルトガル語併用	17(9.3%)	17(20.7%)	31(12.8%)	52(38.8%)	117(18.3%)
その他	3(1.6%)	—	1(0.4%)	—	4(0.6%)
不明	5(2.7%)	—	1(0.4%)	—	6(0.9%)
合計	183	82	242	134	641

○子ども間(世帯主の子ども)

表3. 家庭内使用言語－子ども間－

(表1～3のその他に分類されるのはビラカロン在住の沖縄系人が使用するウチナーグチである)

(2)定期講読物(新聞・雑誌)

新聞	ビラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
ポルトガル語	73(39.7%)	41(43.2%)	203(82.5%)	45(39.5%)	362(56.7%)
日本語	53(28.8%)	30(31.6%)	16(6.5%)	52(45.6%)	151(23.6%)
日本語とポルトガル語双方	53(28.8%)	24(25.3%)	15(6.1%)	13(11.4%)	105(16.4%)
その他	5(2.7%)	—	6(2.4%)	1(0.9%)	12(1.9%)
不明	—	—	6(2.4%)	3(2.6%)	9(1.4%)
合計	184	95	246	114	639

○定期講読物(新聞)

表4. 定期講読物－新聞－

雑誌	ビラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
ポルトガル語	91(67.4%)	31(48.4%)	189(84.4%)	39(37.5%)	350(66.4%)
日本語	26(19.3%)	24(37.5%)	12(5.4%)	42(40.4%)	104(19.7%)
日本語とポルトガル語双方	16(11.9%)	9(14.1%)	9(4.0%)	19(18.3%)	53(10.1%)
その他	2(1.5%)	—	8(3.6%)	4(3.8%)	14(2.7%)
不明	—	—	6(2.7%)	—	6(1.1%)
合計	135	64	224	104	527

○定期講読物(雑誌)

表5. 定期講読物－雑誌－

(3)日系メディア(NHKと日系ラジオ)

日系メディア	ビラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
見る	84(35.6%)	49(36.6%)	85(31.4%)	68(36.8%)	286(34.6%)
見ない	150(63%)	84(62.7%)	186(68.6%)	117(63.2%)	537(65.0%)
不明	2(0.8%)	1(0.7%)	—	—	3(0.4%)
合計	236	134	271	185	826

○日系メディア(NHK)

表6. 日系メディア－NHK－

日系メディア	ビラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
聞く	65(28.0%)	15(11.4%)	17(6.3%)	12(10.1%)	109(14.5%)
聞かない	164(70.7%)	116(87.9%)	250(93.3%)	107(89.9%)	637(84.8%)
不明	3(1.3%)	1(0.8%)	1(0.4%)	—	5(0.7%)
合計	232	132	268	119	751

○日系メディア(日系ラジオ)

表7. 日系メディア－日系ラジオ－

(4)日本語能力意識(自己評価)

日本語能力	ピラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
できる	229(24.5%)	202(39.5%)	160(15.8%)	260(40.4%)	851(27.4%)
まあまあ	299(31.9%)	141(27.5%)	308(30.3%)	266(41.3%)	1014(32.6%)
全くだめ	371(39.6%)	154(30.1%)	542(53.4%)	106(16.5%)	1173(37.8%)
不明	37(4.0%)	15(2.9%)	5(0.5%)	12(1.9%)	69(2.2%)
合計	936	512	1015	644	3107

○日本語能力意識(読み書き)

表8. 日本語能力一読み書き一意識

日本語能力	ピラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
できる	432(46.2%)	322(62.9%)	286(28.2%)	414(64.3%)	1454(46.8%)
まあまあ	277(29.6%)	95(18.6%)	302(29.8%)	171(26.6%)	845(27.2%)
全くだめ	200(21.4%)	81(15.8%)	419(41.3%)	51(7.9%)	751(24.2%)
不明	27(2.9%)	14(2.7%)	8(0.8%)	8(1.2%)	57(18.3%)
合計	936	512	1015	644	3107

○日本語能力意識(話す・聞く)

表9. 日本語能力一話す・聞く一意識

(5)日本語学校通学経験

日本語学校通学経験	ピラカロン	スザノ福博村	マリंगा	アリアンサ	全体
通った	438(46.8%)	321(62.3%)	525(51.7%)	398(61.8%)	1682(54.1%)
通わなかった	416(44.4%)	164(32.0%)	469(46.2%)	233(36.2%)	1282(41.3%)
無回答	82(8.8%)	27(5.3%)	21(2.1%)	13(2.0%)	143(4.6%)
合計	936	512	1015	644	3107

表10. 日本語学校通学経験別人口

20 ———— アリアンサ移住地の場合、日系総世帯数は187世帯であるが、2世帯は日系社会実態調査時に調査不能となっており、ここではこの2世帯を除く185世帯をアリアンサ移住地の総世帯数とした。また、アリアンサ移住地内には弓場農場という約100名程度の日系人が共同生活を行う農場が存在しているが、世帯という概念を家計の共同と定義すれば、この農場は一世帯ということになってしまう。しかし、我々は弓場農場が家計の共同、食事の共同といった側面はもつものの、居住は「家族」単位に行われている点を考慮し、この同居する「家族」を一応「世帯」として捉えた。

21 ———— ブラジルのナショナリズムは1920年代から強まり(例えば1922年のSemana da Arte Moderna運動)1930年バルガスが政権に就き、Brasilidade(ブラジル魂)を通じてのブラジル国民生成を目的とする一連のナショナリゼーション政策、外国人移民同化政策を採用した。1930年には法令第1942号により、外国移民入国を制限し、被雇用者の3分の2をブラジル生まれの者とした。アリアンサ、スザノ福博村に影響を与えたのは1931年のサンパウロ州内務官憲に関する訓令、1933年サンパウロ州教育令、1934年外国移民2%割当法など一連の政策、法令、規定である。

22 ———— ブラジル日系人間で使用されている「世代」という概念には二つの算定方式が含まれている。一つは日本政府方式とも呼べるもので、デカセギ現象の広がりの中で市民権を獲得してきたもの。もう一つはコロンビア方式とも呼べるもので、日系社会で広く使われている算定方式である。両者は上位世代=親の世代帰属を基準とする点で共通するが、日本政府方式の場合には、一世と二世の親から生まれた子は二世と計算するのに対して、コロンビア方式ではその子は三世と算定する。つまり、日本政府方式の場合には、親の世代帰属の少ない方+1、コロンビア方式では親の世代帰属の多い方+1ということになる。又一世同士の親から生まれた子はどちらの算定方式でも二世となる。この世代概念は世代帰属算定の基準に従うもので、アイデンティティ、文化的特性などを示すシンボル概念ではない。日系社会実態調査ではこの二つの基準による世代別人口構成を示しているが、今回のサンプリングの基礎となったのは日本政府方式である。

【参考文献】

- アンドウ・ゼンパチ(1956)「コロニア語」『エスペランサ』第3号 p.3 (1958)『二世とニッポン語』(私家版)サンパウロ (1966)「コロニア語における日本語の運命」コロニア文学会編『コロニア文学』第2号
- アンドウゼンパチ他(1951)「二世と日本語の問題(座談会)」人文科学研究会編『時代』第13号
- 太田典礼(1959)「ブラジル邦人の言語生活」『言語生活』97 pp.64-70
- 木村義臣他(1951)「コロニアの日本語(座談会)」『時代』第14号
- 久山恵(2000a)「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用一借用頻度と社会的要因との関連性

について」『第7回国立国語研究所国際シンポジウム第1専門部会 日系ブラジル人のバイリンガリズム』国立国語研究所 1-19(2000b)「ブラジル日系一世の日本語におけるポルトガル語借用—その形態と運用—」『社会言語科学』3-1、社会言語科学会、4-16 ●佐藤常蔵(1956)「コロンビア語の解剖」『ブラジルの風味』東京 日本出版貿易株式会社 ●山東功(2003)「ブラジル日系人の日本語への視点」『女子大文学国文篇』54 36-54 ●サンパウロ人文科学研究所編(1989)『ブラジルに於ける日系人口調査報告書—1987-1988—』サンパウロ (2001)『日系社会実態調査中間報告書—2000・2001—』サンパウロ (2002)『日系社会実態調査報告書』サンパウロ ●鈴木英夫(1979)「ブラジル日系社会における外来語」『紀要A(人文科学・社会科学)』23 名古屋大学教養部 pp.115-134 ●鈴木妙(1994)「ブラジル日系人の敬語行動と文化変容」『世界の日本語教育(日本語教育論集)』4 国際交流基金日本語国際センター、pp.209-223 ●鈴木梯一(1964)『ブラジルの日本移民:記述篇』東京 東京大学出版会 ●中東靖恵&Leonardo A. de PMELO(2003)「ブラジル日系社会における言語の総合的研究に向けて(1)」『岡山大学文学部紀要』第39号 pp.67-82 ●永田高志(1990)「ブラジル日系社会の日本語言語生活—パラナ州アサイを例に—」『近畿大学文学部論集 文学・芸術・文化』2-2 5-80 (1991)「ブラジル日系社会の日本語生活—アサイ日系社会を例に—」『移住研究』28 国際協力事業団 pp.45-54 ●日本語普及センター編(1996)『'95(第4回)日本語シンポジウム記録書 ブラジルにおける21世紀の日本語を考える』日本語普及センター ●半田知雄(1952)「ブラジルにおける日本語の運命」人文科学研究会編『時代』第15号(1972)「日本語会話に取り入れられたポルトガル語」コロンビア文学会編『コロンビア文学』第17号(1980a,b,c)「ブラジル日系社会における日本語の問題(一)~(三)」『言語生活』p.346,347,348 筑摩書房 pp.75-81, pp.58-65, pp.67-73 ●半田知雄他(1970)「伝承に耐え得る日本語“コロンビア日本語”の現状と将来」『コロンビア文学』第12号 ●比嘉正範(1982)「ブラジルにおける日本人移住者の言語適応」『ラテンアメリカ研究』4 153-179 ●前山隆(1972)「トマテとコンピュータ縁起」『コロンビア文学』第18号

言語生活調査概要

エレン・ナカミズ 浅野卓夫

本節では、「ブラジル日系人の言語生活調査」において、二ヶ所の調査対象地域に居住する218名(サンパウロ州近郊農村部スザノ市福博村:108名、サンパウロ州奥地農村部アリアンサ移住地:110名)から収集した調査データを用いて、各調査項目に関する具体的な結果を提示する。

ここではまずインフォーマントの個人属性から概観し、ついで言語に関する調査項目、とりわけ言語能力および言語使用に焦点を当て、社会言語学の観点からその結果を述べることにする。具体的には、インフォーマントの個人属性に関して、I. 世代別年齢層の特徴、II. 社会経済的側面・日本との関係性の側面、言語面の調査項目に関して、III. 家庭および地域日系団体ドメインにおける言語使用、各ドメインにおける言語維持と言語シフトの実態、IV. コロニア語(日本語とポルトガル語を混ぜること)をめぐる実態と意識の、以上四点についてまとめている。なおI. II. IV. は浅野、IIIはナカミズが担当する。

インフォーマントの個人属性 1—世代と年齢—

本項では言語生活調査のインフォーマントの個人属性に関して、調査実施に向けて対象者選定の際の基準とし、また今回の調査目的であるブラジル日系人の言語使用の実態と最も関連性が深いと推測される「世代」および「年齢」という指標に関して、その特徴を見ていくことにする。ブラジル日系人の世代分類に関しては、サンパウロ人文科学研究所が「日系社会実態調査」で用いたものと同じ基準を選択した。すなわち、日本生まれのものを一世とし、ブラジル生まれでかつ一世同士の両親から生まれた者は二世、また二世同士の両親から生まれた者は三世とする。そして、ブラジル生まれで両親の世代が異なる場合、世代の算定方法としては、いわゆる「コロニア」方式(一世と二世の夫婦から生まれた子供は三世とする)と「日本政府」方式(一世と二世の夫婦から生まれた子供は二世とする)との二つの方式があるのだが、今回の言語生活調査では「日本政府」方式を採用した。ただしここで用いる「世代」の概念は、あくまでも調査対象者個人の属性を客観的に分類するための便宜的指標にすぎず、ブラジル日系社会における歴史的・文化的な「世代観」、日系人が持つ主体的なアイデンティティ意識とは一定の区別を設ける必要がある(サンパウロ人文科学研究

所、2002:54)。

まず、サンパウロ人文科学研究所の『日系社会実態調査報告書』を参照しながら、ブラジルにおける四つの日系地域共同体(サンパウロ市内都市部ピラ・カロン地区、サンパウロ州近郊農村部スザノ市福博村、パラナ州地方都市部マリンガ市、サンパウロ州奥地農村部ミランドポリス市アリアンサ移住地)の世代や年齢分布の傾向性を概観しておこう。それによれば、現在の日系地域共同体の世代別人口構成では、全般的に見ると、「二世」の比率が最も多く、全体の4割以上を占め、日系地域人口の中核層を構成しているといえる。ついで「三世」が約3割、「一世」が2割弱、そして「四世・五世・混血日系人・非日系人」が合わせて1割程度の順となっている。そして各世代の年齢別人口構成の特徴を見てみると、1世の人口は60歳代から80歳代までの「高齢者層」の比率がもっとも高く、2世の人口は10歳未満から80歳代までの広範な年齢層に拡散しているが、概ね「中年・壮年層」に集中し、そして3世の人口は30歳代までの「青(少)年層」が大半を占める。また4世以降の人口は10歳代までがほとんどである。なお混血日系人の人口比率が概ね20歳代までに集中し、また日系人の配偶者と仮定される非日系人の人口比率が高いのが30歳代・40歳代であることから、近年におけるインターエスニックマリッジ(異民族間結婚)の増加傾向もうかがわれる。こうした日系地域共同体における世代別年齢別人口構成の一般的な傾向性は、スザノ福博村でもアリアンサ移住地でも共通して見られるが、とくにアリアンサ移住地では2世の人口比率が他の地域と比較して圧倒的に多いという特色がある。(サンパウロ人文科学研究所、2002:55-56)。

なお、以下の表1、表2で、今回の言語生活調査における二ヶ所の調査地であるスザノ福博村とアリアンサ移住地のインフォーマントに関して、その世代や年齢の分布状況が提示してある。調査

	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	全体
1世	—	—	—	1(2.6%)	9(23.1%)	3(7.7%)	14(35.9%)	12(30.7%)	—	39
2世	—	3(7.3%)	2(4.9%)	9(22.0%)	13(31.7%)	13(31.7%)	1(2.4%)	—	—	41
3世	1(3.6%)	16(57.1%)	7(25.0%)	4(14.3%)	—	—	—	—	—	28
	1	19	9	14	22	15	15	12	—	108

表1 スザノ福博村の言語生活調査インフォーマントの世代別・年齢別人数(男性54名/女性54名)

	10歳代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	80歳代	90歳代	全体
1世	—	—	1(2.4%)	1(2.4%)	3(7.3%)	6(14.6%)	13(31.7%)	15(36.6%)	2(5.0%)	41
2世	—	2(5.0%)	5(12.2%)	5(12.2%)	11(26.8%)	14(34.1%)	4(9.8%)	—	—	41
3世	—	8(28.6%)	15(53.6%)	5(17.9%)	—	—	—	—	—	28
	—	10	21	11	14	20	17	15	2	110

表2 アリアンサ移住地の言語生活調査インフォーマントの世代別・年齢別人数(男性61名/女性49名)

対象者の選定にあたっては、先述の日系社会実態調査の結果で示された世代別年齢別人口比率を適用したので、地域全体の世代・年齢の分布状況はほぼ反映されているが、一世および二世のインフォーマントについては「言語の記録保存の緊急性」という視点から多めのデータを収集し、それと関連して3世の人数はやや少なくなった。ここでインフォーマント全体の世代別・年齢層の傾向性について詳細を述べることはしないが、一世のインフォーマントの特徴に関してのみ、ブラジルへの日系移民の社会史的文脈を踏まえ、「戦前移民／戦後移民」という範疇、あるいは「成人移民／子供移民」という範疇にも留意しながら簡単に述べておこう。

スザノ福博村では、1世の高齢者層のなかで、戦前の「子供移民」と戦後の「成人移民」が混在するため、一世層でも、またその子弟である2世・3世層でも、同じ年齢層に帰属しながら、成員相互間の社会的経験やアイデンティティの差異とばらつきが存在する可能性が高いことが予想される。しかしアリアンサ移住地について言えば、1世の年齢層と社会史的範疇の関連性を見ると、より年齢の高い順から各メンバーの特徴を概観すれば、戦前の「成人移民」―戦前の「子供移民」―戦後の「成人移民」という一連のスムーズな流れが見られ、同一年齢層内部で社会的差異があらわれるケースは比較的少ないと思われる。また、スザノ福博村では、戦前移民か戦後移民かを問わず、1世のインフォーマントはいわゆる「子供移民」が圧倒的に多く、一方でアリアンサ移住地では必ずしもそうした特徴は顕著にみられず、単身で移住したものや親世代と同伴しないで家族と移住したものも少なくないという調査地ごとの特徴も見られた。アリアンサ移住地の1世で「成人移民」の比率が相対的に高い要因としては、当地域が、スザノ福博村のような初期移民の短期出稼ぎ型から長期出稼ぎ型への生活戦略の転換によって形成されたいわゆる「植民地型」の集団地（大農場の契約労働者から、日系集団地での小型借地農・自営農へと流れる生活様式）と異なり、初めから土地所有者として移住することが目的の「永住定着型」の移住地（日本であらかじめブラジルの分譲地を購入し、自営農となる生活様式）であったという、日系地域共同体の入植形態をめぐる歴史的・経済的条件と深く関連するものと思われる。

インフォーマントの個人属性 2 ― 社会経済的側面や日本との関係性の側面 ―

今回の言語生活調査におけるインフォーマント個人の属性に関しては、社会学的観点から、基礎的な個人情報（性別、年齢、世代、国籍など）のほかに、社会経済的側面（婚姻上の地位、配偶者世代、学歴、職業など）、文化的側面（言語、宗教帰属など）、日本との関係性の側面（訪日経験、デカセギ経験）など、多様な視点からデータを収集した。こうしたインフォーマントの諸属性に見られる世代間の差異の特徴について、概して言えば、一世と三世の個人の社会的属性が鏡像的な対

照関係にあり、二世のそれはその中間の両義的な位置づけであるといえるだろう。つまり、十分予想されることではあったが、一世が代表する日本性／農業移民的特性は、二世層を仲立として、三世が代表するブラジル性／都市生活者の特性へと反転する傾向が、今回の調査結果においても実証的に示されたといえる。表3で、いくつかの項目について、その特徴を簡単に提示しておく。

言語使用に関する結果

ここでは、言語に関する項目、とりわけ言語使用に焦点を当て、社会言語学の観点からその結果を述べることとする。

なお、紙数が限られているため、今回は都市近郊農村であるスザノ福博村の日系人住民におけるデータのみを部分的に提示・分析する。具体的には、それぞれのドメインにおける言語維持と言語シフト(推移)の実態について考察してみたい。

データの分析は次のように行う。インフォーマントの言語活動をドメイン別に分け、それぞれのドメインにおいて一世から三世までの言語使用の連続的な変化を追究する。各ドメインにおける世代と言語保持・言語シフトの関係も明らかにすることを目的とする。

以下にスザノ福博村におけるドメイン別の結果を提示するが、その前に、これまでの分析で全体のデータに共通しているとわかった点を明記しておきたい。

(1) 今回はスザノにおけるデータのみを扱うが、言語能力と言語使用のいずれに関しても、スザノとアリアンサ、双方の調査地点でも類似した結果が得られたと記しておく必要がある。都市近郊農村であるスザノがより流動性があり、ブラジル人との接触も多いため、一世におけるポルトガル語の使用頻度が比較的に高いということはわかったが、全体的にアリアンサとは大きな相違が見られない。

個人属性項目	世代間の差異の特徴
配偶者世代	一世の配偶者世代では三世はみられず、一世と二世のみである。二世については同世代結婚が多く、インターエスニックマリッジのケースも出現する。三世の配偶者世代では一世はみられず、インターエスニックマリッジのケースが増加する。
学歴	一世の学歴では小学校卒業程度が大半を占める。二世では小学校卒業程度が最も多いが、大学卒業程度と高校卒業程度がそれに続く。三世では大学卒業程度が大半を占め、概ね高学歴だと言える。
職業・活動	一世は農業従事者が最も多く、退職者、主婦がそれに続く。二世についてもやはり農業従事者が最も多く、主婦がそれに続く。ただし、スザノ福博村では商業従事者の割合も一定程度あらわれる。三世においても依然として農業従事者が多いが、スザノ福博村では「商業・販売」、「管理・事務」、「専門・技術」など、より都市的な職業範疇へ就業人口が拡散する。
宗教帰属	一世では仏教信者が大半を占めるが、アリアンサ移住地ではプロテスタント信者の割合も一定程度存在する。「ブラジルの」宗教であるカトリックの信者の割合は少ない。二世では仏教信者とカトリック信者の割合が拮抗する。三世ではカトリック信者の割合が最も多くなり、「日本的／一世的」宗教である仏教やプロテスタントの信者の割合が少なくなる。
訪日経験	ここでいう「訪日経験」とは、観光や親戚訪問やデカセギ以外の仕事、そして留学・研修などを指す。一世の訪日経験者の割合は6割を超え、二世になると3割弱に減少し、三世にいたっては1割程度に過ぎない。デカセギ以外の「日本」との関係性は、親戚訪問などを通した訪日経験の多い一世がやはり強く、三世は弱くなる。
デカセギ経験	一世のデカセギ経験者の割合は1割に満たないが、二世になると1割を超え始め、三世にいたって3割程度へ増す。訪日経験とは逆で、デカセギを通した「日本」との関係性は、換言すれば職場としての「日本」との関係性は、三世において強くなり、一世では弱い。

表3 言語生活調査インフォーマントにおける世代間の個人属性の差異

(2) 言語形成期後に渡伯した一世と、言語形成期に渡伯した準一世の間に言語使用に関する有意な差は確認されなかった。しかし、この結果はアンケート調査によるもので、実質的な言語使用を調べた談話収録調査の結果と一致するとは限らない。

家庭における言語使用

各インフォーマントが家族の各構成員に使用する言語、またそれぞれの相手に話しかけられる言語を世代別に調べた。その結果を観察すると、家庭における言語使用については主に次のことが言える。

1. ——— 世代と言語シフト

各世代のデータを調べると、一世から三世へと日本語からポルトガル語への漸進的な推移が明確になる。その中で、どの聞き手に対しても日本語のみを使用する一世が過半数を占める結果と対照的で、ポルトガル語を優先する三世の結果が注目すべき点である。

一世と三世のデータは、それぞれ一定のパターンを示す一方、二世のデータにはばらつきが見られる。そのデータをさらに検討すると、二世を「一世寄り」の話者から「三世寄り」の話者までの連続体に配置することができる。すなわち、日本語を多く使用し、一世と類似する言語生活のグループ(一世寄り)と、ポルトガル語を多く使用し、三世と類似する言語生活のグループ(三世寄り)に分けられる。

2. ——— 世代間の言語使用

話者が、同世代と上世代と下世代、それぞれに話しかける時に必ずしも同一言語を使用するとは限らない。話し相手を問わず、全体的に日本語を多く使用する一世に対して、二世と三世は話し相手の世代により、言語を使い分ける傾向を示した。二世の場合、同世代の配偶者に日本語を使う「一世寄り」の話者が子供に対しても日本語を使用するとの回答は多かったが、その使用頻度がわずかに低くなることもわかる。しかし、配偶者と子供に対してポルトガル語のみを使用すると答えた「三世寄り」の二世は一世である父母に対しては、「一世寄り」の話者と同様に日本語で話しかけるという。

三世のほとんどは同世代の配偶者と下世代の子供、双方にもポルトガル語で話しかけるが、父母に対しては日本語も使用するという話者もいる。さらに、祖父母に対しては80%が日本語を使用する。ただし、三世の中で、現在祖父母が生きている人、また祖父母と接触のある人が少ないため、以上の結果を傾向として捉えることに留まる。

家庭における三世代の言語使用の結果を踏まえ、二世で本格化しはじめた日本語からポルトガル語へのシフト過程が三世ではほぼ完成していると結論づけてもよいであろう。

日系団体における言語使用

日系団体は当該コミュニティの住民が交流する場であると同時に、同じ言語共同体に属する日系人同士の連帯感を強め、かつ確認する場でもあると思われる。したがって、地域社会を代表するドメインだと言えるのである。その性質と活動内容によって、スザノとアリアンサの日系団体を「文化協会・自治会・村会」、「老人会」、「青年会」、「婦人会」、「文芸・スポーツ・趣味」、「その他」に分類し、それぞれにおける日本語とポルトガル語の使用率を調べた。スザノに関する世代別の結果は次のようにまとめられる。

なお、インフォーマントが複数の団体に参加する場合は、集計に当たって、参加する団体の数ではなく、「参加する」ことを重視した。

参加する人の詳細に関しては以下のような興味深い点が見られる。

(1) 言語使用に関する総括的な結果を述べると、一世は基本的に日本語のみを使用する。二世も日本語を多く使用する傾向があり、一世と類似したパターンを示している。社会的属性を調べてみると、そのほとんどが50歳以上の人で、「一世寄り」のグループに入ると思われる。二世の日本語使用に関するこの結果は家庭ドメインで得られたものと一致していることに注意されたい。三世はポルトガル語のみ、もしくはポルトガル語を多く使用すると答えた話者が最も多く見られる。

なお、日系団体に参加する人と参加しない人の割合に焦点を当てると、一世の場合は、それぞれ約50% (39人中19人)であり、二世と三世においては日系団体とかかわりのない人が半数を上回る(二世が41人中28人、三世が28人中19人)。

以上の結果では、日系団体においても、世代が入れ替わるにつれ、日本語の使用率が減っていくことが明らかになる。三世に至ると、日本語が実用的な言語として機能しなくなっていることも窺える。

(2) 団体別の結果を見ると、それぞれの世代が最も多く参加する団体はどれかということがわかる。一世は「文化協会・自治会・村会」、「老人会」、「文芸・スポーツ・趣味」、二世は「婦人会」と「文化協会・自治会・村会」、三世は「文化協会・自治会・村会」と「青年会」である。なお、三世を中心に活動する青年会においては、ポルトガル語の使用が圧倒的に多い。一方、自治会では、わずかでありながら、日本語を使用する三世話者も見られる。それは、上の世代、とりわけ一世との接触があるからだと考えられる。

以上、スザノ福博村の日系人コミュニティにおける言語使用の諸相を明らかにした。特に、言語保持・シフトの動向に焦点を当てながら、家庭ドメインと地域社会の一部である日系団体ドメインの実態を調べた。これまでの結果をまとめると、主に次のようなことがわかった。

(1) いずれのドメインでも世代が入れ替わるにつれ、日本語からポルトガル語への推移が明らかに見られる。一世と三世は一鏡像関係にあり、二世は二つのパターンを示した。すなわち、一世は、

いずれのドメインにおいてどの話し相手に対しても主に日本語を使用するという。それに対し、典型的な三世はポルトガル語を中心に生活していると思われる。一世と三世の接点になる二世の場合は、「一世寄り」の話者と、「三世寄り」の話者、二つのグループに分かれる。前者には高年齢の人がほとんどである。

(2) 全体の結果から述べると、生活に実用的な言語としての日本語は一世および一部の二世と会話をする場合に限られている。この傾向は、特に家庭ドメインで観察できる。低年齢の二世(40代以下の話者)から三世にかけて、ポルトガル語の単一話者になりつつあることが明確である。

コロニア語(日本語とポルトガル語を混ぜること)をめぐる実態と意識

言語生活調査では、いわゆる「コロニア語」の使用実態と意識やイメージに関して、「あなたは家族や日系人の友人と話すと、日本語とポルトガル語を話すことはありますか?」、「あなたは日本語とポルトガル語を混ぜて使うことをどう思いますか」という二つの質問をインフォーマント全員に対しておこなった。前者については、「ある」「ない」「わからない」という三つの回答選択肢を用意し、後者は自由回答とした。この項では、その調査結果について見ることにする。なお、ここでいう「コロニア語」とは、必ずしも言語学的に厳密な定義がなされた用語ではない。言語生活調査において、この設問に関するインタビューの局面では、インフォーマントの語りからしばしば「コロニア語」をめぐる多様な意味づけが聞かれたが、ここではそうしたインフォーマント自身の意見をかんがみて、ブラジルの日系人自身が日本語とポルトガル語を混ぜることを指し示す語という広い意味合として使う。

まず、コロニア語(日本語とポルトガル語を混ぜること)をめぐる使用実態に関する調査結果から見ていくと、スザノ福博村においてもアリアンサ移住地においても、一世・二世・三世の世代を問わず、インフォーマント全体の約8割、大半の人々が「日本語とポルトガル語を話すことはある」と答えている。しかしそのなかでも、「ある」の比率が最も高いのは2世層であり、両調査地ともその回答者は9割を越えている点が注目される。一方で1世層では「日本語とポルトガル語を話すことはない」と回答した者が2割以上、3世層でも2割弱あらわれる。この点に関して言えば、1世層では日本性/日本語へのより強いアイデンティティ意識、3世層ではブラジル性/ポルトガル語へのより強いアイデンティティ意識が、使用実態の回答の際にも反映されていると推測される。

コロニア語をめぐる意識については、各世代のインフォーマントから多様な意見や回答が得られたのだが、大きく分けて「ポジティブなイメージ」「ネガティブなイメージ」「中間的なイメージ」の三範疇にそれらの回答群を類型化することができる。「ポジティブなイメージ」としては、「話しや

すい・わかりやすい・コミュニケーションにおいて便利」という回答が各世代共通に見られ、1世層では「コロニア語は親しみのある言葉」、2世・3世層では「日本語を少しでも混ぜれば日本語を忘れないから良い」など、世代ごとの特色を持つより積極的な回答も得られた。「ネガティブなイメージ」としては、「良いとは思わないが仕方なく混ぜてしまう」という消極的な回答が各世代とも圧倒的に多く、ついで「日本語で話すときは日本語だけで、ポルトガル語で話すときはポルトガルだけで通したほうが良い」という否定的な意見も見られた。この設問に関しては「中間的なイメージ」をめぐる回答が全般的にもっとも多かったのだが、その具体的な内容は「自然なこと・普通なこと」「とくに意識することなく使っている」などの意見である。

〈京都外国語大学〉

〈サンパウロ人文科学研究所〉

言語の接触と混交

日系ブラジル人の言語の諸相

第1部 ブラジル日系社会と日本語

第3章

談話資料から見えてくるもの

— 移民社会と日本語の変容 —

この章で述べる談話収録調査は、下記の3つの目的で実施された。

(1) ブラジル日系社会における1世の言語(日本語)を記録保存すること。

1世の年齢を考えると、今が最後のチャンスである。実際、2000～2001年にかけて実施された社会調査のうちから選ばれた1世の方々の中には、2003年の調査時点で世界されている方々が予想以上に多かった。

(2) 様々な日本語の諸方言を母語とする日系移民の間で、どのような地域共通語としての日本語が形成されたのか、日本語諸方言の接触状況を記録保存すること。

3世においてはポルトガル語中心になっており、2世の高齢化も進んでいることから、緊急の課題である。

(3) 1世から3世にかけて、どのように日本語からポルトガル語への移行が進行しているのか、そのプロセスをマクロなレベルでもミクロなレベルでも分析できるような記録保存を行うこと。

以下には、談話収録調査のデザインと実施方法を提示した上で、1世、2世、3世の談話の典型を示している。1世においては、①日本における日本人と基本的に変わらぬ日本語による談話構成がなされている。②ポルトガル語は単語レベルの借用にとどまっている。③ただし、1世の日本語の実態とは、「言いよる、行きよる、来よる」のようなシヨル形式が、シトル形式やシテイル(シテル)形式とともにアスペクト形式として機能しているという現象に典型的に表れているように、日本におけるどの地域にもないかたちでの接触方言である。

2世においては、①日本語による文の単純化が進んでいる(複文ではなく単文が多くなっていく)。②文レベルのポルトガル語を使用している。③1世と同様に、接触方言としての日本語のバリエーションを使用している。

3世の談話資料は、同一地域社会の親しい人との対話を文字化した、1、2世のものとは資料の性格が全く異なり、調査者との対話において、無理に日本語を使用してもらった結果である。(3世では、同一地域社会の親しい人との対話は、すべてポルトガル語を使用した。)3世では、通常、ポルトガル語を使用してのコミュニケーションを行っているので、調査者との対話においても能動的話者としての発話行為を行っておらず、受動話者として、基本的に、単語レベルの日本語使用になっており、語形変化の単純化も顕著に進んでいること(これはコミュニケーションの基本単位が二語文であることを考えると、もはや日本語を使用しなくなっていることの構造面への反映である)に留意されたい。

紙幅の都合上ここに提示できたのはごく一部の資料にとどまり、特に2世については、1世寄りのパターンから3世寄りのパターンまで多様である。また、1世から3世にかけて大きく変化していく音声的側面への考察もできていない。従って、精密な分析はすべて今後の課題であるが、本プロジェクトにおける談話録音資料の最大の特徴は、「日系社会実態調査」を踏まえての「言語生活調査」、それを踏まえての「談話録音調査」という系統性によって、ミクロな言語構造的側面の分析が、その背景にある言語生活、さらにマクロな社会生活の側面と統合化して分析できるような包括性、体系性を備えていることにあると言えよう。

ただし、1、2世の談話録音の内容が、調査者は録音現場にいなかったとはいえ録音機材を目の前にしてのものであるので、現実態そのものであると考えるわけにはいかないであろう。実際、調査が終わったときにこそ、日本語とポルトガル語が混在した自然な発話形態が出現するというパラドックスが多々見られたのである。

〈工藤真由美〉

談話収録調査について

李 吉鎔 レオナルド・メロ

調査のデザインと基本的なコンセプト

調査法と談話の種類

本談話収録調査は、言語生活調査の延長として、サンパウロ州ミランドポリス市アリアンサ移住地(以下、アリアンサ地区と略称)とサンパウロ州スザノ市福博村(以下、スザノ福博村地区と略称)で行った。談話収録調査は半構造化インタビュー(semi structured interview)を採用し、基本的に調査員がインフォーマントの自宅を訪ねていき、録音・(一部)録画を行った。収録談話は①調査者との対話(フォーマルな談話:30分以上)、②地域内の同世代同性の友人・知人(key person)との対話(カジュアルな談話:30分以上)の2種類である。

次に、談話の種類として「対話」を収録したわけであるが、今回の調査においては、調査期間に制限があること、また一方的に話をするという独話よりも対話のほうがより自然な談話を収録できると考えたことから、対話形式の談話収録を行うこととした。話題は日常的な具体的なもの(例えば1世の場合、移住した当時のこと、自分の子供や孫など家族のこと、2、3世の場合は現在の仕事や家族のこと、子供の頃どんな遊びをしていたか、日本語をどこで勉強したかなど)から政治、経済、教育などの抽象的な話題へと展開していったが、調査時の雰囲気やインフォーマントの個性などに合わせ、臨機応変に、柔軟に対応した。②地域内の友人・知人(key person)との対話ではとくに限定せず、普段とおりに話し合ってもらった。

さらに、①調査者との対話においては、原則、調査者は日本語を使用することとした。しかし、日本語での質問が分からないなど、やむを得ない場合にはポルトガル語を使用してもよいこととした。また、②地域内の友人・知人との対話においては、できるだけ日本語を使用して会話をしてもらったが、例えば話題により日本語での対話が困難である場合など、あまりにも日常の会話とはかけ離れるような場合においては、ポルトガル語の使用を認めることとした。

最後に、カジュアルな談話は同世代・同性間の談話を収録した。1世対2世、1世対3世、2世対3世の組み合わせのような異世代間、異性間の対話は今後の課題とする。

調査対象者の選定

1. ———— 選定基準

談話収録調査対象者（インフォーマント）の選定に際しては、言語生活調査のデータを分析した結果に基づいて、以下の点を考慮に入れて選定した。

- (1)1世：a. 戦前移民か戦後移民か
 - b. 戦前移民の場合、言語形成期を日本で過ごした人かブラジルで過ごした人か
 - c. 出身地が東日本か西日本か
 - d. 上記3点を満たした男女（計12人）
- (2)2世：a. 幼児期に家庭や地域社会で日本語を使ったかポルトガル語を使ったか
 - b. ブラジルにおける学歴が高学歴かどうか（高校卒業を基準にした）
 - c. 上記2点を満たした男女（計8人）
- (3)3世：a. 日本語学習経験が多いか少ないか（5年を基準にした）
 - b. 上記1点を満たした男女（計4人）

1世の場合、戦前移民か戦後移民かで言語生活調査データの日本語能力意識に顕著な差は見られなかった。しかし日本で生育し、言語形成期を過ごした場合（本調査では9歳～14歳とした）と言語形成期以前（同、7歳以下）に渡航し、移住地で言語形成期を過ごした場合とで言語的特徴が異なることが予想されたため(1)のa、bのように分け、その検証を試みた。

2世は、幼児期に家庭と近所の地域社会で日本語を使っていたかどうかで日本語能力意識に差が認められた。その検証のため(2)aの基準を設けた。またブラジルにおける学歴の違いによる日本語能力意識の違いも見られたため、(2)bの基準をたて検証を試みた。なお、言語生活調査では、幼児期に家庭内や地域内において日本語を多く使っていた人は、年齢的には50代後半～60代で、比較的低学歴（中学校以下）の人が多く、これとは対照的に、幼児期に家庭内や地域でポルトガル語を多く使っていた人は、年齢的には20代～50代前半で、比較的高学歴（高校・大学卒）が多くなっている。また、他の条件として、言語生活調査では、配偶者が日系人と回答している人が圧倒的に多いため、談話収録調査のインフォーマントも配偶者が日系人である人とした。同様に、デカセギ経験者もほとんどいないため、インフォーマントとしてはデカセギ経験のない人とした。

3世の日本語能力意識は日本語学習経験の多さと密接に関係している。(3)aの基準をたてることで、検証できると考えられた。なお、日本へのデカセギ経験と日本語能力意識には有意な差が認められなかったため、デカセギ経験の有無は選定基準に含まれていない。

2. ———— 選定作業

ここでは実質的なインフォーマント選定作業について簡単にまとめる。談話収録調査のイン

フォーマントは、言語生活調査対象者（アリアンサ調査：110名（談話収録時の追加調査による1名は含まれない）、スザノ調査：108名分）の中から選定を行った。まず選定の第一段階として、談話収録調査への適性を判断するため、言語生活調査で録音された音声資料を聞き取ることにした。聞き取りに際しては（a）声の明瞭さ、（b）積極性・話題の豊富さ、（c）日本語における方言的要素の有無、（d）ポルトガル語の有無、（e）インタビュアーの言語、の点に注意して聞き、すべての資料に関して、各項目についてのコメントを記していった。また、以下の項目以外にも気付いたことがあれば、自由に記述することとした。

録音資料の聞き取り終了後、各項目について記されたコメントと、調査対象者の個人的・社会的属性、言語生活調査の結果に基づいて、談話収録調査に適したインフォーマントの絞込み作業を行っていった。

3. ———— 言語生活調査のサンプルとの関係

言語生活調査におけるサンプリングは、1世、2世、3世以下という世代的指標と年齢で住民を分類し、それぞれ40名を目安に等間隔抽出法によって対象を選定している。たとえば、スザノ福博村地区の場合、言語生活調査対象者の年齢別分布は、1世は70代・80代、2世50・60代、3世20代が最も多くなっている。談話収録調査でも言語生活調査のサンプルの多い年代より主に選出している。スザノ福博村地区の場合、男女あわせて1世は70代・80代が10/12人、2世は50・60代が6/8人、3世は20代が4/4人となっている。

Key Personの構想

各話者のもつ最もカジュアルなことばづかいを引き出すことを目的に、「友人との対話場面」の調査をデザインした。具体的には、社会経済的・時間的効率性を考慮し、同一地域内の友人・知人を（key person）として採用し、カジュアルな談話を収録してもらうことにした。

キーパーソンとなる同一地域内の友人・知人の条件を、①インフォーマントと（親しい）友人関係にあり、インフォーマントと自然でカジュアルなことばで話し合っていること、②インフォーマントと年代が離れすぎず（±10歳）、できればインフォーマントより年下であることと定め、さらに、③キーパーソンは言語生活調査の被験者であってもよしとし、④コロニア日本語に西日本方言形式も多いことを考慮し、1世のキーパーソンは東日本出身者から選出し、言語形式のキーパーソンへの歩み寄り（accommodation）による西日本方言形式の使用を防いだ。

調査の概要

本談話収録調査におけるインフォーマント、キーパーソンについては以下の通りである。

- (a) インフォーマント：各地区24人(1世12人、2世8人、3世4人)。表1にスザノ福博村地区の談話収録調査対象者の選定条件および人数を示すが、アリアンサ地区においても同様である。表中の談話収録調査対象者の記号「BS1M73-98」は、「Brasil Suzano 1(世代) M(男性) 73(年齢)-98(通し番号)」を表す。なお、記号のうちの太字・網掛け部は今回代表的に文字化を行ったものである。
- (b) キーパーソン：先に述べた条件により、1世から3世代までの男女各1人、計6人である。ここでは、スザノ福博村地区のキーパーソンの情報を表2に挙げる。 〈大阪大学大学院〉

スザノ福博村 1世

言語生活調査人数

談話収録調査対象者

渡航時期	渡航年齢	出身地	男性	女性	男性	女性
戦前渡航	7歳以下	東日本	2	1	BS1M73-98	BS1F74-80
		西日本	3	2	BS1M71-48	BS1F79-43
戦前渡航	9-14歳	東日本	3	6	BS1M79-40	BS1F80-15
		西日本	7	5	BS1M81-22	BS1F76-20
戦後渡航	15歳以上	東日本	2	1	BS1M60-63	BS1F83-01
		西日本	4	3	BS1M73-73	BS1F64-82
		小計	21人	18人	6人	6人

スザノ福博村 2世

幼児期(主に日本語使用)	高学歴	5	5	BS2M50-67	BS2F40-54	
	低学歴	9	7	BS2M64-55	BS2F66-56	
幼児期(主にポルトガル語使用)	高学歴	3	3	BS2M41-49	BS2F54-65	
	低学歴	2	7	BS2M63-70	BS2F54-88	
		小計	19人	22人	4人	4人

スザノ福博村 3世

日語学校多い(5年以上)		5	9	BS3M22-35	BS3F28-34	
通学経験少ない(5年未満)		9	5	BS3M27-31	BS3F24-41	
		小計	14人	14人	2人	2人

表1 談話収録対象者とその条件

Key Person	世代	性別	年齢	職業	学歴	出身地	渡航年	居住歴
S1M-SS	1	男	59	農業	日本の大学卒	満州	1969年 (25歳)	0-2:満州 2-12:鳥根県 12-24:東京 24-59:ブラジル
S1M-IK	1	男	60	牧畜業 (養鶏)	高校2年まで	宮城県	1960年 (18歳)	0-18:茨城県 18-60:ブラジル
ST1F-ST	1	女	75	無職	—	—	1937年 (9歳)	0-9:宮城県 9-75:ブラジル
S2M-IJ	2	男	61	商業 (植木)	中学2年まで	—	—	0-61:スザノ福博村
S2F-DA	2	女	57	農業	—	—	—	0-57:スザノ福博村
S3M-IH	3	男	19	林業	大学中退	—	—	0-19:スザノ福博村
S3F-IP	3	女	21	学生	大学3年在学	—	—	0-21:スザノ福博村

表2 キーパーソンの詳細情報 — スザノ福博村地区

日	月/日	(談話収録調査の)スケジュール	宿泊地
1	7/21	調査打ち合わせ、夜行バスでアリアンサ移住区へ移動	
2	7/22	朝:アリアンサ着、現地リーダーと対面、打ち合わせ	Y農場
3	7/23	午前:インタビュー調査 午後:インタビュー調査 夜:ミーティング(調査の結果、問題点報告)	Y農場
4	7/24	午前:インタビュー調査 午後:インタビュー調査 夜:ミーティング(調査の結果、問題点報告)	Y農場
5	7/25	午前:インタビュー調査 午後:インタビュー調査 夜:ミーティング(調査の結果、問題点報告)	Y農場
6	7/26	インタビュー調査 夜行バスでサンパウロへ出発	
7	7/27	朝:サンパウロ到着 スザノ福博村調査の打ち合わせ	サンパウロ
8	7/28	午前:スザノ福博村へ出発、現地リーダーと対面、打ち合わせ	スザノ福博村
9	7/29	午前:インタビュー調査 午後:インタビュー調査 夜:ミーティング(調査の結果、問題点報告)	スザノ福博村
10	7/30	午前:インタビュー調査 午後:インタビュー調査 夜:ミーティング(調査の結果、問題点報告)	スザノ福博村
11	7/31	午前:インタビュー調査 午後:インタビュー調査 夜:ミーティング(調査の結果、問題点報告)	スザノ福博村
12	8/1	午前:インタビュー調査 午後:サンパウロへ出発	サンパウロ
13	8/2	サンパウロで合同会議	サンパウロ

表3 調査の日程

談話収録調査概要

中東靖恵

文字化作業の手順と談話文字化資料対象者一覧

収録した談話は、録音したテープをもとに文字化を行った。文字化作業は、まず第一次文字化作業を行い、その後、第二次文字化作業として、第一次文字化資料の日本語およびポルトガル語のチェックと文字化記号表に従った記号挿入作業を行い、第三次文字化作業として、第二次文字化資料の日本語およびポルトガル語と文字化記号の最終チェックを行った。なお、文字化作業に際し、「文字化記号表」「文字表記細則」を含めた文字化作業の統一マニュアル「文字化作業の基準」を作成したが、詳細は紙幅の都合上割愛し、別稿に譲る。また、本節の執筆にあたっては井脇千枝氏（大阪大学大学院研究生）の全面的な協力を得た。

以下に収載するのは、1世、2世、3世の各世代から1名ずつ、計3名の談話文字化資料の一部である。スザノ市福博村・アリアンサ移住地の2地点で談話収録した48名（1世：24名、2世：16名、3世：8名）のうち、各世代ごとに特徴的な談話を選定、その一部分を抜粋して提示することとする。表1には、談話文字化資料対象者として選ばれたインフォーマントと、その属性の概略を言語生活調査に基づいて示す。

談話	話者番号	生年	年齢	性別	国籍	出身地	職業	最終学歴	現住所
[1]	BS1F74-80	1929	74	女	日本	石川	農業	grupo3年	スザノ
[2]	BA2F67-25	1936	67	女	ブラジル	Mirandópolis	教師	大学	アリアンサ (1)
[3]	BA3M27-28	1975	27	男	ブラジル	Mirandópolis	牧畜	大学	アリアンサ (2)

表1 談話文字化資料対象者一覧

1世の談話文字化資料

ここでは、1世の談話文字化資料として、インフォーマント【BS1F74-80】と、対話者であるキーパーソン【S1F-ST】の談話から一部抜粋して載せる。

インフォーマント(BJ)は石川県出身の74歳の女性で、スザノ市に在住である。1933年、4歳で渡

伯し、日本人移民が多く住んでいた地域に入植、ブラジル人との接触がほとんどない地域で育っている。対話者(KP)は、インフォーマントと同じスザノ市に在住の75歳の女性である。宮城県出身で、1937年、9歳で渡伯した。両者はともに戦前、ブラジルに移住した日系1世である。なお、BJはブラジルでgrupo(初等教育課程)の3年生まで通っているが、KPは日本でもブラジルでも学校教育を受けた経験がない。

談話文字化資料【1】

インフォーマント(BJ):BS1F74-80:1929年生まれ(74歳)。女性。1世(4歳で渡伯)。石川県出身。
対話の相手(KP):S1F-ST:1928年生まれ(75歳)。女性。1世(9歳で渡伯)。宮城県出身。
調査場所:スザノ。調査年月日:2003年7月29日。

【談話の概略】 BJとKPはなかなか結婚しない子供がいることや、配偶者が日系人ではなくブラジル人であることなど、子供たちの結婚について話をしている。

KP: 時期が 過ぎると なかなか カーザ『ボ語 casa: 結婚する』せん//ねー。(BJ://うん/) やっぱ若い 時に カーザ『ボ語 casa: 結婚する』せん…。

BJ: はよ《早く》しとかな…(+いかん)。

KP: ね、(BJ: うん) いかんよねー。(BJ: そう。もう//年 とったら/) //うちでも、ひとり おる。

BJ: /沈黙1秒/あー そう?

KP: カーザ『ボ語 casa: 結婚する』せんのが。はっ{笑い}ま 息子は //心配して####/(BJ ://うん、うん、そうね-) 娘はねー。{笑い}(BJ: うーん)

BJ: もう やっぱり 年 とったら もう、億劫になるんか なんかー、ねー、やっぱり 早く、もう年頃 になったら はよ《早く》カーザ『ボ語 casa: 結婚する』せんとねー。(KP: うん)

KP: カーザ『ボ語 casa: 結婚する』する ゆーたら《言ったら》外人(注)でも なんでも //いいから /(BJ: //なんか/) ね。

BJ: うーちの あの、息子の 嫁がー、ほら、こっち あのー、外人しよ《外人でしょう》//外人って やー/《外人って言えば》(KP://え、うん) あのー 外国人//だからね。(KP://え、うーん) でも やっぱり 不自由ねー。あははは。{2人で笑う}

KP: {笑いながら}しよがないです//よ/。

BJ: {笑いながら} //そりゃ/そう…(+だけど)。でも あんまり できないでしょ? は。あー 不自由

由。

KP: あー // そうですね。

BJ: // 言いたいことも / 言 'ゆ' えん // ねー。うーん。(KP: // うーん /)

KP: 「人名」さんも そんなこと // 言いよったけれど。(BJ: // {笑い} /)

BJ: あー そうだ。(KP: だろうねー) うん、もー、まー まー。

KP: 「人名」さんの一 孫たちも みんな、外人 // ねー。

BJ: // みんなな / 外人。だから 言ったん わたしね。(KP: うん) みんな 外人 連れてるから、一番下の、// 子に / (KP: うん) 言 'ゆ' ったのね。“「名前」ちゃん”、「名前」、(KP: うん) 「名前」って 言う… (+んだけど)。(KP: うん) “「名前」ちゃん”、「名前」ちゃんは ひとりぐらい 日本人の、あっははっ {笑いながら} 人と カーザ『ボ語 casa: 結婚する』しなよ” ったら < 言ったら >、“うん。”

KP: うふふふ。{笑い}

BJ: “日本人の 人と カーザ『ボ語 casa: 結婚する』するよ” とかって 言いよったけどね。(KP: あー、そうか) 今 誰も おらんらしい、みんなね。(KP: ええ) やっぱり なが一つぎ《長続き》せんで みんな // 別れたり / (KP: // うん うん /) なんかして。みんなが 【そのようである】みたい。うん。

KP: うん。うちでも あのー、うちは 3人兄弟で、共同で やとったっしょ《やっていたでしょ》? (BJ: うん) 次男の 「名前」さん。(BJ: // うん /) // うち / の人の 弟。(BJ: うん) そのー、子ども みんな 外人よ。

BJ: あー、そう。

KP: うんー。(BJ: ふーーん) みーんな 外人と カーザ『ボ語 casa: 結婚する』したもの。長女も、「人名」と 結婚した // でしょ。

BJ: // あー、そう。

KP: 長男も、ボリビアの (BJ: ボリビアの) ボリビアで結婚した。パラグアイ人 // ですけどもね。

BJ: // パラグアイ。うん うん。

KP: / 沈黙3秒 / もうひとりは一、何だかな。// あの / (BJ: // うん /) 受け入れの 人と 結婚したの。(BJ: うん) はっはっはっ {笑い}。

BJ: うんー。ま、自分たちの あれじゃないから、あの (BJ: うん) 若いもんが しっとるんだからね《しているのだからね》。(KP: それで // いいんじゃない /) // だから、いいんじゃないの? {笑い}

KP: うん。最初は 反対しよったけどね。

BJ: うん、そう//ねー/。

(中略)

KP: 息子さんは あれでしょ?あの、プリージョ『ボ語 *prédio*: アパート』に住んで//らっしゃる/のよね?

BJ: //うん、そう そう/。プリージョ『ボ語 *prédio*: アパート』に住んで(+いる)。今ねー もう、シュラスカリア『ボ語 *churrascaria*: シュラスコ(バーベキュー)専門店』があるから もう嫁さんも、ね[↑](KP://うん/)//もう/、家では コジニャ『ボ語 *cozinha*: 料理する』しない、みんな あそこで 食べるって。(KP: あー)そう せんとね、家でー できないから//ねー/。(KP://うん/)みんなで シュラスカリア『ボ語 *churrascaria*: シュラスコ(バーベキュー)専門店』、アジュータ『ボ語 *ajuda*: 手伝う』する。

KP: 嫁さんも //シュラスカリア『ボ語 *churrascaria*: シュラスコ(バーベキュー)専門店』/?

BJ: //みんー/な あすこで《あそこで》やりよる。

KP: ちゃんと ## 目 光らせとかんと //だめよね/。

BJ: //うん/、そうよ。(KP: うん)もう 大勢 おるからね。

KP: ねー。沈黙2秒/ あれは、あの、「名前」さんの?

BJ: うん。あれ 建てたのはー ね[↑]、「名前」と 「名前」さん。(KP: え)「名前」と ふたり、息子と ふたりで //建てた/わけね。(KP://え/、え)で あの む、「名前」さんの息子がー、一番 長男が、おるわけ。(KP: あ)だから 今 あの一、長男も 一緒に、うちの息子と おるから、まだ いいのよね[↑]、(KP: うん)助かるのよね[↑]。(KP: うん)うちの息子が、もう、じぶんー《自分の》ファブリカ『ボ語 *fábrica*: 工場』持つてるから。(KP: うん)で、しと《人》も 使ってるから (KP: うん) もー、あっち 行ったり こっち 行ったりー(KP: うん うん) //忙しいってね/。(KP://うーん/)でも やっぱり 行かにかいかんってねー、(KP: うーん)どうしても《どうしても》。

KP: 大変ですよ。

(注)「外人」とは非日系の「ブラジル人」のこと。

1世話者の場合、アリアンサ・スザノ両地域ともに、日本語は非常に流暢で、複文を使用して長く複雑な談話を展開したり、政治や経済に関する難しい話が日本語でできるなど、日本語による談話構成能力は十分にある。そして、このことは幼少期(言語形成期の初期あるいは途中)に渡伯した人であっても同様に言える。

こうした1世話者の日本語の談話に特徴的なのは、ポルトガル語からの語彙借用と、西日本方言をベースにした地域共通語的日本語の使用である。

まず、ポルトガル語の借用について見ると、「カーザ(casa)」「プレージオ(prédio)」「コジニャ(cozinha)」「ファブリカ(fábrica)」などの借用語が散見される。なお、このような借用語の使用頻度は個人によって異なり、例えばBJは「カーザする」を一貫して使用しているが、KPの場合は「カーザする」のほか「結婚する」も使用している。

次に、話者の方言的特徴について見る。BJは石川県出身であるので、BJの談話には西日本方言的特徴、例えば、動詞「おる」、「カーザせん」「ゆ(言)えん」「おらん」などに見られる打消の「ん」、「はよー(早く)」などのウ音便形、「言いよった」「来よった」、「しとる」に見られるアスペクト表現形式「よる」「とる」の使用を見ることができる。国立国語研究所編(1999)『方言文法全国地図』第4集(大蔵省印刷局)によると、石川県は「よる」「とる」の対立のない地域として載る。しかし、BJは「よる」形式を使用していることから、BJの「よる」はブラジル日系社会で言語形成期を過ごす過程で習得されたものと考えられる。

さらに興味深いのは、こうした西日本方言的な特徴が宮城県出身であるKPの談話にも散在することである。動詞「おる」、打消の「ん」(「カーザせん」、アスペクト表現形式「よる」「とる」(「言いよった」「反対しよった」、「やとった」)のほか、「カーザするゆーたら」に見られるような、動詞のウ音便形(「ゆーたら(言ったら)」)、引用の「と」が脱落するいわゆるト抜け現象も認められた。KPは9歳まで宮城県で過ごしたとは言うものの、渡伯後の言語形成の過程で、母方言とは違うブラジルの日系社会で使用される日本語を自然習得していったものと思われる。

2世の談話文字化資料

次に、2世の談話文字化資料として、インフォーマント【BA2F67-25】と、対話者であるキーパーソン【A2F-IM】の談話から一部抜粋して載せる。

インフォーマント(BJ)は第一アリアンサ在住の日系2世、67歳の女性である。ブラジルの大学を卒業し、現在、学校の校長を務めている。対話者(KP)は、第一アリアンサ弓場農場に在住の日系2世、48歳の女性である。ブラジルでgrupoを卒業、現在、弓場農場の生活部担当として働いている。BJとKPは日常、ポルトガル語で会話することの方が多い。しかし、両者はともに日本語で話すことも可能であるため、談話収録調査においては、日本語で会話してもらうようにした。

談話文字化資料【2】

インフォーマント (BJ):BA2F67-25:1936年生まれ(67歳)。女性。2世。第一アリアンサ在住。
対話の相手(KP):A2F-IM:1954年生まれ(48歳)。女性。2世。第一アリアンサ弓場農場在住。
調査場所:第一アリアンサ。調査年月日:2003年7月25日。

【談話の概略】 BJとKPは、今、日本で使われている日本語に英語からの外来語が多いことや、もっと日本人は日本語を大切にすべきであること、また、日本語や日本文化を子供たちに伝えていくことの大切さなど、全体を通じて言葉に関する話をしている。

BJ: で、日本‘にほん’に行った時、[驚いた様子で]わー、日本‘にほん’であの、英語を、間違っ
てしゃべって、どうしてそんなことすると《するのかと》。それよりか、日本語を(KP:
もっときれいにね) もっと日本語をね、valoriza(大事にする)自分の国の//ね、(KP:
//んー んー/ んー んー) língua(言語)を valoriza(大事にする)しないと いけない。
(KP:んー んー んー んー //んー/)//Não é?/《そうじゃない?》

KP:そうよ。

BJ: Americano valoriza inglês. (アメリカ人は英語を大事にする)

KP:É. Valoriza. (そうね。大事にする)

BJ: Não é? (そうじゃない?)

KP:ああ、###。

BJ: ちゃんど。E depois, se vai falar, fala direito. (それから、英語を話すなら、きちんと話
さないと) (KP: そう そう) Inglês direito. (正しい英語) (KP: そう そう そう) どこ
行ってもしゃべれる//ように/。

KP://しゃべれる/ように。あの、しゃべれるなら、まだ分かるけどね。

BJ: Ih! Agora fica inventando inglês que nem entende. (フン! 分かりもしない英語を作る
なんて)

KP:あっはははは。{笑い}

BJ: Tudo errado. (全部間違えている)

KP:そう そう、ない言葉、作っちゃうんだもんね。

BJ: 作っちゃうんだもん//ね/。

KP://ああ/。

BJ: Então, 〈それでは〉 ほかの 国 行ったって//通じない/でしょ。

KP://そう/。あの、ほかの 意味、意味になっちゃうから、おかしい日本語使ってる //時が / あるよね。

BJ: //使っ/…(+てる時が) あるでしょ[↑]。

KP:うん。

BJ: 英語 入れたりして //###/。(KP://うん/)Acho que lá tá diferente. 〈向こう(の日本語)が変わっていると私は思う〉 (KP:あー あー)ここが あー あの日本語がー、mudou(変わった)、(KP:mudou(変わった))変わってるから。(KP:あーあ)わたしたちの日本語は、やっぱり (KP:はっ、//はっはっ/{笑い})//あの/(KP:昔の まんまで。//はっはっはっはっはっ/{笑いつづける})//昔の まんまで お父さん/ お母さん、から 習った日本語。

KP:うん、そう。うん、そう。

(中略)

KP:だから もし、う、「KPの名前」たちも、ほら「人名」さんが そうやって【形は変わっていくが、日本の文化や言葉を子供たちに教えて残していく努力をしなければいけないと】言 'ゆ'ってる ことがー、今の、お年寄りたちが言 'ゆ'ってる ことがー、合ってるって 思って、勉強//して/、(BJ://だか/《だから》やっぱり)子供たちにも そういう ことは 受け継がれていくのが、大事よね。

BJ: 大事よね。うーん。

KP:だから それは、ま、あのー、続けなきゃいけないんだけど、ま、それを やっぱり よく しているために、続けて(+行かないと)//いけないね/。

BJ: //そうね/。

KP:そうだもん//ね/。

BJ: //どうしても/ あのー ブラジルだから、(KP:そう そう そう 難しい)自然にー、[喋くように]薄くなって //くるね/。

KP://なってくる/ね。でも そこで、あの、とにかく 小さい 時だけで いいのよ。小さい 時にー、あの それが、/沈黙1秒/ちょっとでも 日本語が 習ったのがあるって いうのとー ないって(+いうのとでは違う)。/沈黙1秒/あれば、大きくなってー、ねー、日本語 覚えたい なって、日本語に興味を 持ち出した 時にー、昔の 思い出してくるから、まだ それから 習い 始めてもね、すぐ 入ってくるね、まるっきり【はじめから】始めるより。

2世の談話には、言語的特徴から大きく分けて、(1)1世に近いタイプ、(2)2世の典型タイプ、(3)3世に近いタイプの3種類がある。ここでは、紙幅の都合上、(1)(3)の談話は省略し、2世話者の典型と言える(2)のタイプであるこの両名の談話を選んだ。

両名の談話にもっとも特徴的なのは、日本語とポルトガル語との文レベルでのコードスイッチングである。談話の前半部分では、「lingua」「valorizaしないと」のように単語レベルでポルトガル語の使用が見られるが、だんだんと話が盛り上がってくると、文レベルでポルトガル語が使用されるようになる。こうした文レベルでのコードスイッチングは、1世話者の談話には見られないことである。

日本語からポルトガル語へのコードスイッチングはBJ、KPのどちらにも見られるが、とりわけBJで著しい。KPは談話収録調査の意図をよく理解しているため、できるだけ日本語を話そうとしていること、また、BJは教育者という職業柄か、言葉の問題に関する話題ではかなり興奮していたため、日常の使用言語であるポルトガル語が頻出したということもあるだろう。だが、両者の言語能力を比較した場合、BJの日本語はKPほど流暢でなく、文もなんとかつながってはいるものの一文一文が短く、かつ、文が途切れている箇所も多い。また、終助詞の使用もKPより少ない。このようなことから、BJの場合は、日本語での談話構成能力の不足をポルトガル語によって補っているように思われる。それに対し、KPは日本語もポルトガル語も非常に流暢で、どちらの言語においても十分な談話構成能力を持っていることから、KPの場合には、日本語能力の不足をポルトガル語で補うのではなく、むしろ話題の展開や相手の言語に合わせてコードスイッチングを行っているようである。

3世の談話文字化資料

最後に、3世の談話文字化資料として、インフォーマント【BA3M27-28】(BJ)と対話者である調査員メロ(JS)との談話から一部抜粋して載せる。インフォーマントは、第二アリアンサ在住の日系3世の男性である。年齢は27歳、ブラジルの大学を卒業し、現在、牧畜で生計を立てている。

談話収録調査の対象者となったのは比較的日本語能力のある3世話者であるが、3世話者同士の日常会話はポルトガル語で行われるため、キーパーソンとの会話はすべてポルトガル語になってしまう。そこで、ここではキーパーソンとの対話ではなく、調査員と日本語で対話した談話を扱うこととした。なお、調査員であるメロはリオデジャネイロ出身のポルトガル語母語話者であるが、日本語で調査を遂行するのに十分な日本語能力を有している。調査においては、基本的に日本語を使用することとしたが、インフォーマントが調査員の質問の意味を理解できず、談話の展開が行わ

れないというようなことがないよう、適宜ポルトガル語を使用して調査を行った。

談話文字化資料【3】

インフォーマント(BJ):BA3M27-28:1975年生まれ(27歳)。男性。3世。第二アリアンサ在住。

対話の相手(JS):レオナルド・メロ:1976年生まれ(27歳)。男性。

調査場所:第二アリアンサ。調査年月日:2003年7月23日。

【談話の概略】 JSはBJの仕事についていろいろと尋ねている。JSの質問に対し、BJは牛の育て方や牛にやる餌など牛の飼育に関することのほか、BJの自宅に植えている植物や飼っている鶏の話をしている。

JS: じゃ、うちは もう 牛と、cana<さとうきび>だけ、ですか？

BJ: Não<いいえ>、milho<とうもろこし>も、(JS:milho<とうもろこし>)もあ、(JS://やってみる/)//やりよる/。うん。

JS: あ、そっか。じゃ そしたら、その、あーの、「人名」さんの うちで あれ、えさー、ね[↑]、(BJ:うん うん)ração<飼料> 作ってるでしょ？(BJ:そう そう) そのmilho<とうもろこし> 使ってるんですか？

BJ: そう。

JS: あ、そっか、//や/、(BJ //###/{笑い}) やっぱり みんな お互いの あれねー//利用して/(BJ://まあまあ/同じぐらいね[↑])ふん ふん ふん。そしたら もう、「BJの名前」さんも、卵、買ったりする？

BJ: Não<いいえ>、卵、うちに 少し、にわ//とり/《鶏》 あるから。

JS: //あ/、それも、(BJ:うん) 鶏 やってる。もう、な、もう 何匹ぐらい、いるんですか？少ない？

BJ: 少ない。あの、cinco<5> ぐらい//おるね/。

JS: //あ/、cinco<5> //ぐらい/。

BJ: //はい/。うちだけ 食べるの。//ははは{笑い}/。

JS: //あ/、でも それでも やっぱり、毎日、も、卵 生ま、//生む/わけ？

BJ: //うん/。そう そう。

JS: あ そっか。ほー。も、毎日、例えば 一匹のね[↑]、(BJ:うん) 鶏が もう、毎日、//な、何個/…。

BJ: //Não<いいえ>、毎日/ぐらい、生ま//んね/。

JS: //生まない//ね。
BJ: //生まない。
JS: やっぱり。あー、//そっか。
BJ: //はい。
JS: だいたい なに、2日間、(BJ:そう//そう/)//ぐらいに/…。
BJ: そう。
JS: で、その時 な、何個ぐらい、生むんですか？
BJ: 1つだけ 生む//ね/[↑]。
JS: //あっ// そっか。(BJ:うん。ははっ{笑い})はあ はあ はあ はあ はあ はあ。
じゃ、5匹ぐらい いれば…。
BJ: 2つか 3つぐらい、生//むね/[↑]。
JS: //毎日/(BJ:毎日) 出る//よね？
BJ: //出る/。うん。
JS: んー。それでも ま、3人で、(BJ:ま、//だいたい/)//食べれる// //わけやんね/。
BJ: //食べれる/。はっはっはっ。{笑い}毎日、食べれる。{2人で笑う}

3世話者の場合、アリアンサでもスザノでも日本語があまり得意でないという人が多い。そのため、3世話者の中でも比較的日本語能力のあるBJが今回のインフォーマントとして選ばれた。しかし、その日本語運用能力の実態を自然談話によって見ると、主として調査員であるJSの質問に答える受身的な形で会話が進んでいること、全体的に単語量が少なく、一文一文も短いこと、モダリティ表現も乏しく、終助詞を使用するにしても多くは「ね」に限られていることなど、日本語を使用しているとは言え、その発話にはたどたどしさが感じられ、BJの日本語による談話構成能力はかなり低いことが分かる。

おわりに

以上、1世、2世、3世話者の談話文字化資料を提示し、世代ごとに見られる日本語の特徴について見てきた。自然談話を文字化することにより、これまで漠然と「ブラジル日系人の日本語」と言われてきた日本語の実態をごく一部ではあるが明らかにすることができ、また、1世から3世へと世代が下るにつれ、徐々に日本語が変容していく様子を示すことができたのではないかと思う。ブラジル日系社会において日本語中心からポルトガル語中心の言語生活へと漸次移行しつつある現状

において、ブラジル日系人の日本語は、世代により、あるいは個人の言語形成の過程や言語能力により、さまざまな姿となって現れる。今後、ますます彼らの言語生活はポルトガル語中心に行われていくようになるだろうが、その過渡的段階である今、彼らの自然談話の記録は、これまで断片的にしか記述されてこなかったブラジル日系人の日本語の実態を記す言語データとなるだけでなく、移民社会における言語の変容のあり方を知る上でも貴重な資料を提供することになるだろう。

〈岡山大学〉

言語の接触と混交

日系ブラジル人の言語の諸相

第1部 ブラジル日系社会と日本語

第4章 移民社会の言語問題

— 日系社会における日本語と日本語教育 —

いうまでもなく、ブラジルは日本のちょうど正反対の位置にある。この対蹠的地理は、日本語にとっても大きな意味を持つものであった。日本語を「日本」という位置から対蹠的に見ることは、例えば、次のような日系移民の短歌の意味を問うことになるであろう。

日本語の片言わかる孫にして未来に明るき希望をかける

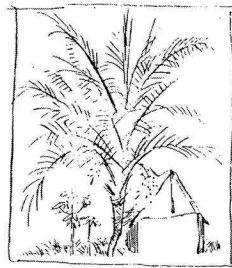
(『ニッケイ新聞』2003.7.21「ニッケイ歌壇」より)

サンパウロ人文科学研究所とブラジル日本移民史料館には、移民関係論文のほかに、移民社会の生活について書かれた数多くの作品が所蔵されている。句集や歌集、紀行文といったものが主であるが、それらを目にするものは「日本語」のもつ一種独特の雰囲気、まさしく「ことばの力」といったものに圧倒されることだろう。日系移民社会にとって「日本語」とは何であったのか。また何であるべきなのか。ここで改めて問い返すことは決して無意味ではない。

本章では、3月11日に開催されたシンポジウムでの基調報告をもとに、ブラジル日系社会における日本語教育と日本語をめぐる言説について分析を行う。ブラジル移民社会の日本語教育は、現在岐路に立っているといても過言ではない。そして、その現状を生み出していった原因は、ブラジルにおける「日本語」へのまなざしの特殊性にあった。こうした経緯を含め、本章では移民社会の言語問題について立体的にとらえていきたい。

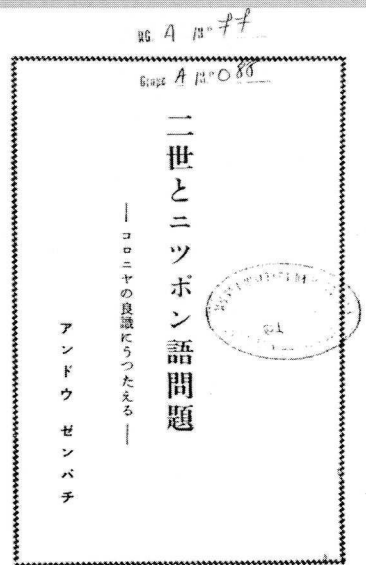
〈山東 功〉

ÉRA 時代



No. 11 — ABRIL
1950

総合誌「時代」(サンパウロ市)表紙
(サンパウロ人文科学研究所蔵)



アンドウ・センバチ『二世とニッポン語問題』
(ブラジル日本移民史料館蔵)

ブラジルの日本語教育

佐々木倫子

本節では、ブラジルの日本語教育の現状を概観し、研究事業「ブラジル日系社会における言語の総合的研究および記録・保存事業」の果たす役割を考えつつ、今後の教育のあり方について述べる。

人の流れと言語

20世紀に越境した日本語の21世紀における「衰退」

1. ———— 学習者数に見る日本語教育の「衰退」

移住者の言語シフトは早ければ2代で完了することもあると言われる。日本からブラジルへ渡った移住者も例外ではない。そのような一般的流れの中で、現状ではどのような教育的介入がなされているのだろうか。以下は、国際交流基金の調査が示す、ブラジルの何らかの機関で日本語を学習する人々の数である。

学習者の実数を見たとき、減少傾向は見られるが、一見それほどの減少には思えない。しかし、学習者が多い国・地域別の順位を見ると、ブラジルは年を追うごとに、6位→9位→10位と順位を後退させている。つまり、他の諸地域の伸びには追いついていないのである。家庭内の日本語使用の後退に従い、近年のブラジルの日本語教育の中心を担ってきたのは日本語学校である。日系の組織によって日系の子どもたちのために運営される学校というのがその平均的な姿であった。しかし、1993年調査時の日本語学校における学習者数の増加は、日本への出稼ぎ前の成人受講

者の増加によるものであろうし、1998年の数字を見ると、出稼ぎによる学習者の増加も非日系の子どもたちの受講も、継承日本語として日本語学校に通う日系の子どもたちの数の減少を補うほどにはなっていないことがわかる。

調査年 (年)	初等・中等 教育学習者数	高等教育 学習者数	日本語学校等 私塾学習者数	合計 学習者数	多数地域 順位
1990	0(人)	244(人)	14,657(人)	14,901	6(位)
1993	130	512	17,730	18,372	9
1998	2,299	785	13,594	16,678	10

ブラジル日本語教育機関学習者数(国際交流基金日本語国際センター)

子どもたちの日本語学習について言えば、公教育が私塾である日本語学校に替わって学習者を伸ばしつつある状況が表の数字から見える。公教育での日本語授業の増加は大変喜ばしいことではあるが、それは必ずしも言語能力育成に結びつく教育、継承日本語教育にとって替われる教育とは言い切れない。数字自体、数百、数千といった数では、まだ公教育において広く日本語教育が始まったとは言えない状況であるが、それは別としても、日本語学校で持たれる時間数の多い日本語教育(例:1回2時間・週3日)が、公教育では週1コマ1時間足らずといった形になりがちである。希望者が30人集まれば授業が成立するが、集まらなければ行なわれないといった不安定さの上になりつつ学校も見られ、少ない人数でも授業を成立させる日本語学校のほうが安定性に優れる場合も多い。つまり、21世紀の初頭という現状では、ブラジルの日本語教育の中核を担うのは依然として日本語学校であること、そこで継承日本語を学ぶ子ども達の数が減少しつつあることが上記の調査からも読み取れる。

2. ——— 日系日本語教師の発言に見る日本語教育の「衰退」

以下に、日系日本語教師によるコメントをもとに日本語教育の現状を整理する。これらのコメントは、ブラジルの日本語教育、自身の日本語習得などについて、筆者のインタビューに応じてなされたものである。インタビュー協力者は全員、2002年度に国内において研修を受講していたブラジルの日系日本語教師で、一人につき30分から1時間のインタビュー時間を得た。

①家庭内の日本語使用

現在、家庭内における日本語使用はどの程度行なわれているのだろうか。以下はある二世教師の回答例である。

——家で話せばね子どもたちも身につけて話すと思うけど、なかなか。ポルトガル語でね、親たちは。

上記に似た発言は、多くの教師から出た。

ブラジルにおける日系人の日本語はどうなるかという筆者の問いに対して、ある二世日本語教師は以下のように発言している。

——なくなるかもしれない。もうだんだん話さなくなってしまっているから。私はひとつの例です。

日本語学校では教育に従事している、つまり、日本語教育を推進している人が、自身の家庭では日本語を使わない現象はめずらしくない。教育者である場合、子どもにはブラジルの大学、大学院まで進学し、社会で重んじられる仕事を担う人材になってほしいと考える人も多い。その場合、まず学校制度の中で非日系の生徒に劣らない成績を維持することに親としての関心、エネルギーが向けられる。

逆に教師自身が子の立場として、家庭内でどのような言語選択を行なったか。ある二世教師の場合父母の間ではいつも日本語が使われるという。そこでこの教師自身が子ども時代、父母と話

すときはどうだったかという質問をした。

——あまり意味がわからなくてね。「別にいいか」と思って。(笑)(略)ほとんど意味がわからなくて、「はい、いいえ」と「わかりません」「わかりました」そればかりでしょ。(略)答えられなかったら、なんかバシッとやるから。

ここでは、一世である父母は日本語を使うことを二世である子どもに期待し、日本語で答えなければ体罰までも与えている。しかし、兄弟の多かったこの教師は、わからないことは適当に兄弟間で解決し、父母との日本語による会話は、必要最小限にとどめていたという。

上記は家庭での言語使用の低下例であるが、そのほかにも言語継承にとって負の要因は多く存在する。主たる項目をあげる。

②日系コミュニティの拡散

集団移住が終わり後続移住者集団がない、日本との物理的距離が大きいため往来が頻繁ではない、初期に農業とかかわった移住者集団が都市部へ移動をした、非日系との結婚が増加している上に出生率が低下しているなどがこれまで拡散の要因として指摘されている。日本人移民の最近の世代における異種混交性は、「ブラジル文化」への同化に加えて、さらに高い混血度を示しているという(川村2000)(宮尾2002)。さらに、日本国内への出稼ぎが活発化し、かつて1908年から1963年までの集団移住4期全体でブラジルに渡った人が24万人ちょっとであるのに対し、それ以上の出稼ぎ者とその家族が日本にいる(2000年12月 254,394人(法務省「出入国管理統計年報」)ことが、日系コミュニティの強化よりも弱화를引き起こしたとされる。

③世代交代と日系アイデンティティ意識の低下

人びとの移動と帰属意識は歴史の流れを反映する。「大和魂をもった善きブラジル人から完全なブラジル人へ」(前山1996,2001)の大きな流れが時の流れとともに起きていとされる。その流れの中でも、日系を強く意識し次の世代への「日本語・日本文化」の継承を意識する伝統型の人々、遠隔地ナショナリスト、それに反発する同化型の人々、出自に全くこだわらないコスモポリタン型の人々など、渡航時期や居住環境などで各個人の考え方は異なる。ただ、世代交代と日系アイデンティティの低下の流れは否定できない。

④日本語との距離、使用領域の狭まり

ドイツ語と異なって宗教領域での日本語からの切り替えも早く(宮尾)、カラオケは別として、ほとんどの領域で言語の切り替えが進行したとされる。日本語との言語的距離、および、価値観・考え方などの“日本文化”との文化的距離が、言語・文化の保持・継承を困難にするとされる。

⑤ブラジルの言語状況

ブラジルはポルトガル語でまともな国であり、ポルトガル語によるコミュニケーション能

力は必須である。学校ではポルトガル語教育に加えて、英語教育が奨励されている。さらに、スペイン語、ドイツ語、フランス語など、多言語状況がある中で日本語の優先順位は低い。(渡辺ほか:1999)

これらの状況から、多くの日系教師は以下に近い発言でブラジルの日本語を形容していた。
——日本語はなくなる可能性がある。皆、それはあり得ないといつも言っていますが、でもあり得る。

継承日本語教育の現状

上記のようにマイナスの要因が並ぶ中で、現在、継承日本語教育はどのような位置づけがされているのだろうか。残念ながら、「位置づけの低さ」は否定できない。教師に対する評価の低さ(宮尾)がまだ残っており、優秀な人材の定着が限られること、英語教育に比べて授業料が低く設定されること(佐々木)など、「位置づけの低さ→経済条件の悪さ→質の維持の難しさ」といった悪循環を招いている。

——(ブラジルの日本語はこれから)減っていくと思います。(減らないためには)先生の給料をもっと。(略)やっぱり(日本語)学校だけでなく、ほかの学校へ行って折り紙を教えたり、切り紙、踊りとか、そうしなければならないと思います。

いくつもの学校を掛け持ちしなければならない厳しい状況がうかがわれるコメントである。奉仕の心と、他からの経済的裏付けを持つ人々が中心となって継承日本語教育を続けてきた事情がうかがわれる。

そもそも、日系コミュニティの日本語教育は、「言語教育」ではなかった。日本語による勉強が目的であり、日本精神を学ぶことが目的だった「日本学校」に始まった。それが「国語教育」(家庭での日本語使用が減少するにつれ、国語教科書の書写教育と形容されることも出てきた)と日本のしつけ中心の教育が変わった。さらに世代交代とともに、「もはや国語教育の時代ではない」、言語構造重視の外国語教育の時代であるという声が1970年代から徐々に強まった。その状況は現在につながり、インタビュー回答からも、成人に対する日本語教育の場合には言語構造を積み上げていくオーディオ・リンガル法の流れをくむ教授法を基本にすえる傾向がかなり見られる。そして、年少者を対象とする場合は、言語能力の育成というより、文化紹介・動機付けを重視する楽しい教育が求められる傾向が強い。幼児や小学校低学年の子どもたちだけに、「楽しい」教育が強調されるわけではない。以下はもっと学年の高い子どもたちについてのコメントである。

——(日系の)生徒は仲間としてやってるだけ。勉強には興味がない。

つまり、日本語習得というよりも、気心の知れた、文化的背景の近い友達で集まる場としての位

置づけがされている面がある。コミュニティという観点からはひとつの役割を担っているが、日本語学習に関しては積極的な位置づけとは言えない。

本研究が「結ぶ」もの

ブラジルへの集団移住が始まった20世紀初頭、圧倒的にポルトガル語が優位な環境下でのポルトガル語と日本語との接触が始まった。それ以前の日本語とポルトガル語との接触には、キリシタン宣教師の日本への渡来があり、現代の日本語にも十分生きるいくつもの単語がもたらされている。キリシタン時代よりもはるかに規模の大きい20世紀の両言語の接触が、その後の形を変えつつ続く接触と共に、21世紀の両地域の言語にどのような形で影響していくのだろうか。それを見るには、「日本語の衰退・消滅」ではなく、「日本語とポルトガル語との接触と混交」の視点が必要である。日本国内のある地域で100年前、50年前に使われていた形の日本語バラエティが消滅するのは当然であるが、それがどのような新たな形となっていくかを捉えること、そして、捉えた言語環境を生かす教育的介入を進めることが今望まれる。移住100年を迎えようとする21世紀初頭は、地球規模の移動・通信の時代でもある。かつての移住者が経験した出自からの離別・離散状況は存在しにくくなっている。戴(1999)は以下を指摘する。

— 新たに概念化しなおされた「ディアスポラ」は、その語源が示唆するように、ダイナミックに移動することにより多様で豊かな経験をし、新たな生を始めることを意味している。ディアスポラの経験は、多元的で柔軟な視点を形成する契機や、創造的なエネルギーを生みだしていく可能性を与えてくれるのである。— (1999:113)

本調査研究事業の性格を考えると、「連携→結ぶ」がキーワードとして浮かび上がる。そして、「結ぶ」というキーワードは今後の継承日本語に関する教育的介入にとっても重要な語となる。

調査研究の性格

1. ——— データ重視の調査研究 — 音声資料と文献資料を結ぶ調査研究

本調査研究では、フィールドで得たデータを中核として、慎重に仮説を検証する方向をとっている。これまでの文献資料に見られるブラジルにおける日本語研究を整理・保存することは無論であるが、現時点における厳密な調査手順に基づいたデータの収集・保存に力を入れている。

2. ——— 言語と社会を結ぶ調査研究

ブラジルにおける日本語の研究は社会と切り離して行なうことは不可能である。日本からの集団移住政策、第二次世界大戦における日本の敗北、集団移住の停止、やがて、出稼ぎの時代へと

いった社会の動きの中で、言語を捉えなければならない。教育的介入においても、社会の動きと人びとの言語選択の意識の変化を切り離すことは不可能である。言語と社会を結ぶ教育的介入でなければ継続は期待できない。

3. ———— ブラジル側研究者と日本側研究者を結ぶ研究

本研究事業を進める中で、ブラジルと日本在住の研究者たちの、より緊密な連携と互いの成長が形成されつつあることを実感した。同様に、21世紀のような移動と通信の活発な時代においては、両国の教育者間の連携が強く望まれる。特に、教育課程の途中で移動をする子どもたちを考えた時、両地域の教育者の連携は重要である。

調査研究の意義

1. ———— 現状の記述と今後の展開を結ぶ研究

本研究事業に対して、教育の立場に立つとき、最終的には研究者と教育者の連携をはかり、調査によって何が見えるか、そして、今後何をすべきかの指針が得られることを期待する。言語の接触と混交を考えたとき、日本語はこのままではドメインが狭められていき、遠からず消え去ると捉えることも可能である。それは、個人レベルで見た場合、個人の中の言語シフトを、「日本語維持の困難・日本語継承の困難・日本語の死」と見ることに通じる。しかし、一方でポルトガル語の中に生きる日本語、日本語の中に生きるポルトガル語がある。さらに、生活言語としても学習・認知言語としても、問題のない言語能力を持ち、さらに場面、相手によって異なる言語を使い分ける、バイリンガル生活・トライリンガル生活の豊かさを楽しみ、社会への貢献に結びつける個人もいる。本調査は、しばしば言われる「おばあちゃんのいる家庭の子は別として、普通の子はもう家庭でも日本語を使わない、日系社会の日本語は消え去る時期にある」といった言説の実態を、「では、どのようなドメインで、どのような形で残り、どのようなドメインで消え去るのか」をより正確に細かく検証しつつある。その調査結果に基づいた教育的介入の方法は、学習者の日本語を含めた複数言語の発達と習得に真に寄与するものであろう。

2. ———— 過去と今後の移住者を結ぶ研究

変化の激しい現代にあって、移住とは無縁の家族においても世代の断絶は大きい。まして、移住者の場合、世代間の距離は大きい。「コロニアでは、移民とその子孫たちは(明治時代の)伝統的な日本から持ち込まれた文化的観点の再生産に努め、また雑誌や新聞、輸入本を通じて本国で起きている基本事項についていこうと努めた」(川村2000:66)とあるが、それはより大きな一世と三世間の断絶にもつながるだろう。異なる民族間の結婚が増加している今、世代間の多様性がいっそう進むことは想像に難くない。本調査はそれぞれの世代の言語使用を世代別の視点からも解

明する。それは世代にまたがったコミュニケーションの問題点の解明につながるだろう。

3. ——— 児童生徒の在日本・在ブラジルでの発達を結ぶ研究

在日の日系ブラジル人児童生徒が直面する言語問題についての報告が、一般書、修士論文等、様々な形で出てきている。「母語の死」を避け、新しい地の言語習得を助け、個人が豊かな言語生活を得ることを支援するために、言語教育にあたる者は学習者の言語選択に関する情報を提供し、より適切な選択と育成のための方策の支援をする能力を持つべきである。以下のような事例は、様々な形で目にする。

—— (国内に) 長く住んでいる子どもたちは、日本の習慣にも慣れて友達とも会話ができるし、家庭では親が行政窓口へ行くときや、日常の買い物などの場面で通訳の役割を果たすなどして大いに親を助けています。しかし、学習面では、授業にもついて行けていないのが実状です。先生たちは、その子どもたちが自由に話しているので、授業内容も理解していると勘違いしていて、特別な補習のようなことを行っていません。ブラジルにいたら親がその部分を補うことができるのですが、当然日本では、親は何もできません。(KOBE外国人支援ネットワーク)

具体的な日常生活場面での2言語の習得はそれほど困難ではないが、抽象的な場面の2言語の習得が困難なことはカミンズをはじめとして、広く指摘されているところである。しかし同時に、外国人児童生徒を受け入れる日本国内での学校関係者の間でもまだ認識されない状況も多く見聞きされるという。1度失った継承日本語とまた向き合う子ども、初めて突きつけられた第二言語としての日本語に向き合う子ども、いずれにしろ十全とはいえない母語環境の中で、母語を保持しつつ第二言語としての日本語能力を育成するという困難に立ちむかう子どもとその保護者への支援はありすぎるということはない。しかも、移動の激しい時代にあって、前述のインタビューでも、年少時に「ブラジル→日本→ブラジル」と移動した四世教師がいたが、けっしてめづらしい例ではない。既に述べたことであるが、ブラジルと日本を結ぶ支援が望まれる。

開かれた日本語教育へ

上記の「結ぶ」ことによる広がりに加えて以下の広がりを加えて、教育的介入の今後としたい。

教育内容の広がり

ある日系教師によれば、日本語学校では姿勢をしっかり保つことに厳しいという。

—— ブラジル学校ではあんまりそういう(姿勢をしっかり保って座っていると) 礼儀は厳しくないですよ。(中略) (日本語学校では) そういうことをちゃんと生徒たちに教えてますね。ちゃ

んと勉強するときは、ちゃんと姿勢正しくして座って、ちゃんと先生のほう見るとか。

言語の教育は狭義の言語に留まらない。内容は社会文化とも呼ぶべき領域に及び、子どもたちは異なる価値観、異なる考え方に接することで、自己の世界を広げていく。

学齢期の学習者の場合、学校生活が生活の中に占める比重は大きい。これまでの継承日本語教育は日本の国語教科との結びつきはあっても、ブラジル学校において学ぶ教科内容との結びつきは希薄な傾向があったとされる。今後は現地の教育との結びつきの上に組み立てられることが望ましい。

教育態勢の広がり

以下の日系教師のコメントからは開かれた継承日本語教育の姿が浮かび上がってくる。

——非日系を教師にしている良かったんじゃないかと思っている。(略) 血の関係だけじゃなくて、ほかの人に理解させるほうがいいと思う。英語もスペイン語もそういう方法を使っている。

この教師の所属する学校では、非日系の日本語教師もいる。従来の“日系人による日系人のための学校”からの脱皮がなされている。非日系を排除するのではなく、共に活動するとき、日本語教育は勢いを強めることとなる。“開かれた連携の上に成り立つ日本語教育”が21世紀には求められている。

以上、本研究事業との関わりの中で、今後の日本語教育を考えた。インタビューに快く協力してくださった日系日本語教師の方々、海外日系人協会、JICA 横浜国際センターに感謝したい。

(桜美林大学)

【付記】

●本稿は2003年3月に行なわれた国際研究会「越境する日本語：ブラジル日系社会における言語問題」における拙稿「ブラジルと日本を結ぶ言語調査研究」の中の、現代の日本語教育につながる部分を中心に加筆したものである。

【参考文献】

●川村リリ(2000)『日本社会とブラジル人移民』明石書店 ●KOBE外国人支援ネットワーク(編)(2001)『日系南米人の子どもの母語教育』神戸定住外国人支援センター ●国際交流基金日本語国際センター(1990)(1993)(1998)『海外の日本語教育の現状』国際交流基金 ●戴エイカ(1999)『多文化主義とディアスポラ』明石書店 ●佐々木倫子(1996)「ブラジル人の日本語学習環境」『日本語とポルトガル語(1)』国立国語研究所(刊)くろしお出版 ●藤崎康夫(1999)『母と子でみる ブラジルへー日本人移民物語ー』草の根出版会 ●前山隆(1996)『エスニシティとブラジル日系人ー文化人類学的研究ー』御茶の水書房 ●前山隆(2001)『異文化接触とアイデンティティーーブラジル社会と日系人ー御茶の水書房 ●宮尾進(2002)『ポータレスになる日系人』サンパウロ人文科学研究所 ●渡辺 栗原 章子・一甲 真由美 エジナ(1999)「ブラジルの日本語教育をめぐる現状と展望」『世界の日本語教育』第5号 国際交流基金日本語国際センター

森 幸一

ブラジルへ最初の日本移民が到着して一世紀、この時間は異郷の地への日本語の離散の歴史だった。移民とともにブラジルに「旅」した日本語は異郷の文化と接触しどのような変容を遂げたのであろうか。そしてまた、日本語は異郷の地において、移民やその子孫たちの自らの起源(ルーツ)への帰属意識やアイデンティティの構築にどのように関わってきたのだろうか。そして、日本語をめぐる日系人の思考や感情の構造はいつ頃、どのような状況を契機としながら、いかに変化してきたのであろうか。本研究で、ブラジルの日本語を巡る動向や言説をトピックとしながら、それらを移民の生活(生存)戦略、移民社会における意味や価値システム、移民社会の構造の変化—地域共同体と家族など—、エスニック・アイデンティティ構築の歴史の変遷、さらにこれらに多分に影響を与えるブラジルの国家・国民文化観—特に移民に対する国家政策、グローバリゼーションなどと関連させて解釈し、日本語観を通じてみた移民の精神史を考察することを課題とする。本節ではこうした問題関心から現在実施している研究の、現時点での成果(アウトライン)を示したい。

本研究では、1908年に始まるブラジルへの日本人移民とその言語をめぐる考察を行う際に、時代を大きく戦前期と戦後期に区分し、それぞれの時代区分を移民の生活の変化やそれに伴う言語生活の特徴、日系社会の組織化などを指標としながら、さらにいくつかの時期に区分し、それぞれの時期の日本語を巡る動向や言説を上記のような視座から記述考察していく。

本節では戦前期の日本語を巡る動向や言説を考察するために、戦前期(1941年まで)を便宜的に、①短期的出稼ぎ戦術／コーヒー・ファゼンダ(Fazenda)時代—初期移民の言語生活(1910年代)、②中・長期的出稼ぎ戦術／植民地・在伯同胞社会—「日本語」共同体の誕生(1920年代)、③二つのナショナリズムと〈国語〉イデオロギーの台頭(1930年代)に区分している。本節では、この時代区分に沿って、それぞれの時期の「日本語」(を巡る諸状況)について記述していきたいと考えている。

戦前移民社会における日本語を巡る状況

短期的出稼ぎ戦術／コーヒーファゼンダ時代—初期移民の言語生活(1910年代)

表1はブラジルへの日本移民入国者数を1963年時点まで四つの時期に分けて示したものである。これによると、戦前期は約19万人の日本人移民がブラジルに入国しているが、戦前の場合、移民入国数は第2期に全体の64.6%（戦前のみで言えば、83%）が集中している。この時期における移民数の急増には1925年より日本政府がブラジル移民全員に渡航費補助を行なうようになったこと（換言すれば国策移民となったこと）や日本、ブラジル双方の状況の変化などが関連している（注1）。

ごく初期の戦前移民の特徴は、ほとんどの移民が契約移民としてサンパウロ州のコーヒー耕地の農業労働者として生活を開始したこと、サンパウロ州政府の日本移民政策としてコーヒー耕地での定着率を上げる目的で単独移民を排し、12歳以上の労働力三名以上を含む家族移民を原則とし、しかも契約期間を原則として一農年としたことなどを挙げることができるだろう。こうした特徴は日本移民の移民としての社会的性格を強く規制することになる。ごく初期の移民にあっては、サンパウロ州政府の提示する条件をクリアするために、新たな「家族」を構成するものが多かった。出稼ぎによる貯蓄という目的に沿って、「家族」労働力を構成するために、弟や妹、甥や姪、近隣の若者や、赤の他人までを養子縁組し「家族」を作った。この結果、この時期の「家族」は相対的に稼働年齢層を多く含み、男女比における男性の卓越があったが女性も4割程度含まれていたものとなった。女性移民（それも10代前半の）を多く含んだ移民構成はその後のブラジル日系集団の形成に大きなファクターとなって機能した。移民の定着化、日本人同士の結婚・家族生活、言語習得などに大きく貢献することになった（注2）。

表2は戦前期におけるブラジル移民の渡航時における家族内地位を整理したものである（注3）。この表から1910年代末までのごく初期移民において、「子供」という家族内地位をもった存在は少なく、それに比較して構成家族員の占める比率が高くなっているという特徴を看取できる。この初期の特徴は時間経過に伴い、子供の増加、構成家族の減少が起り、構成された家族から「正常」な家族の増加へと変化していった。

以上のような特徴をもった日本移民の大半は4、5年から10年という短期的な出稼ぎ戦術をもって、サンパウロ州内陸部のコーヒー耕地にコロノ（Colono：農業賃金労働者）として就労した。コーヒー耕地という空間は当

時代区分	入国数	比率
第1期（1908-1923）	32,266	13.3%
第2期（1924-1941）	156,349	64.6%
第3期（1942-1951）	151	0.06%
第4期（1952-1963）	53,405	22.1%
合計（1908-1963）	242,171	100.0%

表1 ブラジルへの日本移民入国数（1908-1963）（前掲）

	1908 1912	1913 1917	1923 1927	1933 1937
夫婦	34.6%	37.3%	21.3%	18.5%
子供	21.8%	22.6%	46.8%	48.2%
構成家族員	42.1%	39.9%	26.2%	27.5%
内訳 近親者	30.9%	26.5%	23.5%	26.5%
他人	11.3%	13.4%	2.7%	1.3%
その他	1.4%	0.3%	5.7%	5.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
実数	3295人	9733人	18862人	51854人

表2 ブラジル移民の渡航時における家族内地位 [出典] 前山隆（2001）「同伴移民、妻移民、子供移民—ブラジル日系女性移住体験を中心に—」『阪南論集 人文・自然科学編』36-3 p.4

時ブラジル人労働者(及び所有者など)をはじめ、ヨーロッパ各国からの移民集団を同時に抱え込む多民族・多民族的構成を特徴としており、これらの集団との日常的直接的な接触の中で、日本移民はポルトガル語の語彙を覚え、その語彙を日本語の中に借用していった(注4)。ごく初期のコーヒー耕地において、「日伯混成語」(ブラジル日系人の話す日本語)の原型が生成されていくのである。

この時期には少なくともごく初期においては短期的な出稼ぎ戦術が卓越していたこと、その「家族」構成的特質(相対的に学齢期の子供少ない)などと交錯して、子弟の(日本語)教育に関してあまり強い懸念は生じなかった時期であったといえよう。「珈琲園移民」の子弟教育の状況(大正時代半ば頃の状況)を輪湖俊午郎は次のように記述している。

大正七年の初頭、当時私(輪湖)が『ブラジル時報』の編集に携って居た頃、自身の興味からリベロン・プレートを中心とした邦人家族の子弟教育に関し、之が調査のため四十余日を費し行脚したことがあります。即ち其頃日本人は、未だ珈琲園移民の域を脱せず、従って多く此地方に在住していたからであります。調査耕地は四十数所、一千家族近かったのであります。日本語教育などして居る所は一ヶ所も無く、而かも父兄の希望は如何にしてブラジル語を習得せしむるかにあり、しかも其のブラジル学校さへ大耕地を除く外は、殆ど存在しなかったのであります。其時の私の結論は、児童教育を中心とする以上、一日も早く土地を所有せしめて集団せしむる外上策はないと云う事でありました。もともと出稼ぎに来たのであり、又当時の境遇は望んでも許されなかった点もありますが、先づ以て子弟教育に関する限り、及ばぬ事と諦めて居る者が大部分で、稀には全く無関心の如く見ゆる人々もあったのであります。当時ノロエステ地方には、既に平野植民地及ピリグイ植民地等が開設されて居り、此等邦人集団地に於ては自然教育問題も進展し、所々に寺子屋が設けられていたのですが、然し教育の根幹の方針などは勿論なく、伯國政府または児童教育に関する限り、極めて無頓着であり、田舎へ教師など派遣する誠意など毛頭なかった為、其好むと否とに関わりなく、日本式に教育をやって行かねばならなかったのであります。珈琲園移民中には、稀に此児童教育に痛く心配し、当時邦人唯一の組織的植民地として知られて居たイグアベ植民地を、小学校あるが故に選んだ者もあったのであります。(以下略)(注5)

この時期における日本移民たちの懸念はむしろ子供たちがいかに「ブラジル語」を習得するかであったと輪湖は論じているが、1910年代末の在伯同胞社会では既に子弟教育をめぐる邦字新聞の社説などが「伯主日従主義」的な視点から論じている。この子弟教育(児童教育)に関する最初の社説は1918年11月の伯刺西爾時報であった。この社説ではブラジルの教育令に従う教育を

先ず受けさせ、「日本人の長所美点を身につけさせる」ために、「補習教育(日本語教育)」を施すことも重要であると論じている。つまり、日本語は日本人の徳目を身につけさせるための手段(道具)と考えられていたのであった。また、この社説では日本と国情を全く異なる伯国に存在する児童には、日本人の長所美点がよく理解できるような独自の教科書編纂が必要とも主張されている。10年代末から、社説に限らず、邦字新聞紙面にはたびたび子弟教育を巡る言説が取り上げられていくようになる(注6)。

この当時(1910年代から20年代後半にかけて)、子弟教育のモデルは伯主日従主義に基づく、国粹主義的ナショナリズムの影響をほとんど受けない子弟教育論が展開されていたことが共通の特徴であった。そして、伯国教育の補助教育としての日本語教育は「徳育教育に尽くし日伯合金の善良なるブラジル国民養成」(注7)を目的としてもったものでもあった。この時代の邦字新聞に出現する議論を考察するとすでに短期的な出稼ぎではなく、永住を前提にしたものであることを共通の特質としているように思われる(注8)。

この時期にはすでに記述言語として、当時既に発行されていた日本語新聞の中に「日伯混成語」が登場するのであるが、この言語を巡る言説は存在していない。

中・長期的出稼ぎ戦術／植民地・在伯同胞社会 —「日本語」共同体の生成—(1920年代)

コーヒー耕地時代に続く1920年代には短期的出稼ぎ戦術に代わる中・長期的な出稼ぎ戦術が様々な状況の変化を条件に移民の間に析出されはじめた。移民たちはコロノ制度が実は奴隷制の代替的制度であり、この制度下では貯蓄が不可能であるという事実を認識しはじめた。また、この時期にはサンパウロ州奥地で大土地所有制が崩壊し始め、日本移民を始め外国人移民たちに農地(土地)獲得の可能性が出現していた(注9)。こうした状況の変化を条件として、新たな生活戦術が析出されるのである。新しい生活戦術は借地農、自営農となって、時間をかけて貯蓄を行い、日本へ「錦衣帰国」を行なうというものであった。この戦術の実践の舞台となったのが日系人の地域エスニック共同体—植民地であった。

こうした植民地はすでに1910年代に出現しているが(注10)、植民地形成が活発化するのが1920年代、そして質的に最盛期を迎えるのは1930年代であった。植民地というエスニック集団地のタイプは様々であり、『移民80年史』(1991:51-52)によると(注11)、①自然発生的な入植、②移民などによって分譲された土地への入植、③日本の民間資本による分譲された土地への入植、④連邦ないし州政府造成植民地への日本移民の大量入植などがあつた。

植民地は日本的ムラの組織をモデルに社会組織化が行なわれ、そこには擬似ムラ意識のような感情も後には醸成されるようになる。植民地の社会組織の主要な機能は一方において共同体とし

ての道路、衛生、冠婚葬祭、農業などの領域の管理運営であり、他方においては子弟教育の実施であった。特に子弟教育は植民地が奥地の未開地に形成されるケースがほとんどであったことから既存の教育機関もない中でゼロから出発しなければならなかった。前節で概観したように、若い構成労働力を主体にする「構成」家族がブラジルで解体し、青年層による新たな家族が形成され子供が誕生するようになったこと、1920年代からは家族構成の中に多くの子供が含まれるようになること、しかも20年代半ば以降国策移民として移民数が急増していく(注12)中で、植民地においてはこれらの子弟を巡る教育という問題が出現し、原始林を開墾した新開地の中で教育を受けずに成長する二世(注13)たちの教育問題は日本に帰国するにしろ、当面二世たちをどのように育てていったら良いのかという問題が基本であった。前述の輪湖によれば、珈琲園移民から脱して植民地形成熱が勃興した際、子弟教育は俄かに大問題となっていったが、子弟の教育方針に関しては確固たるものが定まらなかったという。

其後植民地熱が勃興し、邦人集団地が到る所に簇出するや、教育問題は非常に強力な力を得、漸次之が植民地の中核的問題をなすに至ったのであります。然しブラジル教育か、日本教育か、それともチャンボン教育かに就いては、移住者自体に確固たる方針が定まらぬため、議論は百出して帰趨を知らずという状態が永く続いたのであります(注14)

しかし、1910年代後半から20年代半ばにかけての時期は邦字新聞に見る限り、子弟教育に関する、非常に鮮明なスタンスが認められる。それはブラジルへの永住を前提とする伯主日従主義に基づくブラジル教育の重視と「徳育教育」を中心とする日本語による補習教育の実施であった。邦字新聞は移民に対して折りにつけ、ブラジルへの永住ということを主張しているのだが、移民の心情としては、ブラジルでの出稼ぎ期間が長期化する中で、「カボクロ(Caboclo)(注15)」化する子弟をどのように育て上げるかが最も根本的問題だった。

ブラジル時報紙は1921年8月三回にわたって、社説において「児童教育は何ぞや」を論じているが、この社説の論説は子弟教育はブラジル式を主体とするが、ブラジルの教育には人間教育としての「修身」教育が不在であり、この道徳をどうするかが問題であり、日系社会にあって「修身教科書」の編纂が急務であると主張している。(注16)そして、翌年7月には社説で日系児童向けの修身用教科書編纂に関して、かなり具体的な意見が開陳されている。この「ブラジル式を主体」とし、人間教育としての、日本語による徳育教育を従とする教育モデルの析出は多分に、その当時、植民地に創設された教育機関をめぐる状況とも関連していた。植民地においては第一次世界大戦中に南部三州のドイツ人学校が当時のブラジル教育令(10歳未満の児童への外国語教授の禁止とブラジルの地理・歴史教授の義務)に従わずに問題をかもし出したことを勸案し、学校を設立してはそれを「州または郡に寄付し、係官の監督の下にこれを経営したのである。邦人小学校は、そのや

うにして州又は郡の公認を得、また有資格のブラジル人教師を得」(注17)というかたちを取る場合が多かったのである。換言すれば、植民地の学校はその初期よりブラジルの公認の小学校としての形式をとっていたのであり、いわゆる二言語教育体制が敷かれていたのである(注18)。この二言語教育体制は基本的に午前中はブラジル教育省のカリキュラムに沿った「ブラジル学校」、午後からは「日本語学校」(補習教育)という構造をもつものであった。

1920年代のに邦人小学校に関する資料はほとんど存在していないが、30年代初頭の移民社会の子弟教育の状況については伯刺西爾時報社編『伯刺西爾年鑑』(1938)がつぎのように比較的詳細に記述しているので、それを引用しておこう。

各校日本語部の教授様式は概ね日本式で6学年制を以てし、中には高等科以上を設けて居るものもある。学科目は国語、修身、算術、地理、歴史、理科、体操、唱歌で、教科書は日本の国定教科書に依るため、伯国で生まれた児童に説明しても諒解されぬ事が多いという。葡語部は学科目等すべて聖州教育令によって行なわれ、両部の授業は午前と午後に分けて行なわれている。

茲に注意すべきは日本人教師と伯人教師との教授法、児童訓育に対する理念、規律、訓練等が異なるため往々にして午前一方の教師に受けた訓導を午後他方の教師により全然覆される様式に依り訓練されるため遂に去就に迷わしめられ、ひいては日伯両語教師の反目を来す如き現象を度々見る事がある(注19)

20年代半ばには、外国語としての日本語を子弟に教えるべきだという主張が日伯新聞に見られた。日伯新聞のスタンスも伯主日従主義にたつものであるが、ブラジル時報紙が日本語による修身教育(徳育教育)を主張するのに対して、日伯新聞は、「日本教育と日本語教育を取り違えて」はならないという点から「日本語は一つの外国語」として教えることが肝要と主張している(注20)。また、日伯新聞ではこうしたスタンスから徳育教育よりも、子弟の専門学校以上の学校への進学的重要性も説かれている(注21)。

伯主日従主義による子弟教育というモデルは1920年代半ばまでかなり卓越した。もちろんブラジル時報の説く「修身教育による」徳育教育＝日本人教育、日伯新聞新による「外国語としての日本語教育」といった伯主日従主義の内容における多様性はあったものの、移民社会ではブラジル時報の主張が一般的な心の佇まいであった。

1920年代、ブラジル・ナショナリズムは具体的なかたちで移民一般、または集団地へと影響を与えることはなかったが、ナショナリズムは法案審議などを通じて、一部エリート層(出先官憲、教育現場、新聞社など)の間では大きな懸念となりはじめていた。こうした動きは外部からの圧力に対して、固まりかけた子弟教育のモデルは揺るぐことになる。こうした「混乱」を懸念した日本政府の

出先官憲・サンパウロ日本国総領事館は1925年にはじめての「子弟教育問題懇談会」を開催し、移民社会における子弟教育のあり方を討議する場を設けている。

当初[20年代半ば頃]の、日本政府の日系子弟に教育をめぐるスタンスは北米などの排日運動の経験、ブラジルのナショナリズムへの懸念から、伯主日従主義に徹したものであった。1925年7月19日コチア小学校新築校舎落成式の総領事代理原口七郎は「特に小学校の先生、我が忠君愛国主義は当伯国に於いては、教育すべきものにあらず。総て伯国を背景にした教育の出すべきなり。宣しく伯国の法規に随いて教育するを要す」(注22)とこの立場から訓示を述べている。

この懇談会開催を契機にして、在伯同胞社会のなかに、子弟教育をめぐる中央機関が設置されていくことになる。子弟教育の中央機関は1927年に「在伯日本人教育会」が設立され、1929年にはこの機関が社団法人「サンパウロ日本人学校父兄会」に改組され、各地に部会を設置することで、各植民地の「小学校」は中央機関に統合された。そして、1930年には定款の一部を改正し「ブラジル日本人教育普及会」(注23)へ、さらに1938年にはみたび「ブラジル日本文教普及会」に改称・改組されている。

植民地形成とともに高揚した子弟教育に関する懸念は植民地での子弟教育機関(小学校)を創設させることになった。1920年代半ば(26年)現在、植民地の「小学校」(注24)数はサンパウロ総領事館管内30校、パウルー領事館管内31校、合計61校に達している(注25)。そして、その数は5年後の1931年には総数122校、収容生徒5千人に達している。

子弟教育をめぐる中央—地方組織の創設は散在する植民地間がネットワークで結ばれ、それが総領事館に置かれた中央機関へと統合され、日本という国家と繋がったことを意味するものであったが、こうした植民地間のネットワークを補強し「在伯同胞社会」という想像のエスニック共同体(あるいは日本語共同体)や「在伯同胞」というエスニックアイデンティティの生成に大きな役割を果たしたのは邦字新聞を中心とするエスニック・メディアの整備と流通体制の確立であった。ブラジルの邦字新聞は1916年の週刊南米と日伯新聞の発行をもって開始され、その後様々な新聞が発行されている(注26)。主要新聞社は1932年当時、それぞれ自前の印刷設備を所有し、新聞印刷を行っていた。38年には主要邦字新聞は4頁から8頁の日刊となった。1933年当時の最大発行部数は8000部程度であったが、38年には日伯新聞19500部、伯刺西爾時報17000部、聖州新報9000部、日本新聞5000部、アリアンサ時報(37年にアラサツバに移り、日伯共同新聞と改称)5500部、ノロエステ民報(34年に北西民報と改称)4500部に達した。この当時の日系世帯数は約4万世帯と推計されており、邦字新聞がいかにかに読まれていたかが看取されるだろう。輪湖俊午郎が1939年に実施した「邦人の新聞並びに雑誌講読数」に関する調査では、調査対象者数11567世帯に対して、邦字新聞購読世帯数10154、男子雑誌5967、婦人雑誌1168、子供雑誌

1078となっており、「新聞の如きは9割に達し、將に新聞の天下と言ふを得べき」普及率であった。また輪湖は「さらに驚いたことは一萬五千家族、伯国在住年数平均十一年と言ふに拘らず、伯国語の雑誌などは一冊もなく、新聞が僅かに百部内外であったが、大部分は都市生活者のインテリ層に限られていると言ふ貧弱さである。これでは伯国政府が心配し出す（日本人移民不同化論）のも無理はない」と述べている。(注27) また、サンパウロ市内だけでもサン・ジョゼー、博友堂、日本堂という日本語印刷所も存在していた。10年代後半から生成されてきた日本語共同体では30年代に、これらの印刷設備を利用して定期刊行物以外にもさまざまな出版物が出版されるようになった。(注28)

日本とブラジルの国境を超えた商品の流通体制は移民船貿易を通じて支えられていた。ブラジルには日本移民導入前から日本に本店を持つ商店が進出していき、移民渡航後は移民自らが多くの商店を開業した。これらの商店には1919年開店の瀬木商店をはじめ、20年代から30年代初頭にかけて、中矢、遠藤、国井、羽瀬などの商店が開店し、移民船貿易は植民地での経済的安定や上昇をある程度達成した移民たちの需要に対応してきた(注29)。商品の中には数多くの日本書籍も含まれており、書籍輸入を専門とする業者も出現している。

日本書籍の中心的な購入者が各植民地に組織された青年会であった。『移民八十年史』によると、青年会には修養部という部門が設けられていて夜学、日曜学校を主催するほか、青年雑誌(例えば大日本雄弁会講談社(現在の講談社の前身)の『雄辨』、評論雑誌『現代』、娯楽雑誌の『キング』、『講談倶楽部』、『婦人倶楽部』、少年少女向けの『少年倶楽部』、『少女倶楽部』)などが青年会の経費で購入され(サンパウロの書籍輸入店から)会員間で回覧された。

日本雑誌の回覧によって、植民地の青年の読解力が進んだことは想像外のものがあつた筈である。と同時に、これらの雑誌に網羅されている日本の風潮が、そのまま青年たちの情緒や指揮を形成するのに大きく与つたのであつた。1930年代に入って、日本の“国粹主義”的思想と行動が高まり、軍の発言力が強くなって来ると、諸雑誌の内容もこれを反映迎合したものとなり、それが植民地の青年たちの思考を左右し縛り付けることになった(注30)。

以上のように、在外公館の主導による子弟教育をめぐる植民地間ネットワークの生成と邦字新聞や日本からの輸入書籍、邦人社会における出版物などを中核とするエスニック・メディアの整備(増加)と流通体制の確立を主要な条件としながら、ブラジルに「日本語」共同体が生成されていき、特に1930年代には、こうした構造を通じて、日本のナショナリズム、国粹主義的思想が植民地を席卷し、移民や農村青年たちの思考や行動、価値観などに大きなインパクトを与えるようになるのである。

二つのナショナリズムと『国語』イデオロギーの台頭(1930年代)

既に述べたように、1924年に日本政府による渡航費補助、日本経済の疲弊、イタリア政府の移民禁止に伴うサンパウロ州における労働力不足などを背景に、1920年代半ば日本移民が急増し、30年代初頭にそのピークを迎え、33・34年当時、日本人移民のサンパウロ州への外国人移民数に占める比率は4割を超えた。こうした大量の移民流入や先着移民の経済的な安定などを条件としながら、1930年代は植民地＝地域日系共同体が全盛時代を謳歌していた時期でもあった。

また、30年代は日本語教育分野のみならず、各地域に散在していた各植民地は在伯日本人文化協会や日伯産業組合中央会などの中央機関を通じてその頂点である在外公館に統合され、そこを通じて日本(天皇)へと統合される構造の中に位置付けられていった。当初、週一回の発行であった邦字新聞は漸次発行回数を増やし、1938年には日伯、ブラジル時報、聖州新報という主要三紙は日刊となり、移民たちにさまざまな情報を伝え、移民の『心の拠り所』の一つとなっていった。これらの新聞はブラジルの国内情報、移民消息、集団地事情、農産物の傾向や市況、日本語教育界の動向など幅広い情報を提供した。それに加えて、新聞は祖国日本の動向も盛んに伝え、特に満州事変以降の軍国主義的日本に関する一連の報道は異国にある移民たちの心情に強い影響を与えることになった。

そして、この心情は移民の子弟教育(日本語教育)へと具体的に跳ね返っていった。20年代までの植民地における子弟教育は伯主日従主義を基本とするものであったが、30年代初頭より、そのモデルは日主伯従主義、和魂伯才主義へと大きくシフトしていくことになった(注25)。

日本の秀れたものを子弟に継承させる方法は日語教育をおいてはないと信じ、世界無比の皇統連綿の神国、世界を導く選ばれたる民族、悠久の大義、八紘一宇、東亜共栄圏、絶対不敗の皇軍、といったことを環境とは全く無縁な次元で子弟に注ぎ込む努力が続けられた(注32)

明治この方の国家至上主義教育を受け、天皇即国家、天皇は父、国民は子、世界に冠たる日本、という思想は移民たちが既に身につけて来たものであったが、日本が異常な事態に突入するとともに、移民たちは改めてそれを自分のことと感じて心情的な傾斜を深めたのであった(注33)

日本臣民を生成するための教育あるいは「臣民」であることの確認のために、1930年代には植民地において、前山が天皇崇拜シンボリズムと呼ぶ儀礼コンプレックス(注34)が創造されることになった。そして、この天皇崇拜儀礼コンプレックスの中核的な場が「日本学校」に他ならなかった。前山はこの「日本学校」とそこで行われる天皇崇拜儀礼コンプレックスについて次のように記している。

「それ(日本学校)は今日のごとき単なる語学教育の場ではなかった。子供も、青年男女も、

そして親たちもそこで真の「日本人」となり、真の「人間」となることが期待された。そこでの行事に参加しない日本人は集団の一員と見なされず、日本人とも見なされなかった。日本学校は日本人会によって運営され、そこには必ず「御真影」が安置され、教育勸話が備えられていた。日本学校は子弟教育の場であると同時に、日本人会の集会場であり、青年団・処女会の活動の中心であり、さらには産業組合の事務所であったりした。新年の四方拝、紀元節、入植記念祭、天長節、卒業式などに際しては、生徒だけでなく、植民地の全員が参列して、皇居遥拝（「東方遥拝」とも言って、「日本遥拝」を意味した）、御真影への最敬礼、勸語奉誦、君が代斉唱などの儀式が、大抵の行事に先行して行われた(注35)

こうした天皇崇拜シンボリズムは移民個人を植民地の日本人会—中央統括機関—在外公館という象徴構造のなかに位置付け、日本の天皇へと直接に結びつける機能を果たしていった。

20年代には日本人の徳目を継承させる徳育・修身教育の手段としての日本語は、30年代、特に後半になると、日本臣民／民族を構成する必須条件としての「国語」へとその意味を大きくシフトしていった。このシフトには子弟教育中央機関に対する様々な補助(学校建設補助金、教師の派遣、奨学金など)を行なうことを通じて、日本という国家(の遠隔地ナショナリズム)もまた強く関わっていた(注36)。

30年代、日本語と日本民族の本質は同一なものとして認識され、国粹主義的な民族(精神)観、国語観などが生み出されていくことになった。こうした国粹主義的な「国語」観は1935年サンパウロ市ピンニェイロス地区に暁星学園という実務学校を創立した岸本昂一によく認められる。岸本は1947年という戦後の早い時期に出版した『南米の戦野に孤立して』という著書の中で、日本語教育や外国語学習などに関して自説を展開している。

岸本によると、「日語教育とは単に文字を教えるということだけではない。日本歴史をたて糸として生成発展して来た民族の精神建設をいう」(注37)そして岸本は続けて「日本語は日本人の血液を持つ者にとっての大地であり、太陽であり、水であり、空気であるのだ」「日本語の中には、民族の純粹至高なる脈搏、流れて止むこと無き壯大雄渾なる歴史が呼吸しているのであって、言葉の響きの中に、文学の一句一節の中にも祖先の血管が脈々と波打って居り、その精神が沁み込んでいるのだ」(注38)と主張し、「国語」なしの海外発展は「民族の本質」を失って形骸だけを止めることになってしまうと結論づけ、日本民族は世界の果てにいても、「国語」とともに永遠に行き続けていかねばならないと主張している。

岸本は国粹主義的な「国語」観を強くもっていたが、日本民族の子弟にとって外国語学習(この場合ポルトガル語)を不必要とは考えていない。逆に岸本は日本民族は積極的に外国語を学ばねばならないと主張している。その理由は「彼等を啓蒙し、強化し」そして「私たち自身を、そして日

本を、世界的に押しひろげてゆく」ためであり、「人として必要な学問技術」だからである。こうした認識から岸本は日本民族精神建設に不可欠な「国語」と、実際的実用的な技術のために不可欠なポルトガル語の双方を子弟に教育するという立場を主張しているのである。このような立場は、この当時、邦人社会の中で流布していたフォーク概念でいえば、『和魂伯才論』であり、それはちょうど20年代の伯主日従主義を逆転させた立場であったといえるだろう。岸本の、『国語』=民族精神、「ポルトガル語」=実用的機能という「和魂伯才論」は決して彼独自のものではなく、当時の移民たちのなかでかなり共通する、内部矛盾する子弟観であったといえるだろう。

もちろん、こうした移民の心情は日本ナショナリズムからの影響によってのみ形作られたものではなかった。30年代はまた、ブラジル・ナショナリズムの高揚した時代、盛んに外国人移民の同化政策が展開された時期であり、こうした二つのナショナリズムの〈狭間〉というポジションから立ち上がってきたものであったと解釈するのが的を射ている。

植民地が全盛期を迎えた30年代は、日本移民にとって受難の時代でもあった。ブラジルのナショナリズムは1920年代から徐々に台頭し、20年代には様々な外国人移民制限法が実施された(注39)。1923年の第一次排日運動から始まり1934年に「移民二分制限法」が国会で可決されるまでの時期は日本移民導入反対論が急速に高まった時期であった(すでに見たように、この時期が戦前移民の全盛期であった)1930年ナショナリゼーション政策を打ち出すゼツリオ・バルガスが革命で政権を奪取し、臨時大統領に就任した。その4年後バルガスは国内労働者や定着している外国人労働者の利害を守るという観点から大統領令19482号、いわゆる「移民二分制限法」によって、外国人移民の入国を制限する法案を憲法制定議会に提出した。

バルガス政権のナショナリズム政策に先だって、日本移民へ直接影響を与えた政策決定を行ったのは日本移民の大半が居住していたサンパウロ州政府であった。それは主に教育領域におけるナショナリゼーション政策ともいえるべきものであった。サンパウロ州政府は次のような内容をもつ州教育令を公布した。(1)外国語以外の科目はすべて教授すべし。(2)10歳未満は年齢の如何にかかわらず、国語文盲者に外国語を教授することを禁ず、(3)ポルトガル語及びブラジルの地理・歴史の教授は監督課より指定する時間数を以て、生来のブラジル人ポルトガル人又は帰化人の有資格者により担任せらるべきこと、(4)外国語の教授は検定試験合格者たること、(5)外国語の教授に使用する教科書は予め監督課に許可を得たものに限る。ブラジル国民意識の涵養に有害なる影響を与える教科書の使用を禁ず、(6)幼稚園及び育児所の学校担任者はブラジル人たる教員に限る。但し正確なるポルトガル語を話し得る外国人はその助手たることを得る。

この州教育令はしかしながら、それほど大きな影響を植民地内の「小学校」に与えたわけではなかった。まだ、この法令に対しては外国語教師の資格試験受験、使用教科書の認定などである

程度の対応が可能であったためである。

ナショナリゼーション政策が直接、移民の生活や子弟教育などに影響を与えるようになるのは、1937年11月のクーデターを経て、独裁政権を樹立したバルガス大統領による、中央集権的なエスタード・ノーボ体制が確立された後の、1938年以降のことであった(注40)。38年から39年にかけてはナショナリゼーション政策の立法が活発化し、外国人移民とその子弟に対する強硬な同化政策が実施されるようになった。その政策は移民の入国、居住、植民地形成、初等教育、商工業活動など移民の生活全般に及ぶものであった。特に、日本移民にとって大きな痛手であったのは、初等教育活動の規制と出版物規制であった。

1938年8月、外国人入国法の施行細則が交付されたが、その第93条において、農村地帯(注41)においては14歳未満の者に対する外国語教授禁止(サンパウロ市及びサントス市は農村地帯ではなかったので11歳未満)のほか、①教師はブラジル人に制限、②教科書はすべてポルトガル語で記述されたもの、授業はすべてポルトガル語へ制限、③初等・中等科ではブラジルの地理・歴史教授の義務化などが細則として盛り込まれた(注42)。さらに、この翌年の1939年9月に、サンパウロ州政府は州内私立学校を対象に「サンパウロ州内学務官憲に対する訓令」を發布し、州民あるいは州内に居住する子どものブラジル化を推し進めようとした。この「訓令」の骨子は①教室内に非国家的意識を与える表象物の設置禁止、②国家・国旗の歌及び愛国的唱歌の授業義務化、③外国語授業の制限(1日二時間まで)、④私立学校の催し物のプログラムのなかに外国語や外国精神を高揚するが如き種目の挿入禁止からなるものであった。

こうした一連の外国人移民及びその子弟に対する同化政策は「本国的色彩を失うこと極めて急速なるもの」(注43)があったし、70年史によると、「法令に従う限り、子弟に日本語を教えることはこの時点でもはや不可能になった」(注44)という。サンパウロ州政府によると、外国人入国法施行細則のうち、農村地帯小学校に関しては、その条項のために、学校経営不能に陥り、当局とり閉鎖命令を受けた学校が235学校に達し、そのうちの219校が日本人関係であったという。そして、1938年12月には、ブラジル全土の外国語学校に対する閉鎖命令が公布され、サンパウロ州内で294校、そしてブラジル全国では476校の日本(語)学校が閉鎖に追い込まれたのであった。

また、ブラジルにおける日本語教育の中心的機関であった『ブラジル日本人教育普及会』は1938年10月に定款改正を行い「ブラジル日本文教普及会」と改組され、従来の事業を拡大しようとする矢先、前述の外国人入国法実施細則が公布され、傘下の日本語学校の閉鎖という事態に直面したのに加えて、外国人団体取締法(第6条)により、外国の政府・団体又は外国に居住する個人からのいかなる名目の補助・寄付・援助などを受けることが禁止されたこともあって、日本語教育中央機関の活動も停止された。

一方、1910年代後半から発行されてきた日本語新聞もまた、ナショナリゼーション政策の影響を受けることになる。1937年7月ブラジル政府は外国語新聞・雑誌取締規則を公布した。この規則は新聞、雑誌の刊行に当局の許可が必要と言う程度のもので深刻な影響はなかった。邦字新聞主要三紙が日刊になるのは1938年後半からで、この当時の植民地社会では新聞をはじめ文芸活動などが益々隆盛を極めていたが、1939年9月以降、第二次世界大戦へ拡大する様相が強くなると、記事検閲制—社説主要記事などのブラジル語訳添付—ブラジル語欄併設へと規制が厳格化されていき、1941年8月には外国語新聞発行禁止令が公布され、日本語新聞は約四半世紀に及ぶ活動の幕を閉じることになった。

以上のような、一連のプロセスを通じて、移民は自らの「国語」やその教育機関、報道機関を失うことになった。子弟を日本民族=臣民として育て上げることの困難さ、情報の欠如、日本民族として生きることの困難さ、こうしたファクターから日本移民には日本ないし帝国主義的拡張政策の結果、植民地化した土地への「帰国」への希望が急激に増加した。1939年のノロエステ、パウリスタ延長線「同胞現勢調査報告」によると当時の移民の85%が帰国を希望しているように、二つの国家ナショナリズムの〈狭間〉において、戦時中の暗い時代へと移行していくのである。

1941年12月7日(ブラジル時間)太平洋戦争が勃発し、翌年1月末にはリオデジャネイロで汎米外相会議が開催、ブラジルを含む10ヶ国は枢軸国との経済断交を決議、ブラジル政府はさらに1月29日対枢軸国との国交断絶を決定した。この前日にはすでに在リオ帝国大使館、在サンパウロ総領事館など在外公館は閉鎖され、一夜にして移民は在外公館を通じての日本とのつながりを断たれた。42年1月にはサンパウロ州政府保安局は敵性国民となった日・独・伊三国人に対して、以下のような取締令を公布告示している。

ブラジルの日・独・伊との国交断絶に当たり、本州居住当該国民に対し、以下の事項を禁止する

1. 如何なる者も当該国々語にて記されたものを頒布すること
2. 当該国々歌を唱し、あるいは演奏すること
3. 当該国独特の敬礼をなすこと
4. 多数集合の場あるいは公衆の場において、当該国々語を使用すること
5. 当該国政府要人の肖像を人の集まる処、あるいは公衆に展示すること
6. 保安局より発給の通行許可書(Salvo Conduto)なくして、一地域から他地域に旅行すること
7. 私宅内といえども、私的祝祭の名義をもって集合すること
8. 公衆の場に於いて国際時局に関し、討論あるいは意見の交換をなすこと

9. 以前に正当な許可書を取得しているとも、武器を使用すること、また武器弾薬あるいは爆弾製造に使用し得べきものを売買すること
10. 保安局に予告なくして、転居すること
11. 自己保有の飛行機を使用すること
12. 保安局より許与される特別許可証なくして空路旅行すること

42年1月の対枢軸国との国交断絶により、「敵性国民」となった日本人移民たちは戦時中、以上のような生活上の様々な制約を受けることになったが、こうした状況の中で、移民の唯一のコミュニケーション手段であった日本語は家庭内のみで使用可能なものに制限されたのであった。

(サンパウロ大学)

1 ————— 1920年代からのブラジル向け日本移民増加にはいくつかの理由がある。ブラジル側の理由としてはイタリア政府が労働条件の劣悪さからブラジル向けのイタリア移民送出を禁止し、サンパウロ州内のコーヒー耕地の労働力が不足したこと、日本側の理由としてはまず第一に、日露戦争の反動で1905年から13年頃まで日本社会は農商部を中心に不況が継続し、1918年には米騒動、20年には世界恐慌発生にともなう国内景気の更なる後退、23年には関東大震災も起こり、国内景気が継続的に悪化していたこと、第二に政府は景気対策と人口問題解決の一環として移民を奨励したのであるが、肝心の移民先が徐々に制限されていたということがあった。例えば、1908年には日米紳士協定により、日本からの北米向け移民は自粛され、1907年にはカナダとのルミュー協約によりカナダ移民を自粛、さらには排日運動の高揚などもあり、21年には米国が日本からの移民に完全に扉を閉ざしてしまった。こうして、北米を中心とする移民制限・禁止措置を背景に南米、特にブラジル移民が注目され、しかも政府による「移民」事業が国策として推進されたこともあって、数多くの移民がブラジル向け渡航したのである。

2 ————— 前山隆「同伴移民、妻移民、子供移民 — ブラジル日系女性移住体験を中心に —」『阪南大学学会編『阪南論集 人文・自然科学編』第36巻 第3号 2001年1月 (pp.1-14)pp.4-5

3 ————— Teiiti Suzuki, *The Japanese Immigrant in Brazil : Narrative Part*, Tokyo ; The University of Tokyo Press. 1969 p.189

4 ————— この借用の過程に関しては半田知雄[1970]のファゼンダでの生活に関する記述の中で断片的に記述されている。半田知雄(1970)『移民の生活の歴史』家の光社 戦前において、すでにブラジル人、外国人移民との接触の中で、日本移民は『ポルトガル語混じりの日本語』『日伯混成語』を生活言語として発展させて、コーヒー耕地から植民地へと生活戦略を変更し、ブラジル滞在をより長期化する中で、より「洗練」されたものへと発展させていた。しかし、戦前期において、自らの集団が話す言語に関する言及はほとんど存在していない。その中で例外は半田である。半田はすでに1928年に「日伯混成語の使用」という論考を聖州義塾機関誌『塾友』に発表している。これがおそらく移民による自らの言葉に対する最初の言及であった。半田は「日本語、ポルトガル語ともに文法的に正しいかたちで混ぜることが大切」と主張し「パパイ(Papai)はナ・ロージャ(NA LOJA)にいるのナ(NA)はいらない」といった例を示している。移民たちが自らの話す言葉を新たに「コロニア語」というレッテルを貼り、発見するのは戦後50年代のことであった。この当時、日系社会ではブラジル永住を背景にする「コロニア」「コロニア人」アイデンティティを析出してきており、そうした新しいアイデンティティの在り方とこの「コロニア語」というレッテル貼りは密接に関連している。この点に関しては続編にて詳述される予定である。

5 ————— 輪湖俊午郎(1939)『パウロ管内の邦人』サンパウロ

6 ————— 例えば、1918年11月12日付けブラジル時報には展南生が「植民地の児童教育」という寄稿文を、また同年12月20日の時報紙には榛葉彦平(平野運平の実弟)が「子弟の教育はどうするか」という寄稿文が載せられている。

7 ————— 馬淵至宏(1927)「在伯子弟教育論」

8 ————— この当時の新聞の論調は永住主義を基本としていたが、これは一部移民知識人層あるいはエリート層の拠って立つ視点であり、庶民としての移民間では永住という意識はほとんど存在していなかった。移民間では帰国を前提にしつつ、無教育のままに学齢期に至る子弟教育に対する懸念が最大のものであり、しかも一方では伯主日従主義は日本へ帰国した際の、再適応、日本人としての資質といったものと密接に

関わっていたし、他方においてはブラジルという国家枠組の規制も受けつつ、析出されてきたものといえるだろう。また、サンパウロ市のような都会において、10年代から20年代にかけて、日本語教育に従事したのは「日本キリスト教」ともいえるべき宗教者たちであったことは注目すべき事実であるように思われる。

- 9 ————— このサンパウロ州内における大土地所有制の崩壊過程やそれに伴う日本移民の植民地形成に関しては、齋藤廣志(1960)『ブラジルの日本人』丸善に詳細な記述がある。
- 10 ————— 最も古く形成された植民地はイグアベ植民地で1913年から開拓が行なわれている。これは東京シンジケートがサンパウロ州政府から州有地を無償で交付され、そこに植民地を創設したものだ。日本の民間資本による植民地造成のケースである。
- 11 ————— 移民八十年史編集委員会編(1991)『ブラジル日本移民80年史』ブラジル日本文化協会 pp.51-52
- 12 ————— この時期の急増の背景には国策移民となったこと以外にも、日本経済の停滞、そしてブラジル側ではイタリア政府によるブラジル向け移民禁止によるサンパウロ州内コーヒー耕地での労働力不足などのファクターが交錯している。
- 13 ————— 二世という概念はフォーク概念であり、ここには日本生まれの子弟とブラジル生まれの子弟がともに包含されている。二世が内部的に分裂をし、準二世と二世という新たな範疇とアイデンティティを析出するのは後のことである。
- 14 ————— 輪湖俊午郎(1939)『パウルー管内の邦人』
- 15 ————— カボクロ(Caboclo)には様々な定義があるが、日本移民の場合には、教育もなく土地をもたない農村労働者であり、常に否定的なイメージを伴う言葉として使用されてきた。日本移民が植民地生活の中でもっとも日常的に出会うブラジル人でもあった。「同化はカボクロ化」であるという言説が植民地社会の中で非常に一般的に使われた。
- 16 ————— ブラジル時報 1920.7.30日付けから同年8.13日付けに三回にわたって掲載された社説「児童教育とは何ぞや」
- 17 ————— ブラジルにおける日本人発展史刊行委員会編『ブラジルにおける日本人発展史』(下巻) p.198
- 18 ————— この学校の経費はしかしながら、公認小学校となっても、その大部分を邦人側が負担しなければならなかった。経費の支出は植民地における主生産物であったコーヒーが採取できるようになって初めて解決したのであり、公認小学校となるのは植民地形成後4、5年を経たからであったという。
- 19 ————— 伯刺西爾時報社編(1938)『伯刺西爾年鑑』サンパウロ p.108
- 20 ————— この日伯新聞の主張は当時としては斬新な主張であったが、同胞社会では受け入れることは出来ない主張でもあった。こうした主張を展開した知識人としては半田知雄やアンドウゼンパチなどがいる。アンドウは思想誌『文化』の中で同化論、永住論という立場から、日系二世への日本文化伝承のための「外国人教育としての日本語教育」という主張を開陳している。アンドウのこの視点は当時の同胞社会一般には受け入れられなかったものの、戦後1958年に『二世とニッポン語問題』という小冊子を出版し、戦後のコロナ版日本語教科書製作運動に大きな影響を与えた。
- 21 ————— 日伯新聞 1925.8.7日付け社説「第二世教育の根本基調」
- 22 ————— 石原辰雄(1979)『コチア小学校の50年—ブラジル日系児童教育の実際(1916-1966)』サンパウロ[私家版] p.25
- 23 ————— 「ブラジル日本人教育普及会」は1937年に『日本語読本』全八巻とその教授用参考書八巻を編集、発行した。この教科書はポルトガル語の翻訳をつけて州当局へ提出され認可を受けた、ブラジル初の日本語教科書であった。しかし、当時の軍的色彩や国家主義的思想は認可を伴うものであったことと関連して、極力抑制されたものとなっており、当時の邦人社会からはあまり歓迎されなかった。
- 24 ————— この小学校は「何れも其の設立当初より充分の設備を有していたものでなく、寺子屋式のささやかなものが多く、その教師の如きも、これを本職とする者は極めて稀で、多くは当該集団地に於ける青年又は家長であり、教育放任を重視するに忍びずとして立った人々である」ブラジルに於ける日本人発展史編集委員会編『ブラジルに於ける日本人発展史 下巻』 p.197
- 25 ————— この数字は1934年発行の「サンパウロ日本人小学校父兄会会報第二号」に掲載されているもの、換言すればその時点で存続していたものであり、実際にはもっと多くの「小学校」が創設されていたと思われる。
- 26 ————— 1933年5月当時、在伯同胞社会において発行されていた主要な定期刊行物を示したのが図表3である

図表3 佐伯同胞社会における主要定期刊行物一覽(1933年5月現在)

定期刊行物名	発行	週刊／月刊	ページ数	備考	定期刊行物名	発行	週刊／月刊	ページ数	備考
伯刺西爾時報	ブラジル時報社	週2回	12p	購読料年30ミル	ポブラール	リンス通信社	月刊	4p	少年少女向娯楽
日伯新聞	日伯新聞社	週刊	8p	年30ミル	青空	サンパウロ父兄会	月刊	70p	父兄会機関誌

聖州新報	聖州新報社	週2回	8p	年30ミル	若人	農業のブラジル社	月刊	-	スポーツ専門誌
日本新聞	日本新聞社	週刊	6p	年30ミル	力行の叫び	力行会聖市支部	月刊	19p	機関誌
アリアンサ時報	アリアンサ時報社	週刊	4p	年12ミル	更新	更新社	隔月刊	-	-
物産週報	日伯物産通信社	月刊	20p	-	角笛・おかば・新天地	アリアンサ時報社	月刊	-	-
農業のブラジル	農業のブラジル社	月刊	100p	年30ミル	家庭と健康	互生会	月刊	8p	衛生関連雑誌
波紋	波紋社	月刊	100p	娯楽誌	郷友	耕地通訳協会	月刊	50p	衛生関連雑誌

[出典] サンパウロ人文科学研究所編『ブラジル日本移民・日系社会史年表』1996 p.76

27 ——— 輪瀨俊午郎(1939)『パウルー管内の邦人』

28 ——— 1934年以降には、34年「商工業の友」「学友」(以上雑誌)、「ノロエステ民報」(新聞)、37年「地平線」「南十字星」「羅針盤」(以上雑誌)、38年「産業のブラジル」「文化」(雑誌)、39年「植民」、40年「自然」等が発行されている。

29 ——— 移民船貿易の概観に関しては、森(1998)「(食)をめぐる移民史(1)―戦前のコロノ・植民地時代―」『人文研』No.2 サンパウロ人文科学研究所編 pp.48-70参照のこと。

30 ——— 移民八十年史編纂委員会編 前掲書(1991) p.8

31 ——— 勿論、少数派ではあったものの、子弟への日本志向教育を反対するものたちもあった。それは同化主義に基づくものであり「ブラジル生まれの子供はブラジル人」という認識から出発し、ブラジルの教育を尊重し、ブラジル社会へ同化させるのが先決とする考え方であった。アンドウゼンバチや半田知雄は1930年代の二世像に関していくつかのタイプを析出している。半田(1996)はこの当時の二世を、1) 植民地に生活の根を張った、準二世や一世と同じ立場を取っている二世であって、日本語もよく出来、日本の思想に反発しない種類のもの。 2) 日本人の社会に生活している以上、日本人の話すこと考えることに接触的に反対はしないが、ブラジル人的気持ちを充分持っていて、ブラジル人たる義務感を失うまいとする種類の二世(ブラジルの教育も中学程度及びそれ以上のもの) 3) 二世として最も純粋なもので、ブラジル人としてのアイデンティティを持つことに努め、ブラジルを祖国として生きようとし、「日本精神」に反発する者のグループ(大学生、大学卒インテリ) である。半田知雄(1996)『今なお旅路にあり―ある移民の随想』 太陽堂書店 p.144

32 ——— 移民70年史編さん委員会編 前掲書(1980) p.77

33 ——— 移民70年史編さん委員会編 前掲書(1980) p.77

34 ——— 前山によれば、天皇崇拜儀礼は「日本学校が氏神であり、祭社であった。天皇が御神体であった。經典は教育勅語であった。」という。前山隆(2001)『異文化接触とアイデンティティー―ブラジル社会と日系人―』 御茶ノ水書房 55頁

35 ——— 前山前掲書(2001) p.55

36 ——— 二世の教育の関する日本政府の干渉はブラジルにおける排日運動の材料に使われる怖れがあると危惧する意見もこの当時存在していた。安東義喬は「二世の教育をば日本の外務省が、出先官憲をして扱はせるということは表面のみならず又実質に於いても非常に向この反対を受ける所でありまして、所謂内政干渉とでも謂えば言はれる所であります」と語っている。また、日本政府の干渉は当時の二世インテリたちの、ブラジルナショナリズムの影響を受けたナショナルアイデンティティとの間に相克を起し、いわゆる「菊花事件」を起すことになった。

37 ——— 岸本島一(2002)『南米の戦野に孤立して』 p.200

38 ——— 岸本 前掲書(2002) p.201

39 ——— 1920年代から30年代にかけてのナショナリゼーション政策と日本移民の動向に関しては、三田千代子(1995)や移民70年史に詳細な記述がある。三田千代子(1995)『I ブラジルの外国移民政策と日本移民』『日本ブラジル交流史―日伯関係100年の回顧と展望』 日本ブラジル中央協会 pp.93-116

40 ——— 1937年に成立したバルガス政権下のナショナリゼーション政策では、ブラジル精神(Brasilidade)と国家主義の高揚、国民の形成とその統合が目的とされ、そのために一連の外国移民同化政策が採用された。さらに1940年には37年の政策をさらに進め、①外国人やその子弟の置かれた社会的地理的隔離状態の除去、②同系統の外国人のみの集団地創設禁止、③外国人集団地へのブラジル人家族入植促進、④ナショナリゼーション促進の環境整備、などを骨子とする一連の法令を發布している。

41 ——— ここでいう農村地帯というのは同法施行細則第275条において、連邦府・州の首都及び外国人入国港の境界内に含まれざる領土の全部と規定されている。したがってサンパウロ州では州都であるサンパウロ市と外国人入港地であるサントス市以外はすべて農村地帯という

ことになる。

42 ——— 70年史によると、1938年12月にはブラジル全土の外国語学校に対して閉鎖命令が下され、サンパウロ州内にあった日本語学校294校が閉鎖に追い込まれたと記述されている p.75

43 ——— ブラジルにおける日本人発展史刊行会篇 前掲書 pp.200-201

44 ——— 移民70年史編さん委員会篇「ブラジル日本移民70年史—1908-1978」 ブラジル日本文化協会 pp.74-75 1938年11月には、国語による子弟教育が不可能なブラジルでは民族の発展はないとして、北支への進出のための資金支給をサンパウロ総領事館に嘆願するというエピソードも起こった。

【付記】

本論は大阪大学21世紀COEプロジェクト「ブラジル日系社会における言語の総合的研究及び記録・保存事業」の一研究課題である「ブラジル日系人の『日本語』を巡る状況と言説」に関する研究の一部をなすものである。筆者はこれまでブラジルの日本語を巡る様々な史・資料の収集や調査研究を実施してきたが、本稿は現時点での、その成果の一部を筆者なりに整理し、粗いスケッチを試みたものにすぎない。本稿では紙面の関係もあって時期的には戦前期に限定した。筆者は本稿において、戦前期のブラジルの日本語とそれを巡る諸状況(の変化)を便宜的な三時代区分を行い、それに沿って記述を行ってきた。この研究は現在も継続中であり、あくまで現時点における、筆者の整理にすぎないのであるが、既に本論の続編に当たる戦後期に関しても、①永住戦略/日系コロニアの「誕生」と日本語教育機関の再組織化(1950年代)、②〈コロニア人〉アイデンティティの構築とコロニア知識人による〈コロニア語〉の発見(1950年代以降)、③〈コロニア語〉による〈エスニック日本語〉教育意識の出現—コロニア版教科書製作運動、④コロニア文学運動(土着性議論)と〈コロニア語〉(1960年代から70年代)、⑤グローバル化とブラジルの〈日本語〉—トランスナショナルな日本語教育システムの生成と真正性の問題—(1970年代以降)という時代区分を便宜的にもちいつつ、所与の課題に関する記述、考察を進めており、本年度中には、当該課題研究の成果を公表したいと考えている。

おわりに

工藤真由美

日本語と他言語との接触と言えば、漢語や外来語に見られる現象をただちに思い浮かべ、ポルトガル語であれば「ピロード、トタン」のような外来語の存在や、それによって引き起こされた音声・音韻面での変化結果を（過去の言語接触の定着・残存形態として）考えるのが一般的であろう。しかしここに提示したのは、日本とは反転した位置、環境にあるブラジル日系社会において、優位言語としてあるポルトガル語との接触のなかで、様々な外的諸要因と絡み合いながら、日本語が変容していく動的な姿である。日本各地からの移民によって、接触方言としての日本語のバリエーションが共通語として生み出されようとしながらもこれが保持できず、1世におけるポルトガル語の語彙借用からはじまり、両義的で錯綜した様相を示す2世の言語行動形態を経て、ついには3世においてポルトガル語の方が母語になっていくまでの重層的な動的な展開は、日本国内においては想像し難いが、これもまた日本語の歴史の重要な断面であると言えよう。現在は逆に、ブラジルからのデカセギ日系移民の問題が国内において重要性をもってきている。ここでも日本語とポルトガル語の接触が再度反転したかたちで生じている（優位言語は日本語であり、母語保持の問題が出てくるのはポルトガル語である）が、このような現在の国内的問題を考える上でも、本調査研究は礎石となるであろう。

「うつりゆくこそことばなれ」であるとすれば、今後は、政治、経済、社会的状況のもとでの言語接触によって引き起こされる、日本語の変化プロセスに潜む言語の本質的側面へのまなざしが重要になってこよう。この意味では、沖縄地域におけるウチナーヤマトウグチ（本土日本語と琉球語との接触）への注視が必要であるだけでなく、ブラジルの沖縄系移民社会における、様々な内部的バリエーション（方言）を含みこんでの、琉球語、日本語、ポルトガル語のダイナミックな接触状況の歴史的展開プロセスの解明にも、発展していかねばならないであろう。

本調査研究では、まずは、図と地の関係を反転させて、日本語を見つめなおしてみるという作業を行って見たのである。マクロなレベルでもミクロなレベルでも今後に残された課題は多いが、このささやかな第一歩が重要な第一歩になり、若い研究者に引き継がれることを願っている。

本調査研究においては、様々な方々のお世話になった。とりわけ、言語生活調査と談話録音調査を行ったアリアンサ、スザノ福博村の方々には、心よりお礼申し上げます。日本を出発してサンバ

ウロまでのほぼ24時間のフライト、そのまま深夜バスに乗り継いで9時間、早朝に到着した我々への「やあ、いらっしゃい」という温かい握手からはじまって、ブラジルにおけるゲートボール発祥の地を示す記念碑のある会館でのシュラスコによる送別会に至るまで、あらゆる面で協力を惜しまれなかった現地の方々へは、どのように感謝しても感謝しきれものではない。通常のコミュニケーション経路がポルトガル語になっている3世の方々には、長すぎる調査時間であったかもしれないが、1世、2世では、短すぎる時間であった方々も多かったかもしれない。オーラルヒストリーの側面への配慮が十分にできなかったことが悔やまれる。本調査研究の成果が、ささやかなものではあっても現地の方々へ貢献できることを願っている。と同時に、ブラジル日系社会における日本語の現状を考えれば、このような書記言語によるものではなく、声と映像による記録保存の方がより役立つものになるであろうとも痛感している。なお、この報告書の作成中に、調査に多大なる協力をいただいた弓場哲彦氏の急逝を知った。2世においてさえ、このような状況であって、記録保存事業ならびに、コロニア語研究の緊急性を痛感する。

また、文献調査にあたっては、宮尾進氏(サンパウロ人文科学研究所)、大井セリア氏(ブラジル日本移民史料館)、サンパウロ大学日本文化研究所のお世話になった。国際交流基金サンパウロ日本文化センターにもご尽力いただいた。柴田実氏(NHK放送文化研究所)には談話収録の件で温かいご支援をいただいた。記してお礼申し上げる次第である。さらに中川康弘氏、今井美登里氏、飯塚往子氏、石田由美子氏、畠中みゆき氏、松田香織氏(以上、桜美林大学)、熊崎さとみ氏(信州大学)、大槻清美氏(京都外国語大学)、高木千恵氏、PAIBOON, PATJAREESAKUL氏、PONSAN, TANAN氏(以上、大阪大学)には、調査の実施や事後の文字化作業などにおいて大変なご尽力をいただいた。直接お会いしてお礼を申し上げる機会がないままに現在に至っているが、まずはこの場を借りてお礼申し上げたい。

なお、本報告書に掲載しきれなかった部分については、2003年度文学研究科紀要・モノグラフ編において、データ中心の公開を予定していることも付言しておきたい。

(大阪大学)